

周防畑遺跡群

大豆田遺跡VI

長野県佐久市長土呂大豆田遺跡VI発掘調査報告書

2021. 3

佐久市教育委員会

大豆田遺跡VI出土の「刻書紡錘車」について

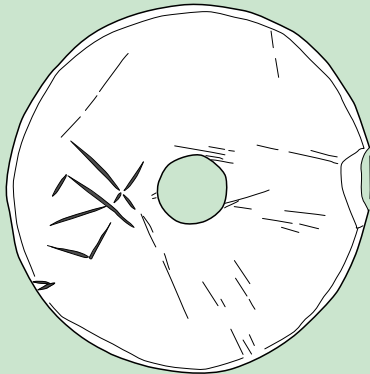
大豆田遺跡VIは佐久市長土呂に所在します。周辺では小学校建設、区画整理事業、中部横断自動車道建設等の開発事業が行われ、多くの遺跡が発掘調査されています。今回の発掘調査は遺跡内で6番目となり、周辺部の調査事例と同じく古代の集落跡が発見されました。

今回、特に注目される出土品として「刻書紡錘車」があります。紡錘車は糸を紡ぐ道具です。土製・石製・金属製が知られています。今回の「刻書紡錘車」はほぼ完形品の石製で、奈良時代（8世紀代）の家跡から出土しました。永く使われたのか擦れて光沢があります。特徴は下面と側面に「○田」と読める刻書があり、上面にも擦れた刻線がある事です。このように文字や記号が刻まれた紡錘車は千曲市松ヶ崎遺跡の「卍」が刻まれた土製紡錘車や佐久市の同じ遺跡群内で「十」が刻まれた石製紡錘車が知られるのみで、長野県では非常に希少な資料です。

「刻書紡錘車」は全国的にみてもほぼ関東地方に発見が限定され、特に群馬県南西部から埼玉県北西部にかけてのきわめて限定的な分布を示す事が解っています。この事から、この紡錘車は地域特有の祭祀や儀礼行為に使われたのではないかと考えられています。

今回、佐久地域の近接する遺跡から複数の出土が確認されたことは、古代において佐久と上州の集落祭祀や儀礼形態に繋がりがあった可能性が指摘でき、物流のみならず人々の生活や精神面でも交流が深かった事を示す重要な発見と言えます。

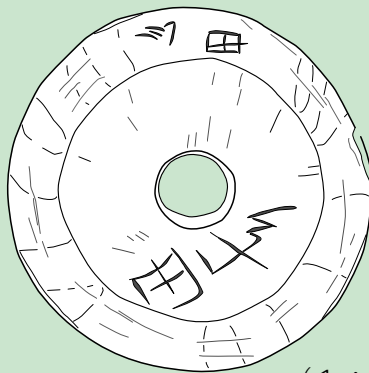
上面



側面



下面



(1:1)

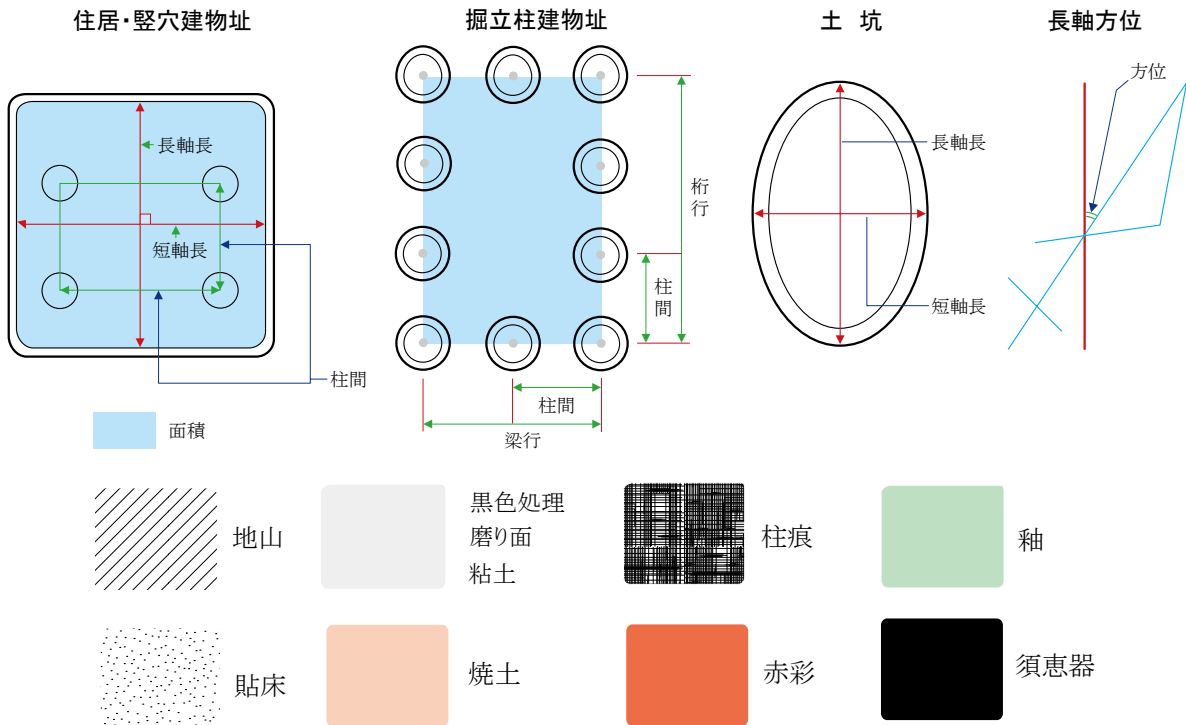


例 言

1. 本書は、J A 佐久浅間 株式会社アメックが行う宅地造成工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 J A 佐久浅間 株式会社アメック
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI (N S O VI) 600m²
5. 所在地 佐久市長土呂 1725 他
6. 調査期間 平成 31 年 4 月 4 日～令和元年 5 月 10 日 (現場発掘作業)
令和元年 5 月～令和 3 年 3 月 (報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 巻頭は高島英之「群馬県多野郡吉井町大字神保字北高原出土の刻書紡錘車について」研究紀要 22 群馬県埋蔵文化財事業団 2004 を参考とした。また、報告書作成にあたり櫻井秀雄 原 明芳 鳥羽秀継 (敬称略) よりご教示を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址 (H)・掘立柱建物址 (F)・土坑 (D)・溝状遺構 (M)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。出土遺物観察表の単位はcmとgとした。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988 年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。() は推定値、<> は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は 4 × 4 m に設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。挿図中における網掛けは以下を示す。



目次

例言・凡例
目次・調査体制

第Ⅰ章 発掘調査の経緯
第1節 調査の経緯
第2節 調査日誌
第3節 調査の概要
第4節 基本層序

第Ⅱ章 遺構と遺物
第1節 竪穴住居址
第2節 掘立柱建物址
第3節 土坑
第4節 溝状遺構
第5節 ピット
遺物観察表

第Ⅲ章 調査成果



遺跡南側遠景（西より）奥に見える住宅街が平成28年調査部

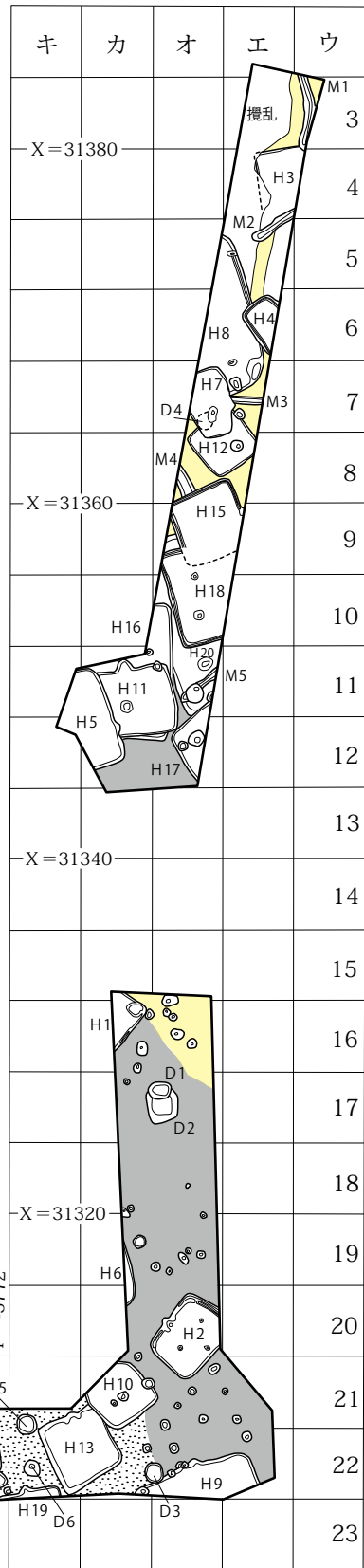
写真図版
抄録

当遺跡の「自然的環境・歴史的環境」及び「調査の方法」については大豆田遺跡Ⅴと同一の為、佐久市埋蔵文化財調査報告書第255集「大豆田遺跡Ⅴ・古仁田遺跡」を参照

調査体制

平成31年度（令和元年）・令和2年度

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹				
事務局	社会教育部長	三浦一浩	青木源	(令和元年度)			
	文化振興課長	東城洋					
	企画幹	岡部政也	吉田晃	(令和元年度)			
	文化財調査係長	山本秀典					
	文化財調査係	小林真寿	羽毛田卓也	富沢一明			
		上原学	久保浩一郎				
	調査員	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男	小林妙子		
		堀籠まゆみ	橋詰信子	橋詰勝子	田中ひさ子		
		柳澤孝子	清水律子	堀籠保子	横尾敏雄		
		依田好行	中澤登	羽毛田利明	木内修一		
		比田井久美子					



第1図 大豆田遺跡VI調査全体図

S=1/400

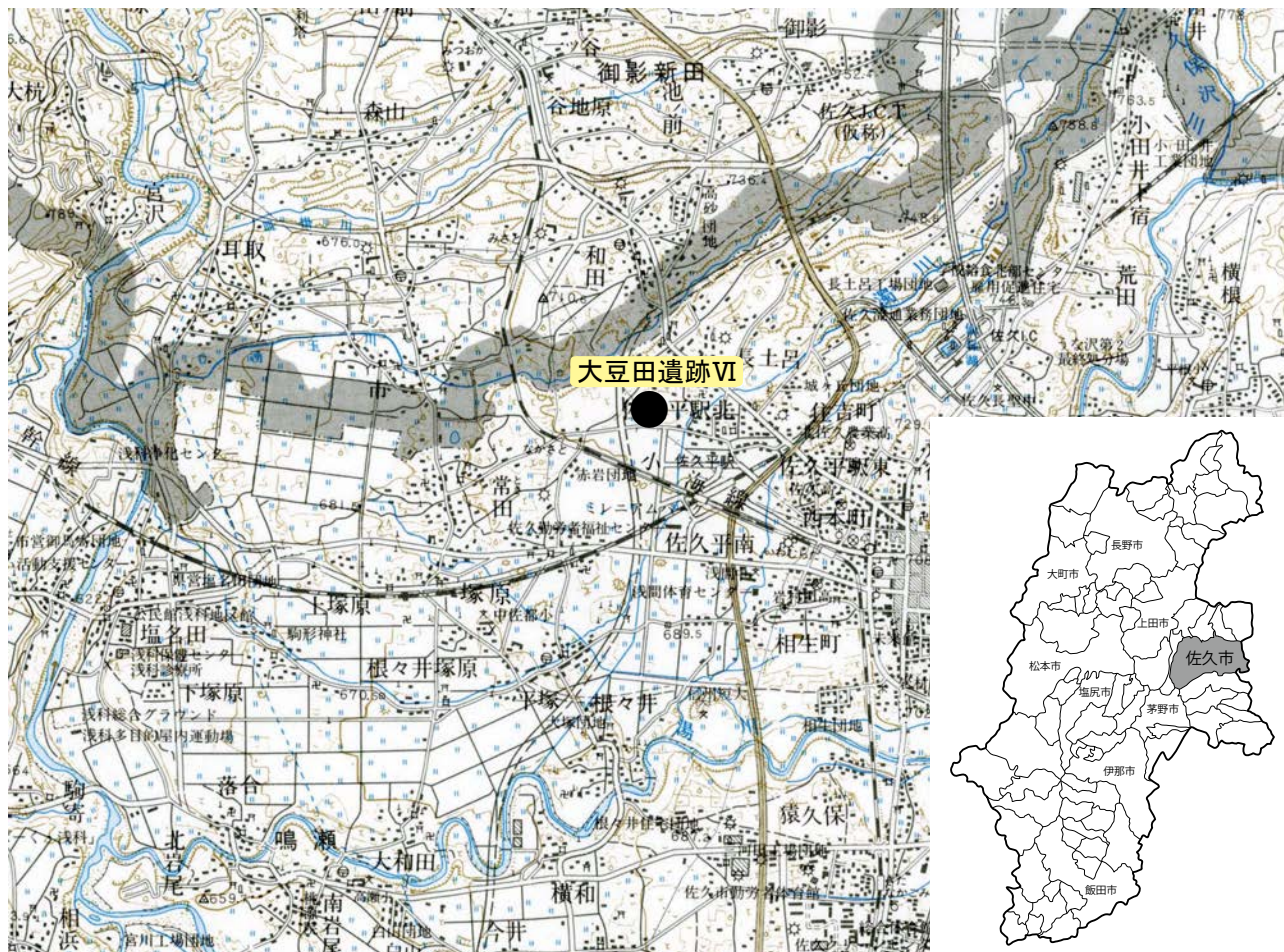
第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

大豆田遺跡Ⅵは周防畑遺跡群の南端に位置し、標高 704 m を僅かに越える台地南端に所在する。調査地点の地形は北から南へと伸びるいわゆる「田切」に挟まれた低い台地で、この台地は調査地点付近で沖積低地へ変わっていく。本遺跡周辺は近年に入り、中部横断自動車道建設や新設の小学校として佐久平浅間小学校建設、区画整理事業等で多くの開発事業が行われた。また、北陸新幹線「佐久平駅」に近接している事から宅地造成事業を中心に各種開発が盛んに行われている地域である。

本地域はこのような開発に伴い多くの発掘調査がなされ、資料の蓄積が進む地域である。発見された遺構としては、弥生時代後期の所産と考えられる国内で最大級の規模となる 18 × 9.5 m の竪穴住居址や溝が四隅切れるタイプの方形周溝墓や円形周溝墓が集落に接して検出されている。古代においては、周辺の遺跡から佐久平では希少な出土例となる 7 世紀末と考えられる「川原寺式」の軒丸瓦や布目瓦が発見されている。また、西近津遺跡群からは平安時代の竪穴住居址から銅印「○子私印」が出土している。

今回、平成 28 年に引き続き遺跡群内において JA 佐久浅間 株式会社アメックにより宅地造成が計画され、文化財保護法 93 条が長野県教育委員会宛て、佐久市教育委員会に届出された。市教育委員会により該地の試掘調査が行われ、予定地内から遺構が発見された。保護協議の結果、工事により遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第 2 図 大豆田遺跡Ⅵ位置図 (1/50000)

第2節 調査日誌

- 平成30年9月19日 株式会社アメックより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
9月20日 長野県教育委員会へ市教育委員会より30佐教文振第1295-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
9月26日 長野県教育委員会より30教文第7-1056号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
平成31年1月15日 株式会社アメックより埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
4月2日 株式会社アメックと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
4月4日～令和元年5月10日 記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行う。
引き続き報告書作成作業を行う。
令和2年4月2日 株式会社アメックと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
報告書作成業務を行う。
令和3年3月 報告書を刊行し、記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

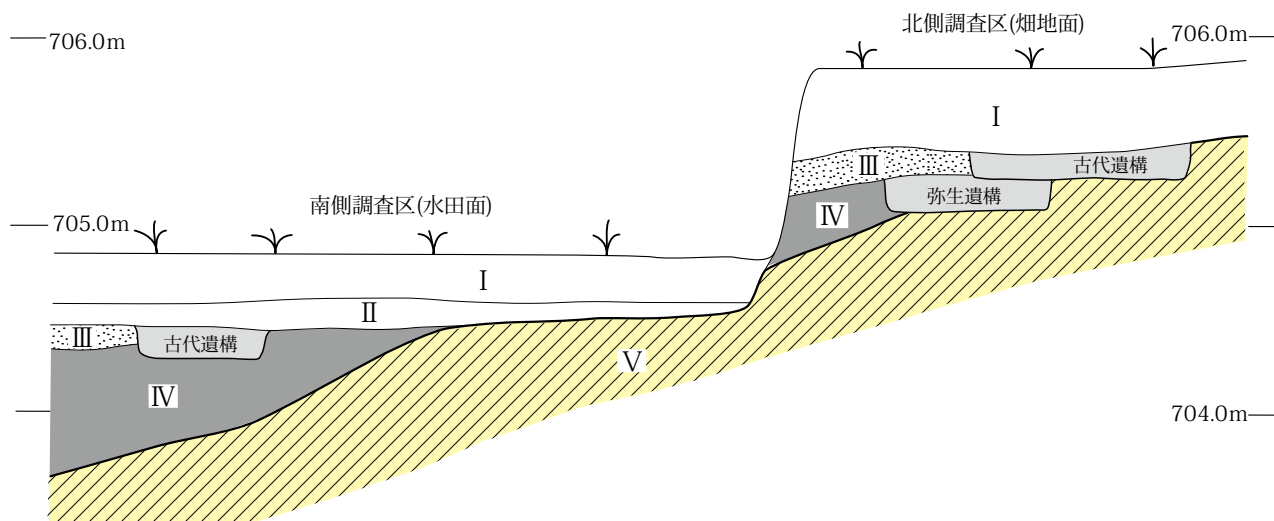
第3節 調査の概要

遺構	竪穴住居址	22軒(弥生時代後期4軒、奈良・平安時代18軒)
	土坑	13基
	溝状遺構	7本
遺物	弥生土器(箱清水式)	土師器 須恵器 灰釉陶器 石製品 鉄製品

第4節 基本層序

今回の調査地点は南西方向に向いゆるやかに傾斜する台地上である。基本層序は5層に分かれるが、北側の畑地部分と南側水田部分では遺構確認面が異なっていた。北側畑地部分は浅間P1層上であり、南側水田面は黒色土層か砂層である。また、遺構も所産時期により確認面が異なり、弥生後期の住居址はⅢ層の砂が被った状態で検出された。

- 第Ⅰ層 10YR4/1 褐灰色土 耕作土、しまり弱い。
第Ⅱ層 5YR5/8 明赤褐色土 しまり・粘性あり。水田耕作土下層部の土。
第Ⅲ層 10YR7/2 にぶい黄橙色土 砂層で径1～2cmの小石を多く含む。
第Ⅳ層 10YR2/1 黒色土 しまり・粘性あり。
第Ⅴ層 10YR5/6 黄褐色土 浅間火山灰P1層



第3図 大豆田遺跡Ⅵ土層模式図

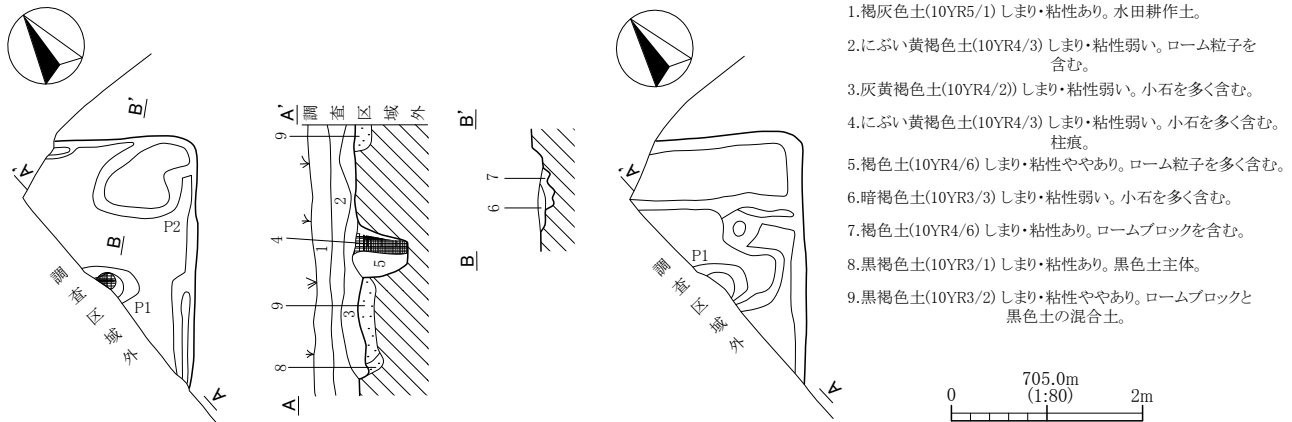
第II章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址

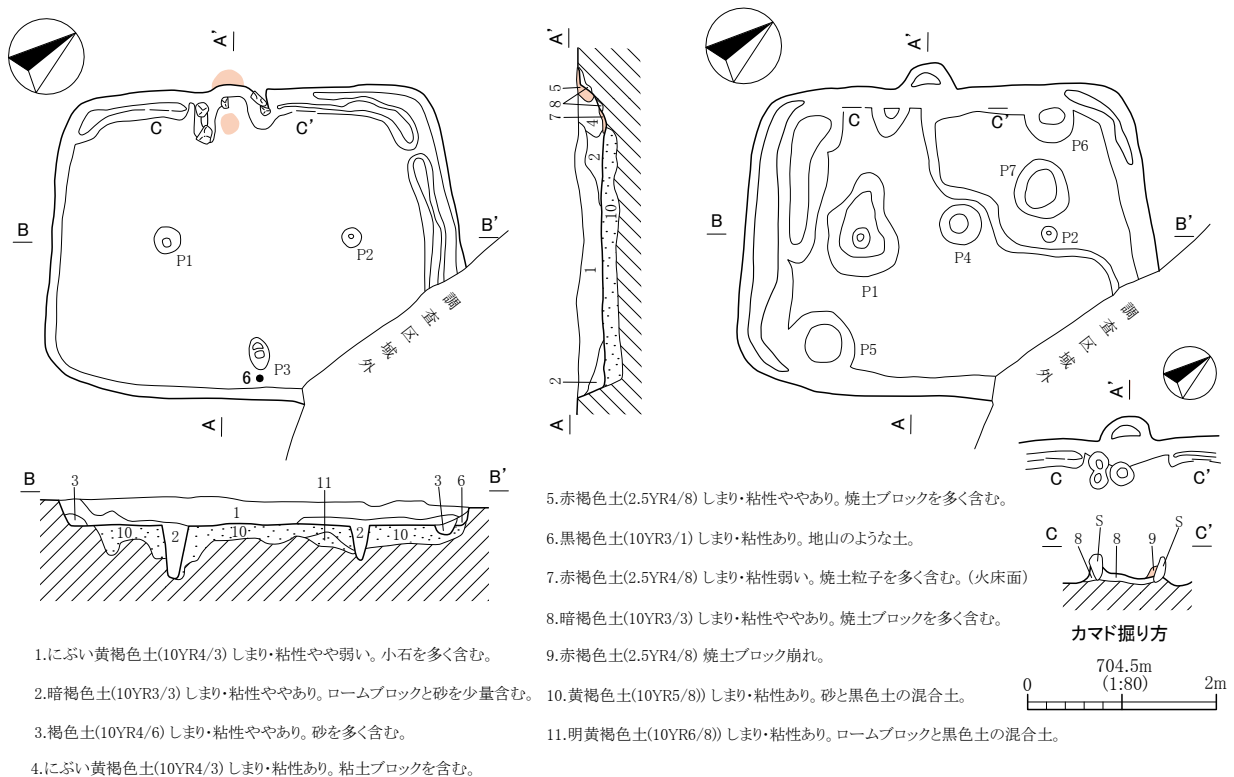
本址は調査区南側のカ-15・16Grで検出された。住居北東コーナー部分が一部検出されたのみである。形態は不明で、規模は検出長で、南北1.42m、東西2.42mを測る。検出された床面積は2.35㎡である。壁の高さは北壁で0.12mを測る。ピットは1ヶ所検出され、規模はP1が径0.56m・深さ0.52mであった。床は部分的に貼床が施されていた。

遺物は土師器甕や土師器坏等が出土したがいずれも小片で図示できるものはなかった。よって本址の所産時期は不明である。



第4図 H1号住居址実測図

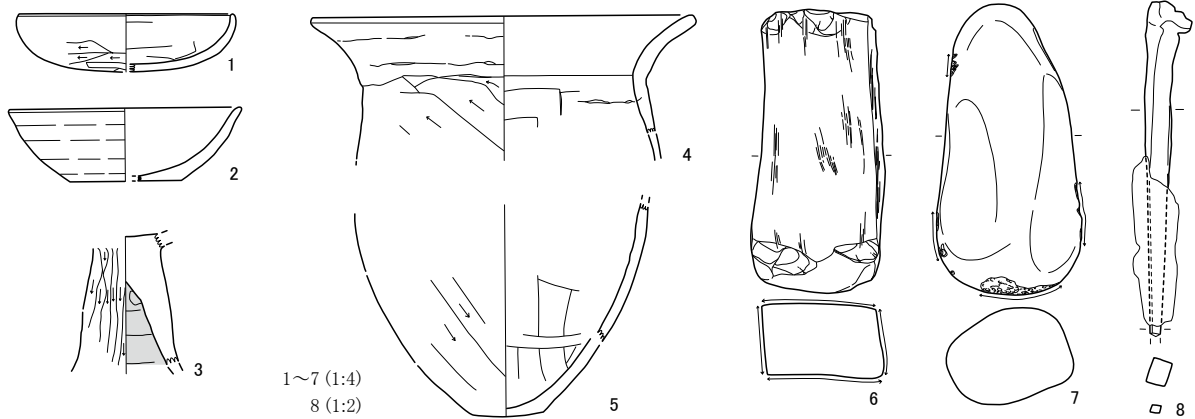
(2) H2号住居址



第5図 H2号住居址実測図

本址は調査区南側のオ-20・21、カ-20Grで検出された。住居南東コーナー部分が一部調査区外となる。形態は方形で、規模は南北長3.82m、東西長2.98mを測る。床面積は推定で10.49㎡である。主軸方位はN-52°-Wを示す。壁の高さは南壁で0.27mを測る。ピットは掘方を含め7ヶ所検出され、P1とP2は住居の主柱穴と考えられる。床は0.11～0.21mの厚さで貼床が施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、礫と粘質土で袖がつくられていた。

遺物は覆土を中心に出土し、8点を図示した。本址の所産時期はこれらの出土遺物から8世紀代と考えられる。

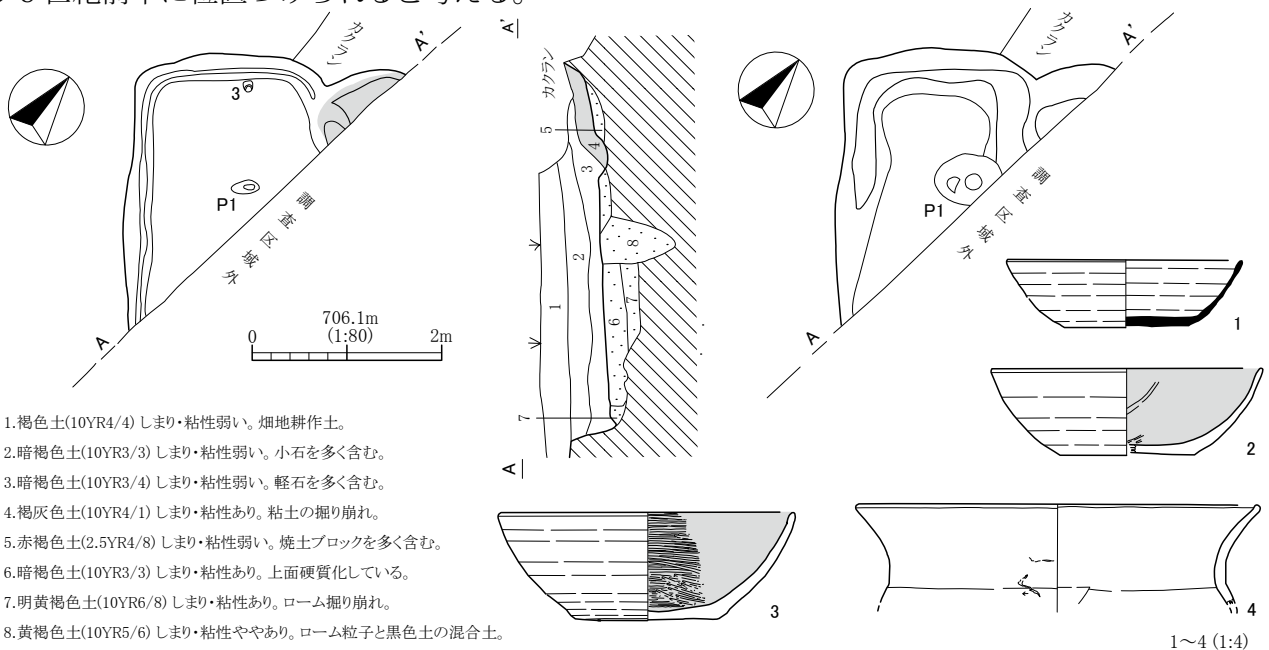


第5図 H2号住居址出土遺物実測図

(3) H4号住居址

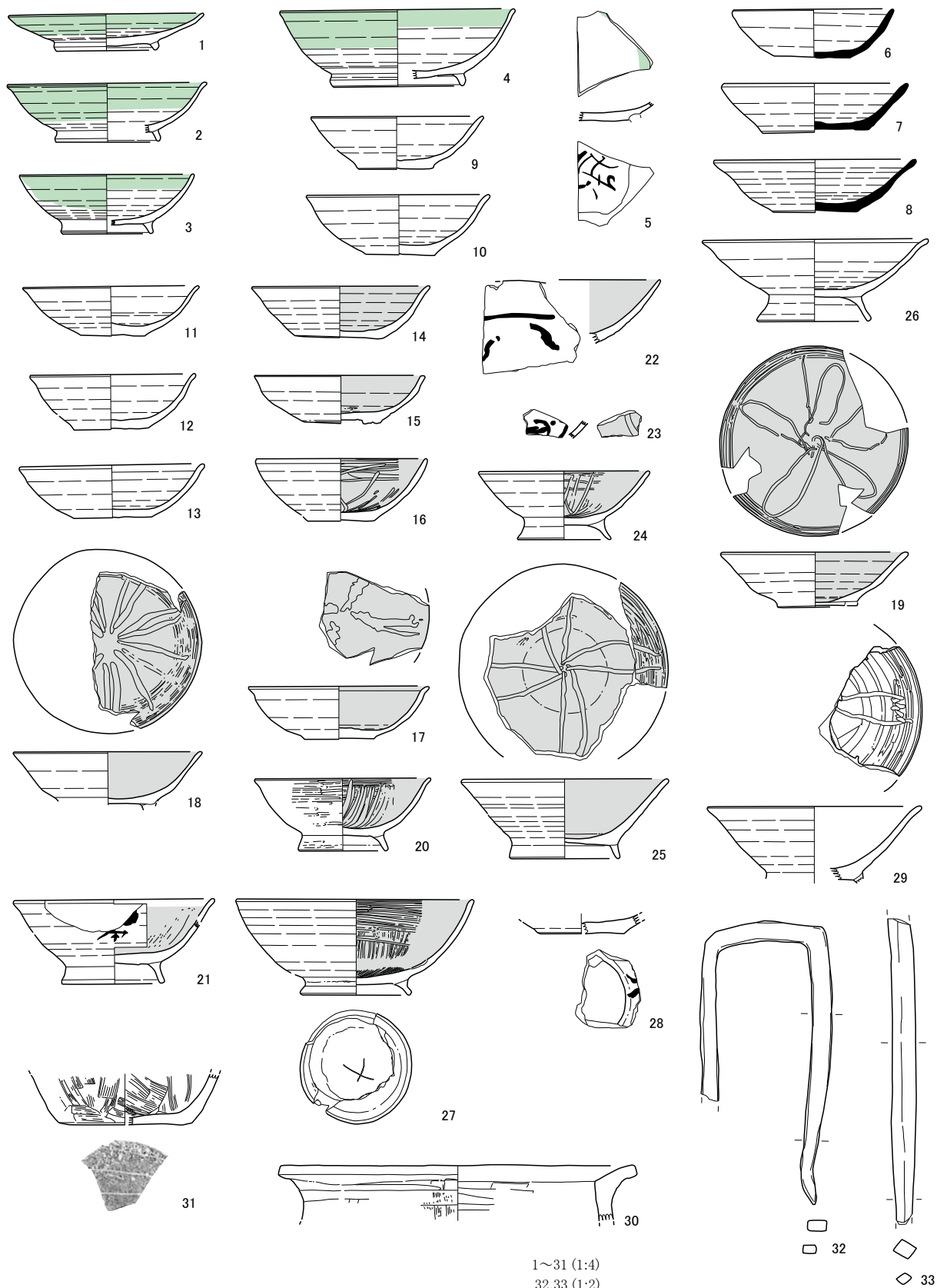
本址は調査区北側のエ-6Grで検出された。住居西部分が一部検出された。形態は不明で、検出規模は南北長2.22m、東西長2.42mで、検出された住居床面積は2.65㎡である。壁高さは西壁で0.36mを測る。ピットは1ヶ所検出され、規模はP1が径0.32m・深さ0.77mを測る。壁溝が巡り、深さ0.04～0.10mを測る。カマドと考えられる粘土の広がり北壁側で検出されが火床部はなく、カマドとしては確証が得られなかった。

遺物は覆土を中心に出土したが、3の土師器坏は床面上から出土した。本址はこれらの出土遺物より9世紀前半に位置づけられると考える。



1. 褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。畑地耕作土。
2. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4)しまり・粘性弱い。軽石を多く含む。
4. 褐灰色土(10YR4/1)しまり・粘性あり。粘土の掘り崩れ。
5. 赤褐色土(2.5YR4/8)しまり・粘性弱い。焼土ブロックを多く含む。
6. 暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり。上面硬質化している。
7. 明黄褐色土(10YR6/8)しまり・粘性あり。ローム掘り崩れ。
8. 黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性ややあり。ローム粒子と黒色土の混合土。

第6図 H4号住居址及び出土遺物実測図



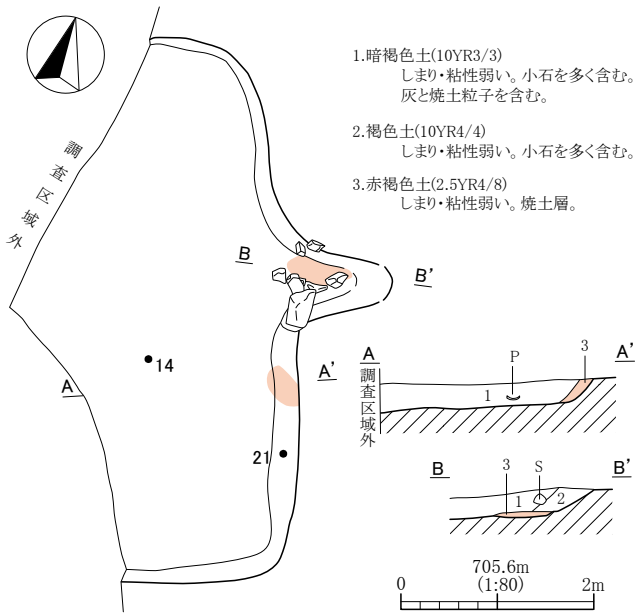
第7図 H 5号住居址出土遺物実測図

(4) H 5号住居址

本址は調査区北側のカ-11・12、キ-11・12Grで検出された。住居西部分が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長5.42m、東西長3.90mで、検出された住居床面積は9.86㎡である。主軸方位はN-72°-Eを示す。壁高さは東壁で0.22mを測る。カマドは東壁につくられ、礫と粘質土でつくられていた。火床部は煙道より確認され、焼土の厚みは0.07mであった。

遺物は覆土を中心に多く出土した。1～5は灰釉皿と椀で、5には墨書が確認できる。6～8は須恵器坏、9～29までは土師器坏や碗である。内面黒色処理を施した坏・碗にはミガキによる暗文風の模様が描かれているものがある。30は土師器甕の口縁部破片であり、形態より甲斐型甕の可能性が有る。

本址はこれらの出土遺物より、10世紀前半の所産時期が考えられる。

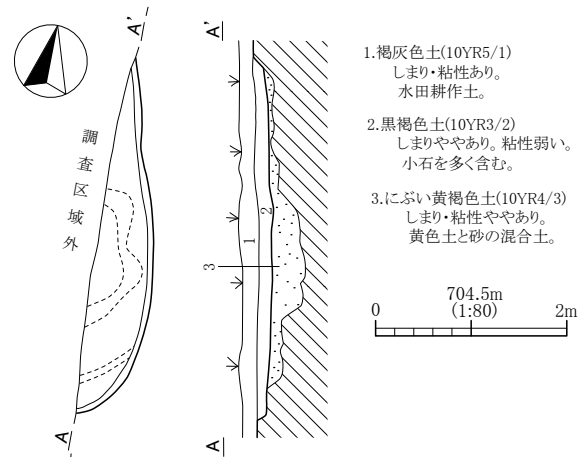


第8図 H 5号住居址実測図

(5) H 6号住居址

本址は調査区南側のカ-19・20Grで検出された。住居西側の大部分が調査区域外となる。形態は不明であり、検出規模は南北長2.74m、東西長0.56mで、検出された住居床面積は1.34㎡である。壁高さは東壁で0.17mを測る。床の顕著な硬質は確認できなかつたが、深い部分で0.31m貼られており、凹凸がある掘方であった。

遺物は灰釉陶器片、須恵器坏片、土師器甕片、弥生土器甕片が出土したが、いずれも小片で図示できるものはなかつた。よって本址の所産時期は不明である。



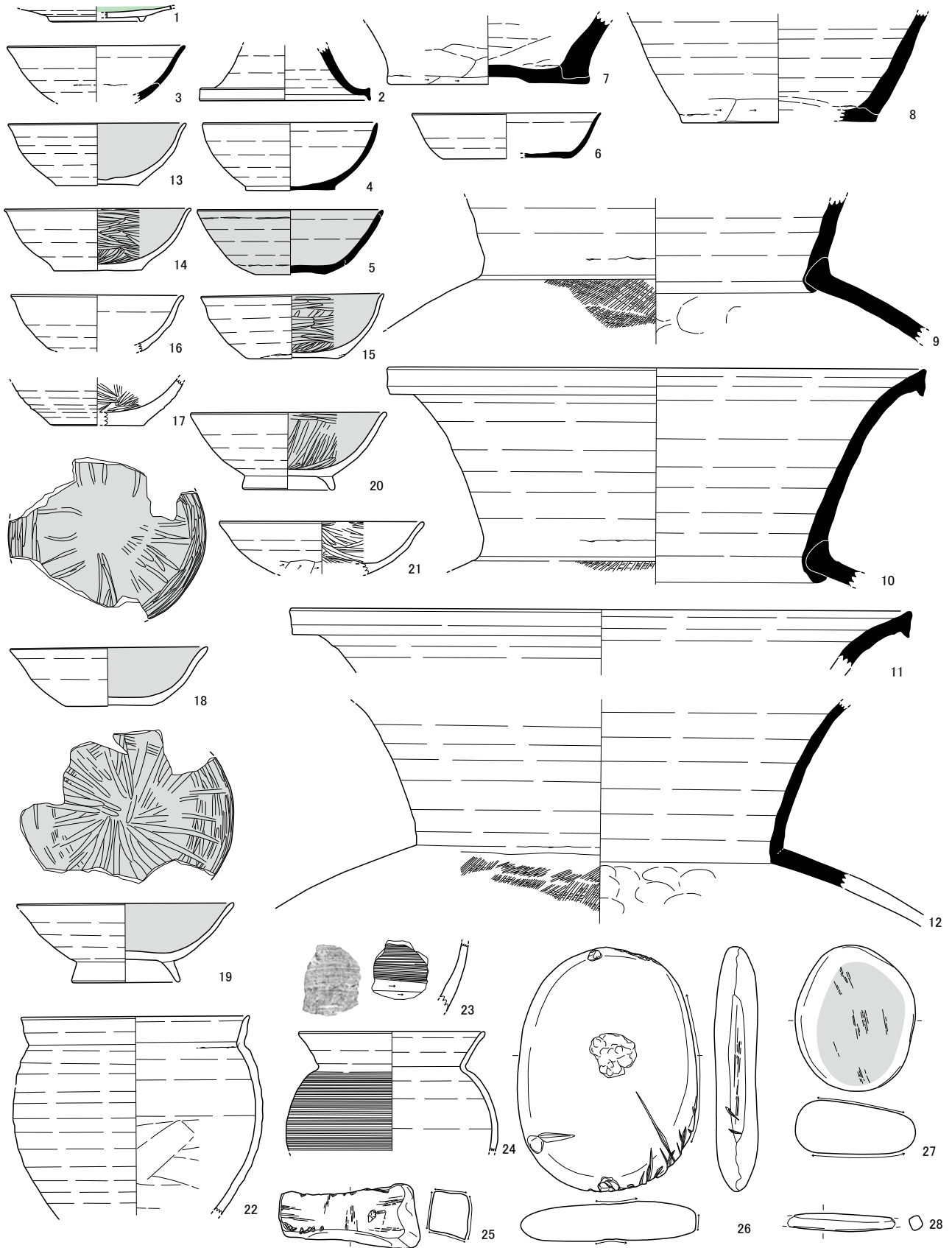
第9図 H 6号住居址実測図

(6) H 7号住居址

本址は調査区北側のエ-7・8、オ-7・8Grで検出された。住居北西コーナーが調査区域外となる。形態は長方形であり、検出規模は南北長3.76m、東西長2.26mで、検出された住居床面積は7.07㎡である。壁高さは0.01～0.08mを測る。床は顕著な硬質部分が確認できたが、掘方に関しては下層に重複遺構の覆土が存在した為、確認できなかつた。ピットは1ヶ所検出され、規模はP1の長径0.94m、短径0.45m、深さ0.24mを測る。東壁が一部カマド煙道のように飛び出していたが、焼土や袖構築材等は検出されず、カマドとしては確認できなかつた。

遺物は覆土より出土が多かつた。1は須恵器短頸壺の口縁部である。2と3は土師器碗である。4～6は土師器坏でいずれも内面に暗文風のミガキが施されている。

本址の所産時期は出土遺物が少なく不確実であるが、9世紀代と考えられる。

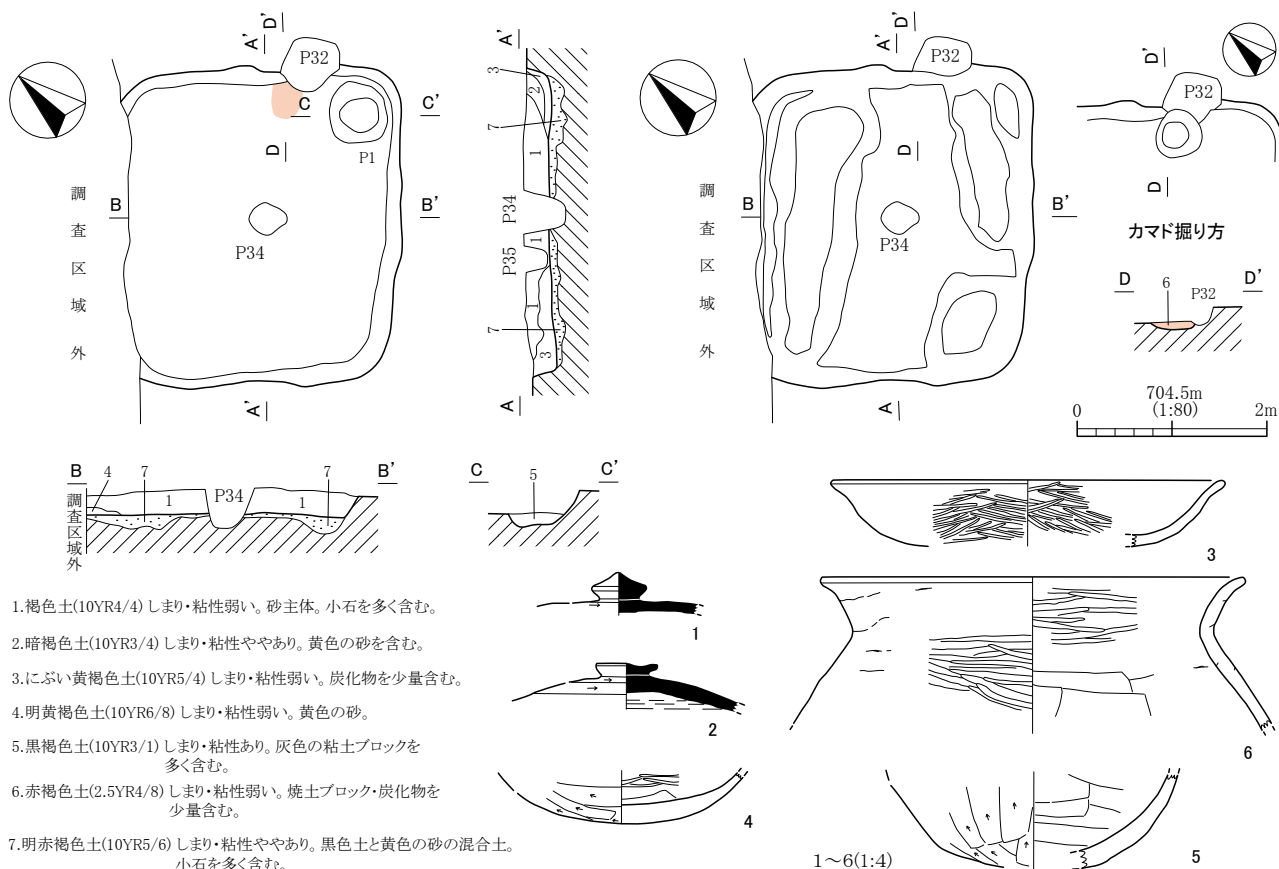


第 12 图 H9号住居址出土遺物実測図

1~27 (1:4) 28 (1:2)

体と考えられる。23 と 24 は小型のロクロ甕であり、外面に細かなカキ目状の成形痕が確認できる。形態や胎土から在地ではなく外来系土器と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から所産時期が 9 世紀前半に位置づけられると考える。



第 13 図 H 10 住居址及び出土遺物実測図

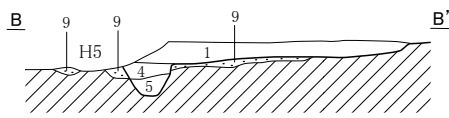
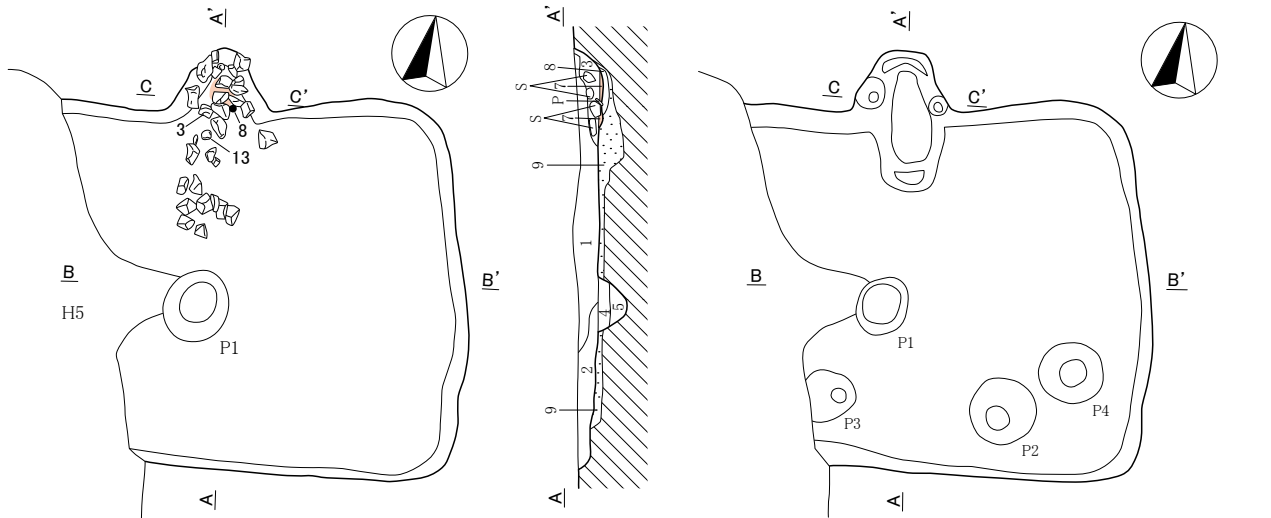
(8) H 10 号住居址

本址は調査区南側のオ -21、カ -21・22Gr で検出された。北壁の一部が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 3.02 m、東西長 2.70 m で、検出された住居床面積は 7.95 m² である。主軸方位は N-51° -E を示す。壁高さは南西コーナーで 0.28 m を測る。床は顕著な硬質部分が確認でき、貼床は 0.07 ~ 0.21m の厚みで貼られていた。ピットは 1ヶ所検出され、規模は径 0.64m、深さ 0.10m を測る。掘方は中央部が一段高く北壁と南壁が一段低い掘方でありつた。カマドは東壁中央南よりに構築されており、火床部のみが確認できた。焼土の規模は径 0.36m、厚み 0.06m である。

遺物は覆土からの出土が多く、6 点を図示した。1 と 2 は須恵器蓋である。3 は土師器高坏の坏部と考えられる。4 ~ 6 は土師器甕である。出土遺物が少なく不確実であるが、これらの遺物から本址は 7 世紀後半から 8 世紀代の所産時期が考えられる。

(9) H 11 号住居址

本址は調査区北側のオ -11・12、カ -11・12Gr で検出された。西側が H5 号住居址に壊されている。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長 3.58 m、東西長 3.78 m で、検出された住居床面積は 12.48 m² である。主軸方位は N-10° -W を示す。壁高さはカマド脇で 0.16 m を測る。床は顕著な硬質部分が確認でき、貼床は 0.03 ~ 0.14m の厚みで貼られていた。ピットは 4ヶ所検出されたがいずれも支柱穴とは考えられなかった。



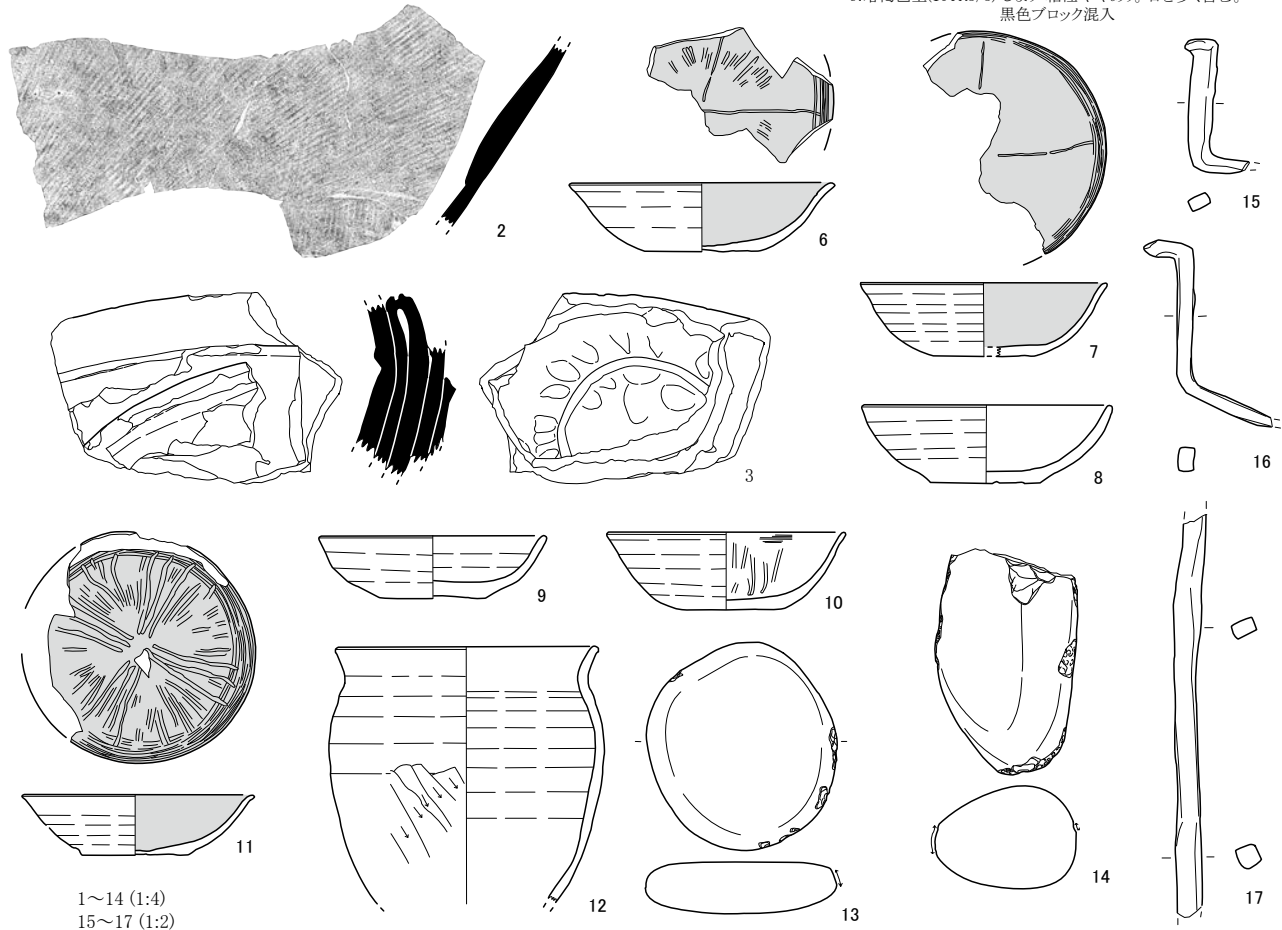
705.6m
(1:80) 2m



カマド掘り方



1. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり。炭化物を含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。黄色の砂を含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。炭化物を多く含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり。小石を多く含む。炭化物を含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり。ローム粒子を多く含む。
6. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。
7. 赤褐色土(2.5YR4/6) しまり・粘性弱い。焼土。
8. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
9. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。石を多く含む。黒色ブロック混入



1~14 (1:4)
15~17 (1:2)

第 14 図 H 11 住居址及び出土遺物実測図

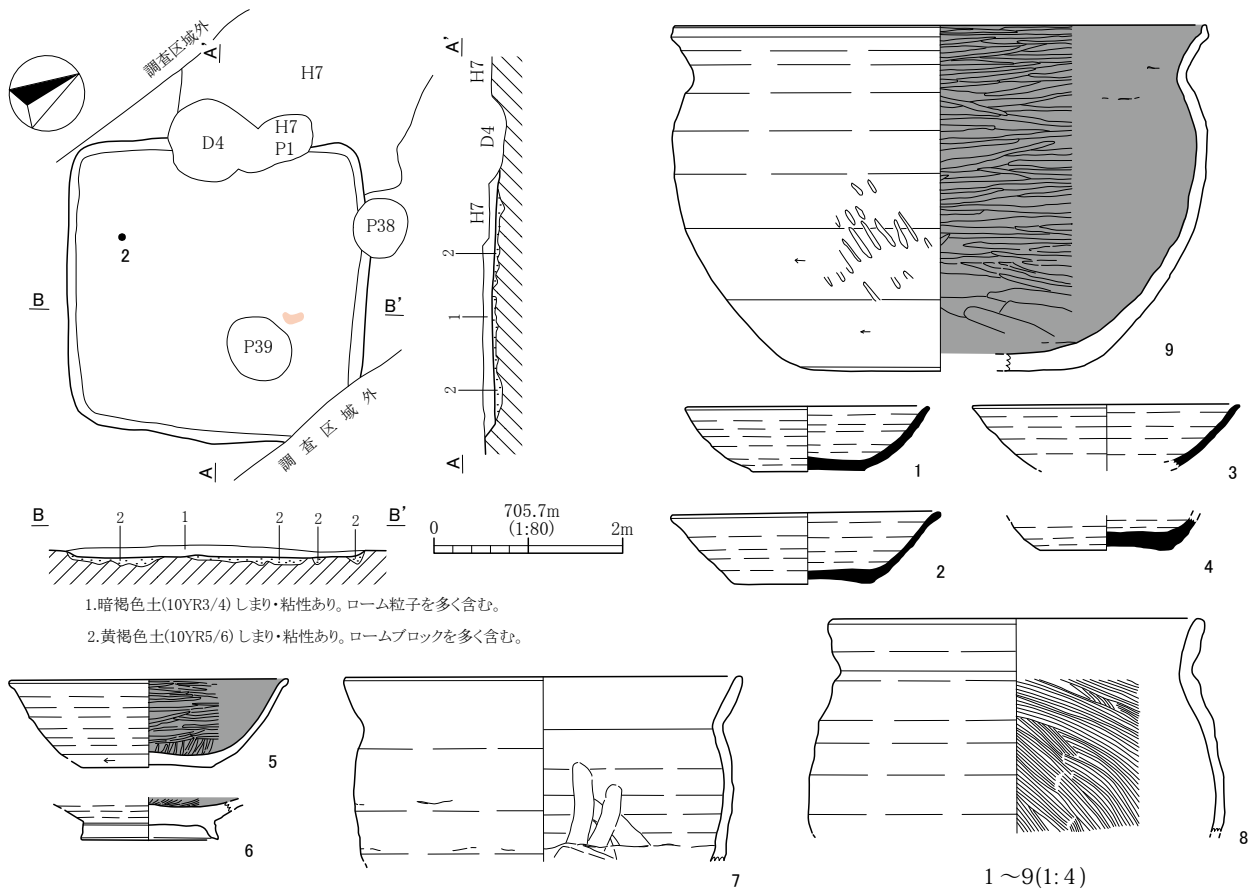
カマドは北壁中央で検出された。カマドから掻きだされたような状態で大量の礫が確認された。この礫下からは、径0.3mほどの火床部が確認された。また、一部袖石も原位置を保つ状態で発見された。

本址からはカマド周辺や覆土から遺物が多く出土し、17点を図示した。特に3の須恵器甕は口縁部の破片に別個体の甕口縁部破片が溶けて付着しており、須恵器窯から消費遺跡まで持ち込まれたと考えられる。本址はこれらの遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。

(10) H 12号住居址

本址は調査区北側のエ-7・8、オ-7・8Grで検出された。形態は方形と考えられ、検出規模は南北長2.62m、東西長2.94mで、検出された住居床面積は8.45㎡である。主軸方位は不確定であるがN-60°-Wを示す。壁高さは西コーナーで0.09mを測る。床は一部分で硬質が確認でき、貼床は0.01～0.09mの厚みで貼られていた。ピットは検出されなかった。カマドはD4号土坑に削平されたと考えられる。

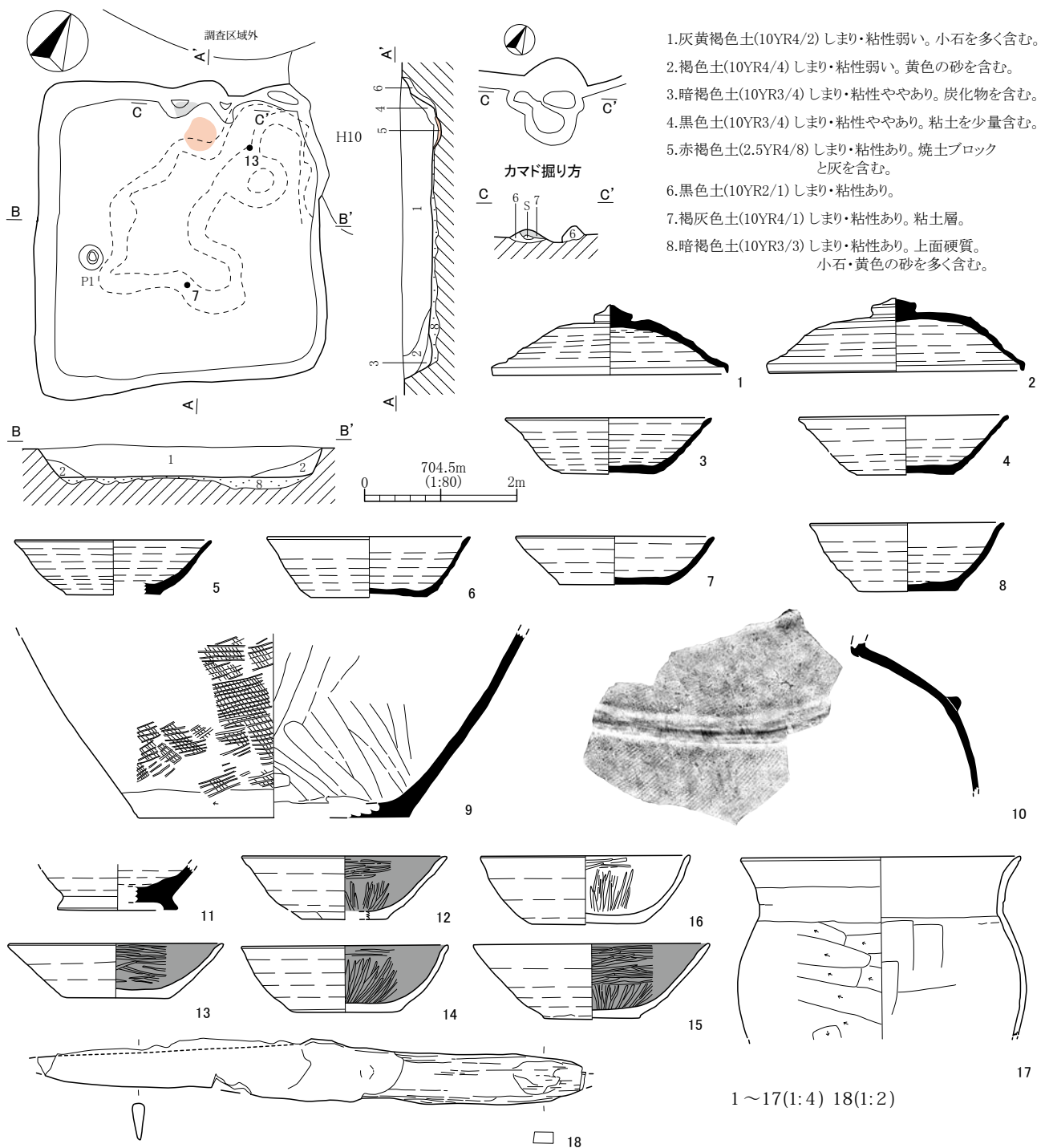
本址からは覆土を中心に遺物が出土し、9点を図示した。特に9は内面を丁寧なミガキと黒色処理を施した土師器鉢で、外面は叩き技法の痕跡が残る。本址はこれらの出土遺物から9世紀後半の所産時期が考えられる。



第15図 H 12住居址及び出土遺物実測図

(11) H 13号住居址

本址は調査区南側のカ-21・22、キ-21・22Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長3.42m、東西長3.30mで、住居床面積は11.65㎡である。主軸方位はN-27°-Wを示す。壁高さはカマド前で0.38mを測る。床はカマド前面で硬質が確認でき、貼床は0.07～0.21mの厚みで貼られていた。ピットは1ヶ所確認され、規模は径0.31m、深さ0.36mであった。カマドは北壁中央部に構築されており、袖部分と火床部が検出された。火床部はよく焼けており、0.04mの焼土堆積が確認された。

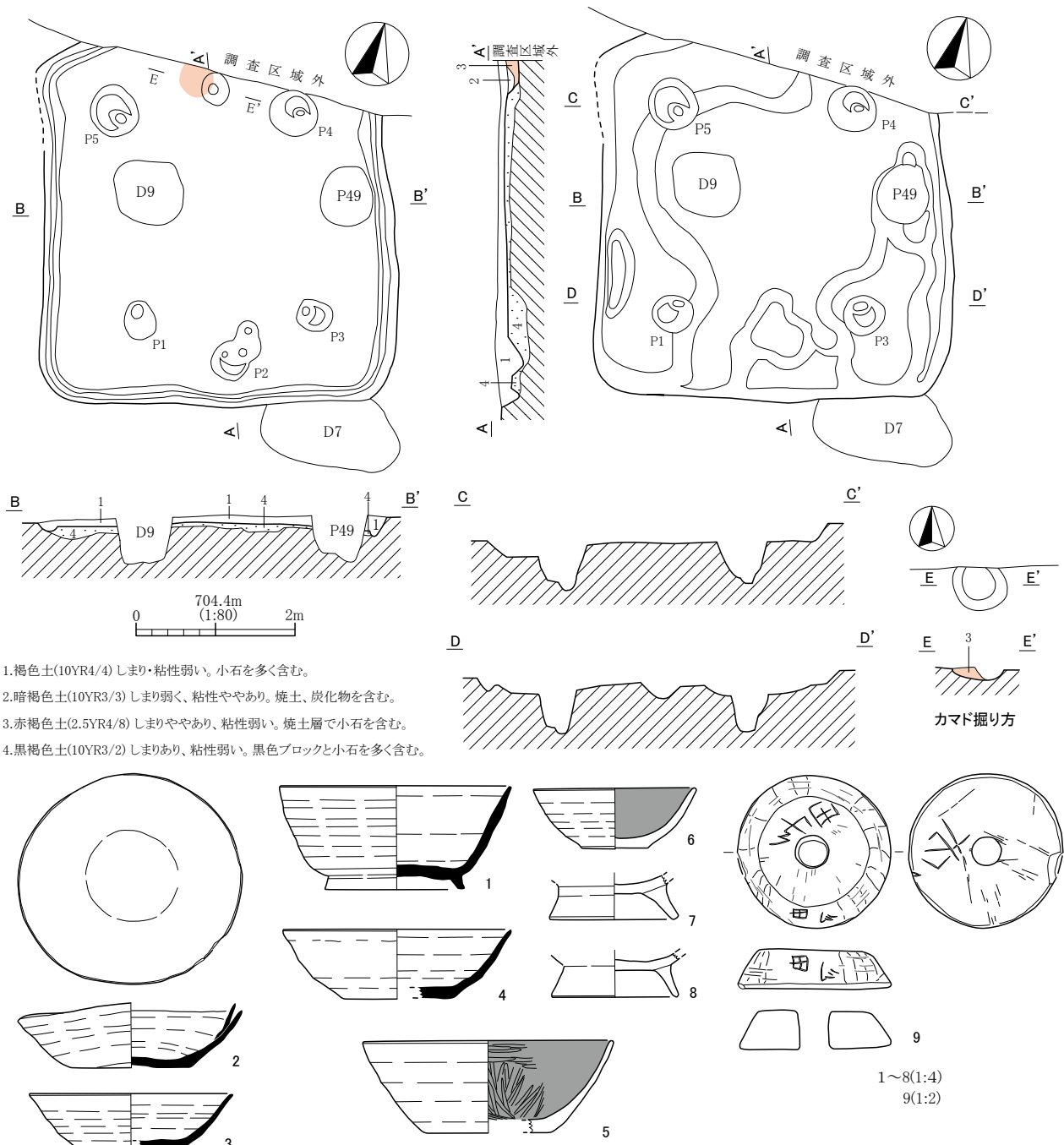


第16図 H13住居址及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は多く、18点を図示した。1と2は須恵器坏蓋である。3～8は須恵器坏である。9は須恵器甕であり、10は肩胴部に凸帯が巡る、いわゆる「四耳壺」の破片と考えられる。土師器は坏と甕があり、坏は内面黒色処理を施したものがあつた。17の土師器甕はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるもので胴部下半を欠損する。また18は大型の刀子と考えられ、柄部には木質が錆化して残存していた。本址はこれらの出土遺物から8世紀後半の所産時期が考えられる。

(12) H 14 号住居址

本址は調査区南側のケ -21・22、ケ -21・22Gr で検出された。形態は方形で、規模は南北長 4.22 m、東西長 3.92 m で、住居床面積は 15.33㎡である。主軸方位は N-14° -W を示す。壁高さは東壁中央で 0.16 m を測る。床は中央部分が硬質で、貼床は 0.12 ~ 0.30m の厚みで貼られていた。掘方は東壁際と西壁際が一段低く掘り込まれていた。壁溝は幅 0.10 ~ 0.18m、深さ 0.03 ~ 0.11m で、検出された壁際に一周するように巡っていた。ピットは 5ヶ所確認され、P1 と P3 ~ P5 は支柱穴、P2 は入口施設のピットと考えられる。カマドは検出されなかったが、北壁際に良く焼けた焼土範囲が検出され、カマド火床部と考えられる。焼土は径 0.42m、深さ 0.16m であった。



第 17 図 H14 号住居址及び出土遺物実測図

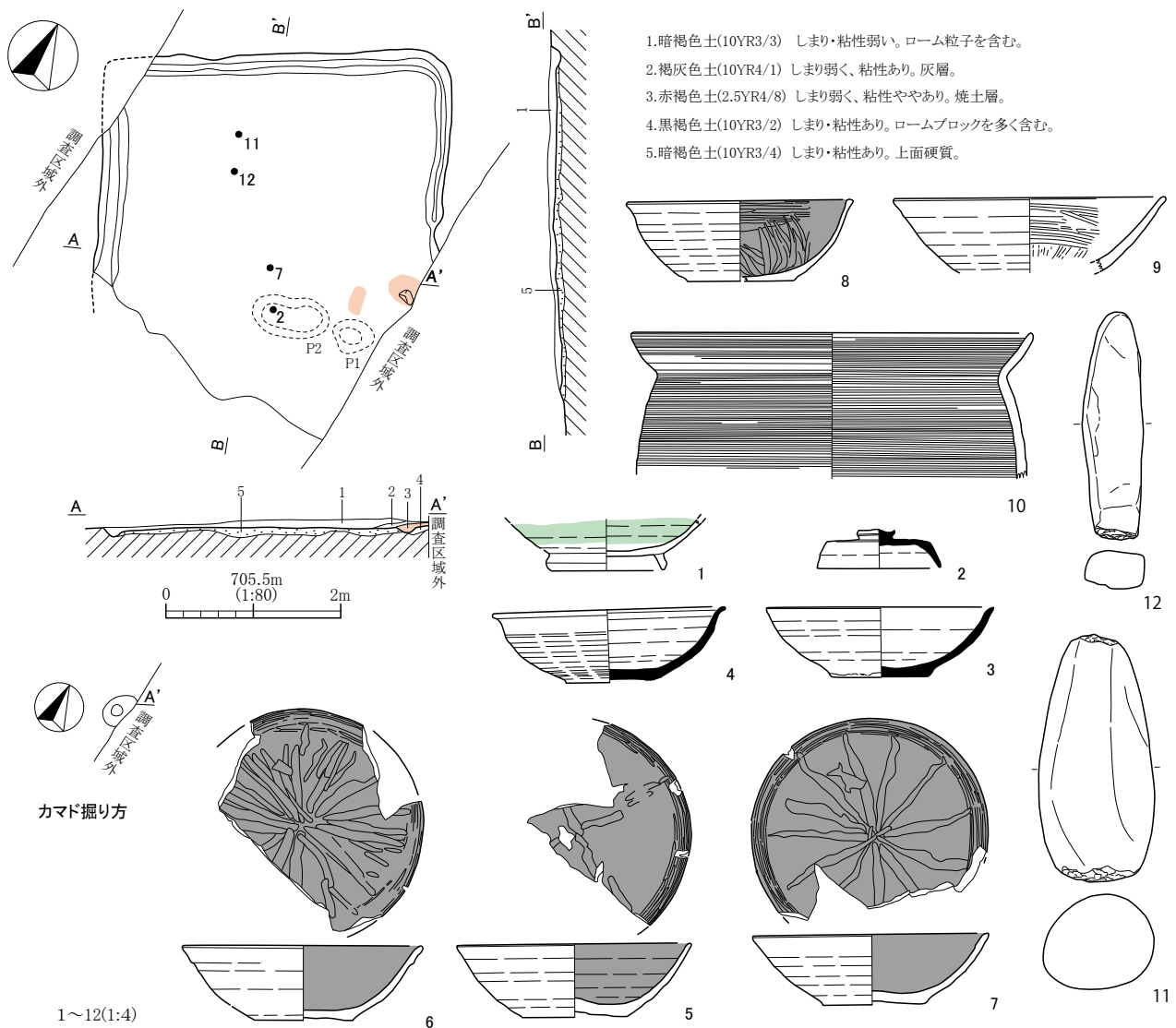
本址からの出土遺物は比較的多く、9点を図示した。2は須恵器坏で、歪みが激しくいわゆる「杓状坏」と呼ばれるものである。注目される出土遺物としては9の石製紡錘車がある。ほぼ完形で、下面と側面に「○田」と考えられる刻書、上面に刻線がそれぞれ確認できる。

本址の所産時期は6～8を混入遺物と考え、8世紀代と考えられる。

(13) H 15号住居址

本址は調査区北側のエ-8・9、オ-8・9Grで検出された。南側は地形により削平されていた。形態は不明で、検出規模は南北長4.18m、東西長3.52mで、住居床面積は11.84㎡である。主軸方位はN-66°-Eを示す。壁高さは東壁中央で0.06mを測る。床は中央部分が硬質で、貼床は0.02～0.11mの厚みで貼られていた。壁溝は幅0.13～0.22m、深さ0.03～0.07mで、検出された壁際に一周するように巡っていた。ピットは掘方時に2ヶ所確認された。カマドは検出されなかったが、東壁際に焼土範囲が検出され、カマド火床部と考えられる。焼土は径0.32m、深さ0.07mであった。

本址からの出土遺物は12点を図示した。平面図に記載した4点の遺物はいずれも床面上の遺物であった。これらの遺物より本址は9世紀代に位置づけられると考える。

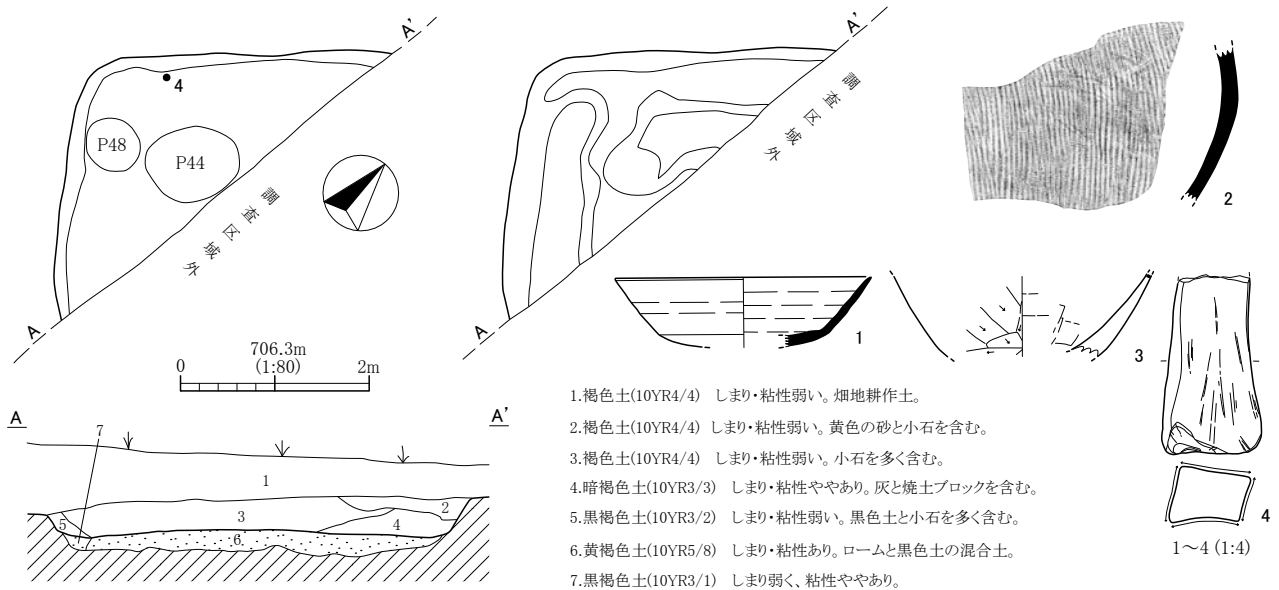


第 18 図 H15 号住居址及び出土遺物実測図

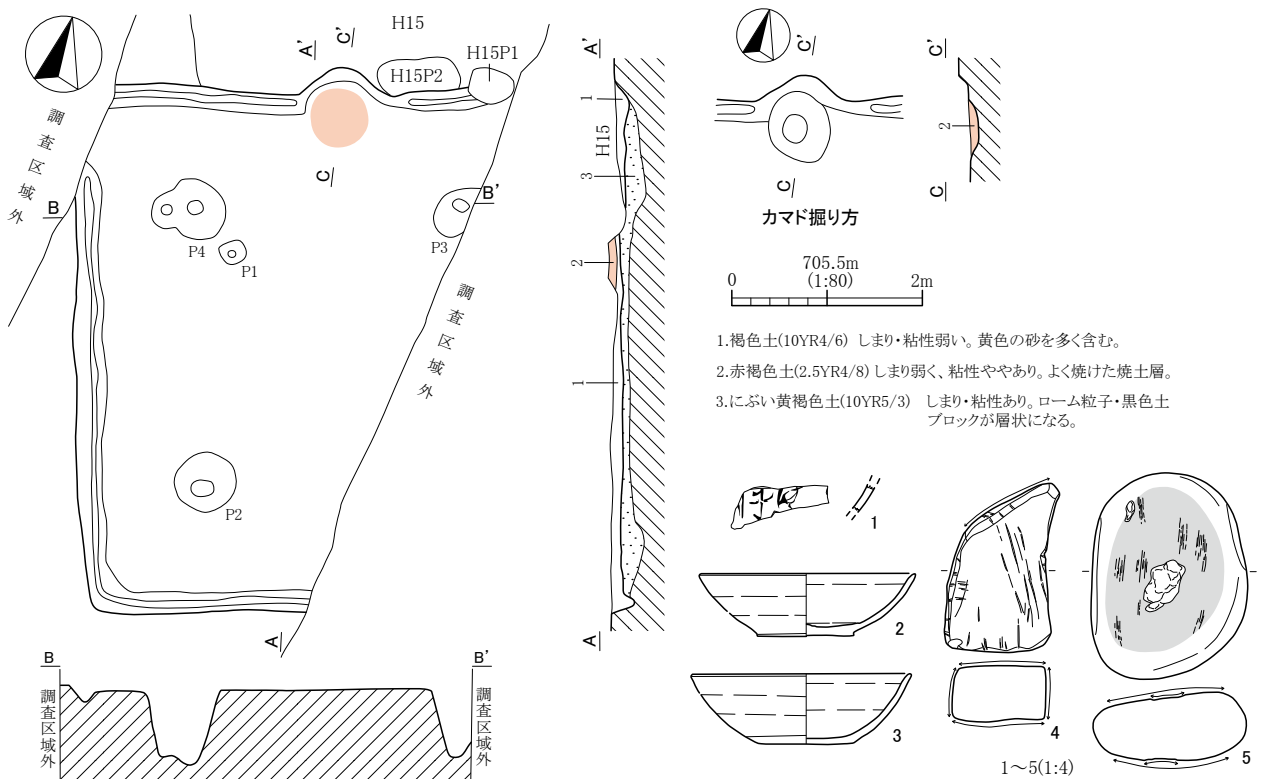
(14) H 17 号住居址

本址は調査区北側のオ-11・12Grで検出された。住居北西コーナー部のみの検出である。検出規模は南北長 2.24 m、東西長 2.60 m で、検出部の床面積は 4.05m²である。壁高さは北壁で 0.37 m を測る。貼床は 0.10 ~ 0.21m の厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物は少なく 4 点を図示した。これら遺物より不確実であるが、本址は 8 世紀代に位置づけられると考える。



第 19 図 H17 号住居址及び出土遺物実測図



第 20 図 H18 号住居址及び出土遺物実測図

(15) H 18 号住居址

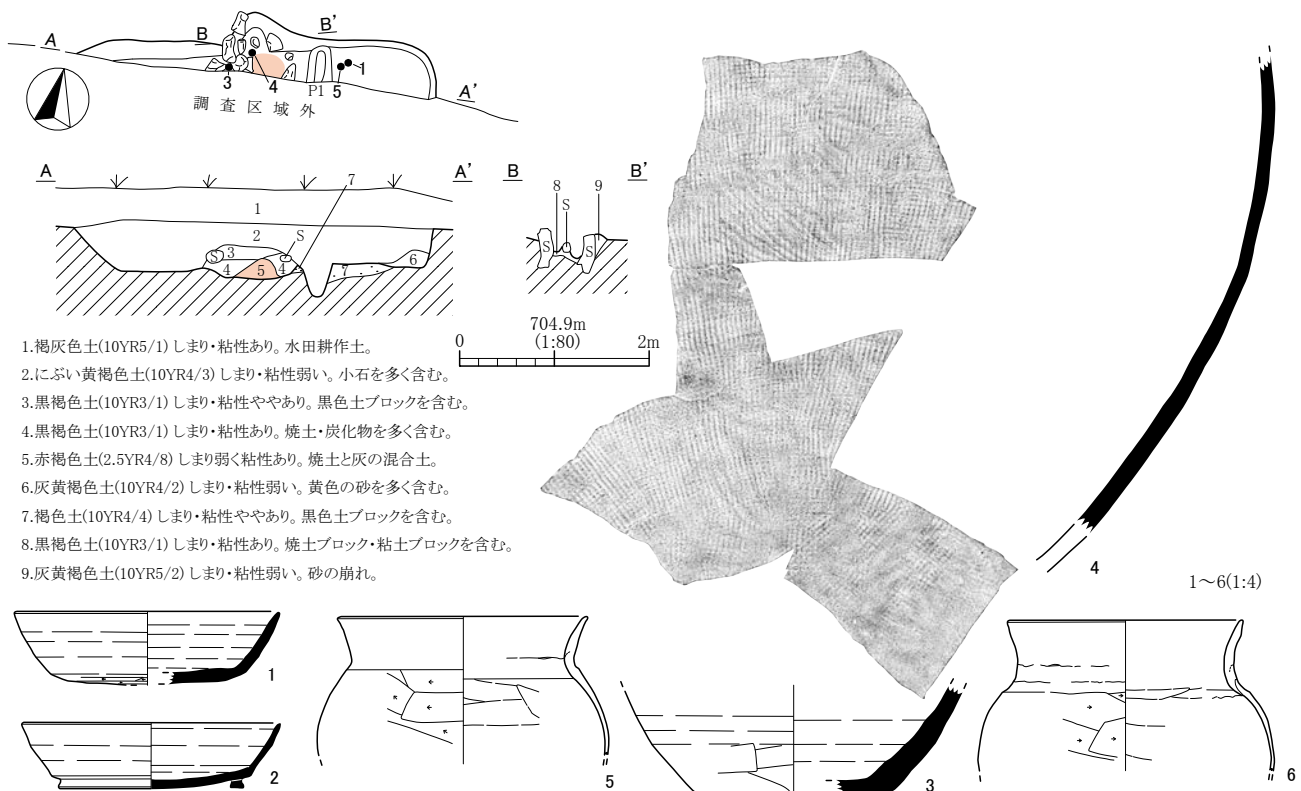
本址は調査区北側のエ-9・10、オ-9・10・11Gr で検出された。形態は方形で、規模は南北長 4.96 m、＜東西長＞ 4.16 m で、検出部分の床面積は 16.28㎡である。主軸方位は N-15° -W を示す。壁高さは南壁で 0.15 m を測る。床は中央部分が硬質で、貼床は 0.06 ～ 0.12m の厚みで貼られていた。壁溝は幅 0.12 ～ 0.22m、深さ 0.05 ～ 0.09m で、検出された壁際に一周するように巡っていた。ピットは 4ヶ所確認され、P2 ～ P4 は支柱穴と考えられる。カマドは北壁中央で検出されたが、袖部分は確認されず、火床部のみ検出された。

本址からの出土遺物は少なく 5 点を図示した。いずれも覆土からの出土である。1 は土師器杯の体部であり、墨書が確認できるが判読は不明である。本址の所産時期は不明である。

(16) H 19 号住居址

本址は調査区南側のキ-22・23、ク-22・23Gr で検出された。形態は不明で、カマド周辺部のみ検出された。検出規模は南北長 0.24 m、東西長 3.12 m で、検出部分の床面積は 0.86㎡である。主軸方位は N-13° -W を示す。壁高さは北壁で 0.37 m を測る。貼床は 0.16m の厚みで貼られていた。ピットは 1ヶ所確認された。カマドは北壁中央で検出された。袖部分は礫と粘質土で構築されており、火床部はよく焼けていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺より多く出土し、6 点を図示した。1 と 2 は須恵器杯。4 と 3 は須恵器甕である。5 と 6 は小型の土師器甕である。これらの出土遺物より、本址は 8 世紀代の所産時期と考えられる。



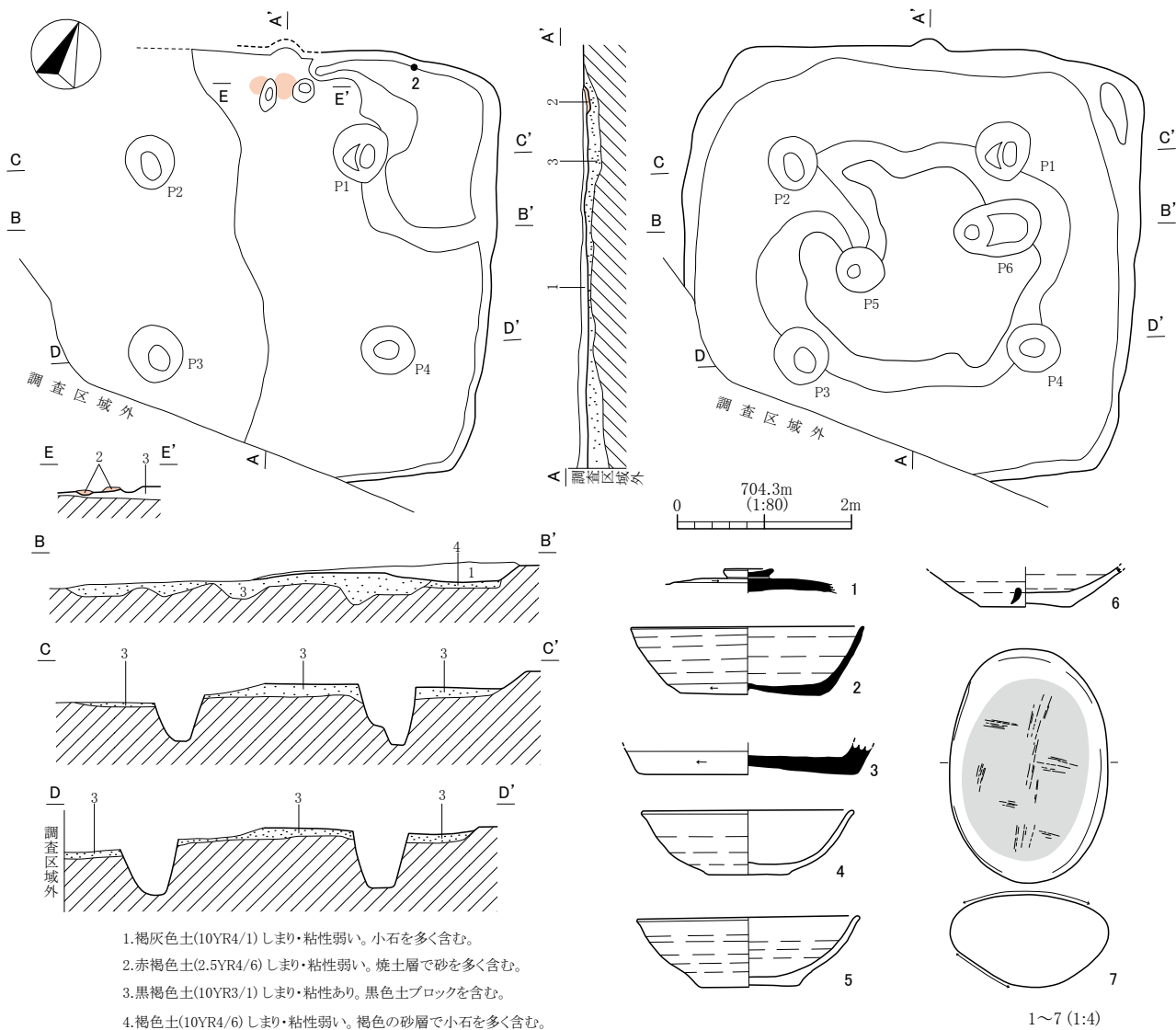
第 21 図 H19 号住居址及び出土遺物実測図

(17) H 21 号住居址

本址は調査区西側のソ-21・22・23、タ-22・23Gr で検出された。形態は方形で、検出規模は南北長 4.76 m、東西長 4.84 m で、検出部分の床面積は 19.07㎡である。主軸方位は N-20° -W を示す。壁高さは北東コーナーで 0.15 m を測る。床はやや軟質であったが、貼床は 0.01 ～ 0.16m の厚みで

貼られていた。ピットは6ヶ所確認され、P1～P4が支柱穴と考えられる。カマドは北壁中央で確認されたが、火床部と袖構築材の掘り込み穴が確認されたのみである。

本址からの出土遺物は少なく、7点を図示したのみである。これらの出土遺物より不確実ではあるが、本址は8世紀代の所産時期が考えられる。



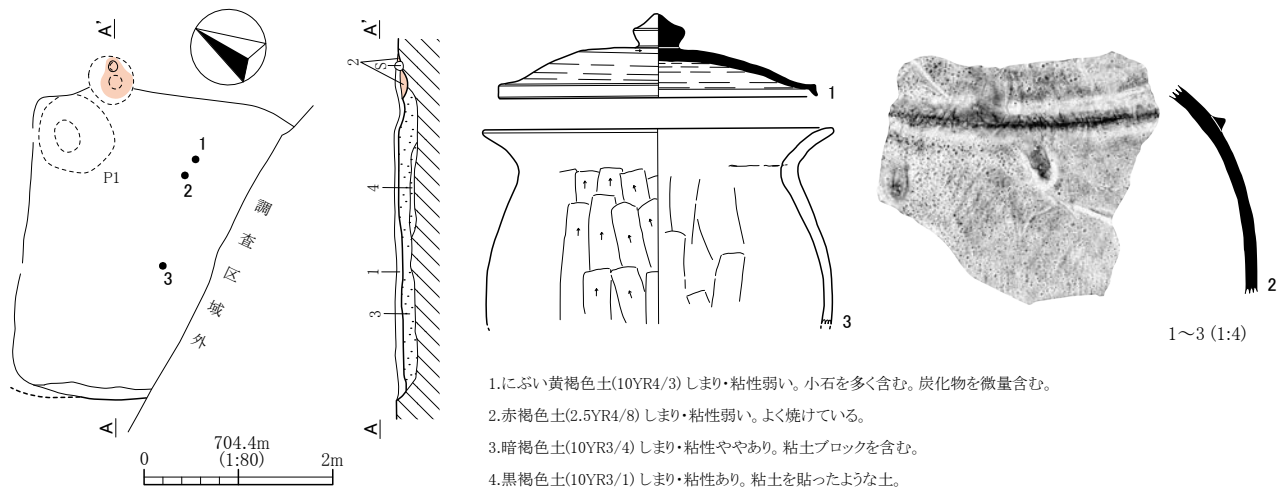
1. 褐灰色土(10YR4/1) しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
2. 赤褐色土(2.5YR4/6) しまり・粘性弱い。焼土層で砂を多く含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。黒色土ブロックを含む。
4. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。褐色の砂層で小石を多く含む。

第22図 H21号住居址及び出土遺物実測図

(18) H22号住居址

本址は調査区西側のセ-22・23Grで検出された。形態は不明で、カマド周辺部と一部硬質の床が検出された。検出規模は南北長3.12m、東西長2.70mで、検出部分の床面積は6.46㎡である。主軸方位はN-65° - Eを示す。壁高さは西壁で0.10mを測る。貼床は0.10～0.20mの厚みで貼られていた。ピットは掘方時に1ヶ所確認された。規模は径0.82m、深さ0.47mである。カマドは東壁北よりで検出された。火床部分のみの検出であったが、よく焼けていた。

本址からの遺物は覆土より出土し、3点を図示した。1は須恵器坏蓋であり、ほぼ完形である。2は須恵器壺であり、肩部に1条の凸帯を巡らしている。いわゆる「四耳壺」と呼ばれる器種と考えられる。3は土師器甕である。これらの出土遺物より不確実ではあるが、本址は8世紀代の所産時期と考えられる。



第 23 図 H22 号住居址及び出土遺物実測図

(19) H 3 号住居址

本址は調査区北側のウ-4・5、エ-4・5Gr で検出された。形態は長方形で、検出規模は南北長 4.18 m、東西長 2.74 m で、検出部分の床面積は 9.57 m² である。主軸方位は N-7°-W を示す。壁高さは北壁で 0.11 m を測る。ピットは 1 ケ所確認された。規模は径 0.26m、深さ 0.28m である。炉は住居址北より中央で検出された。炉は中央部に土器を敷き詰めた、いわゆる「土器埋設炉」であり、掘方は長軸 1.16m、幅 0.44m、深さ 0.13m を測る。埋設された土器内に顕著な焼土は確認できなかった。

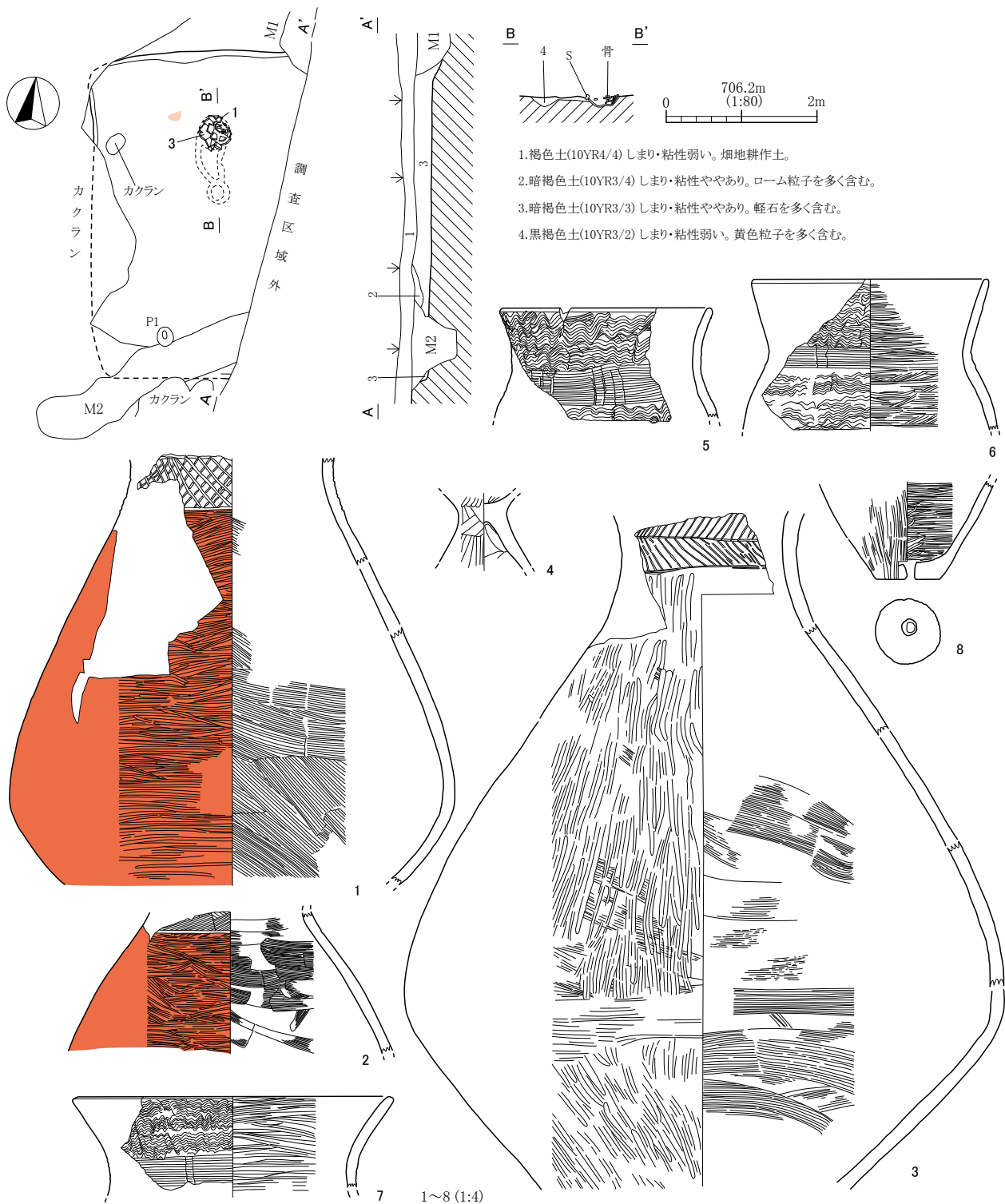
本址からの遺物は覆土や炉周辺より出土し、8 点を図示した。1～3 は壺であり、1 と 3 が炉に使われていた土器である。これら壺の頸部文様帯はいずれも異なっていた。4 は台付甕の脚部と考えられる。5～7 は甕で、いずれも櫛描波状文と頸部に櫛描簾状文が施されている。8 は単孔の甑である。これらの出土遺物より、本址は弥生後期の箱清水式期に位置づけられる。

(20) H 8 号住居址

本址は調査区北側のエ-5・6・7、オ-5・6・7Gr で検出された。形態は隅丸長方形で、西側の半分以上は調査区域外となる。検出規模は南北長 8.46 m、東西長 3.66 m で、検出部分の床面積は 20.97 m² である。主軸方位は N-12°-W を示す。壁高さは東壁で 0.30 m を測る。床は全体に硬質で、貼床は 0.01～0.06m の厚みで貼られていた。また、壁下の一部には壁溝が巡っており、規模は幅 0.14～0.18m、深さ 0.02～0.08m を測る。ピットは 11 ケ所が確認された。P1 と P11 は検出位置より支柱穴と考えられ、本址は 6 本の支柱穴の可能性がある。P4～P7 は入口施設と考えられる。P3 は貯蔵穴で住居側の床上に土手状の土盛りが検出された。P8～P10 は壁柱穴で、それぞれ支柱穴に対応した位置に検出された。

本址からの出土遺物は非常に多く、第 28 図に示したように住居址中央部にまとまった状態で出土した。出土状態は住居中央に近いほど床面に近く、西壁際近くなるに従い床と出土遺物の間に黒色土の堆積が確認された為、これら遺物は住居廃絶後しばらく時間が経過した後に住居内に破棄された遺物群と考えられる。

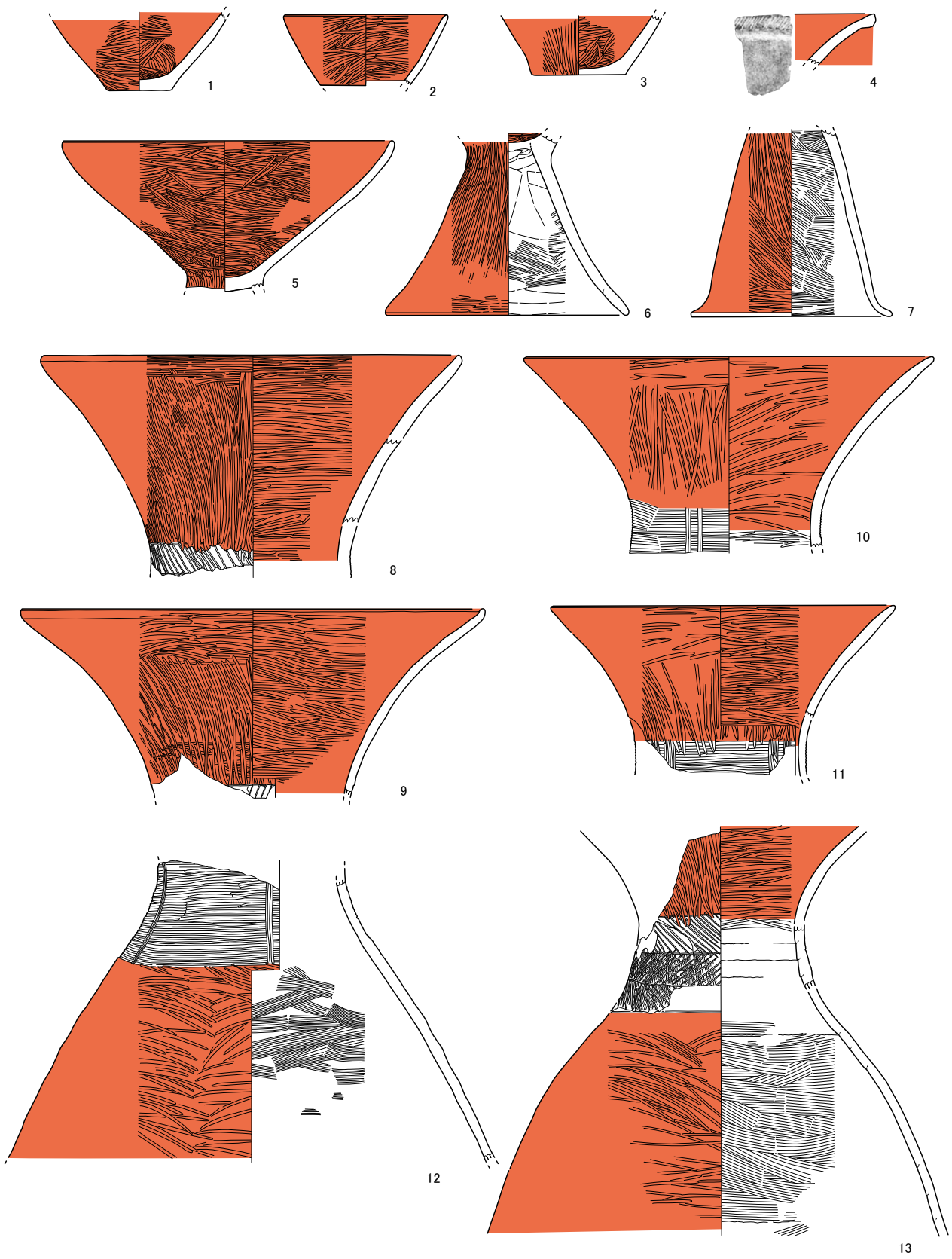
出土遺物は 62 点を図示した。1～3 は鉢でいずれも赤彩が施されている。4～7 は高坏であり、4 は坏部の口唇部に櫛描斜走文が施されている。8～24 は壺である。いずれも頸部に文様帯をもち赤彩が施されている。頸部文様帯の内、15～17 は篋描沈線の区画内に細い棒状工具による円形刺突が施されており、15・16・18 は区画が鋸歯文を呈する。25 は鉢と考えられるが、壺の欠損部をミガキ、擬似口縁状につくりだしている。26～47 は甕である。文様は櫛描波状文、櫛描斜走文が主体で、頸部に櫛描簾状文を施す。特殊なものとして、35 と 45～47 は地文が縄文施文となる。41 は櫛描簾状文を刺突状に施文した文様である。48 はミニチュア土器と考えられる。49 は無頸壺



第 24 図 H 3 号住居址及び出土遺物実測図

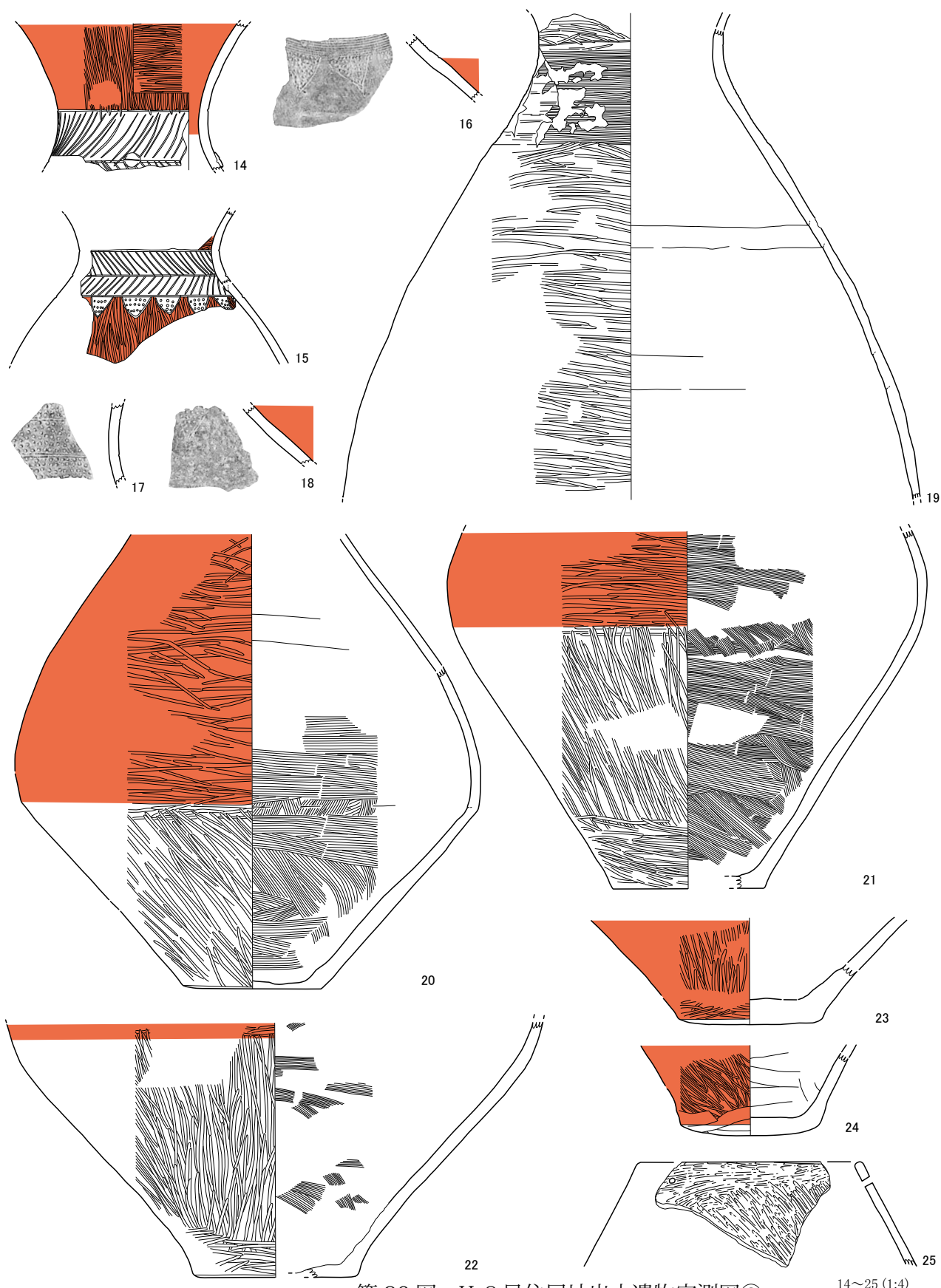
と考えられる。やや黒味をおび黒色処理のような状態である。50～61は石製品で、敲き或いは磨りが観察できる。62は上下は欠損しているが4面が擦れた砥石と考えられる。

これらの出土遺物から、本址は弥生後期の箱清水期に位置づけられると考える。



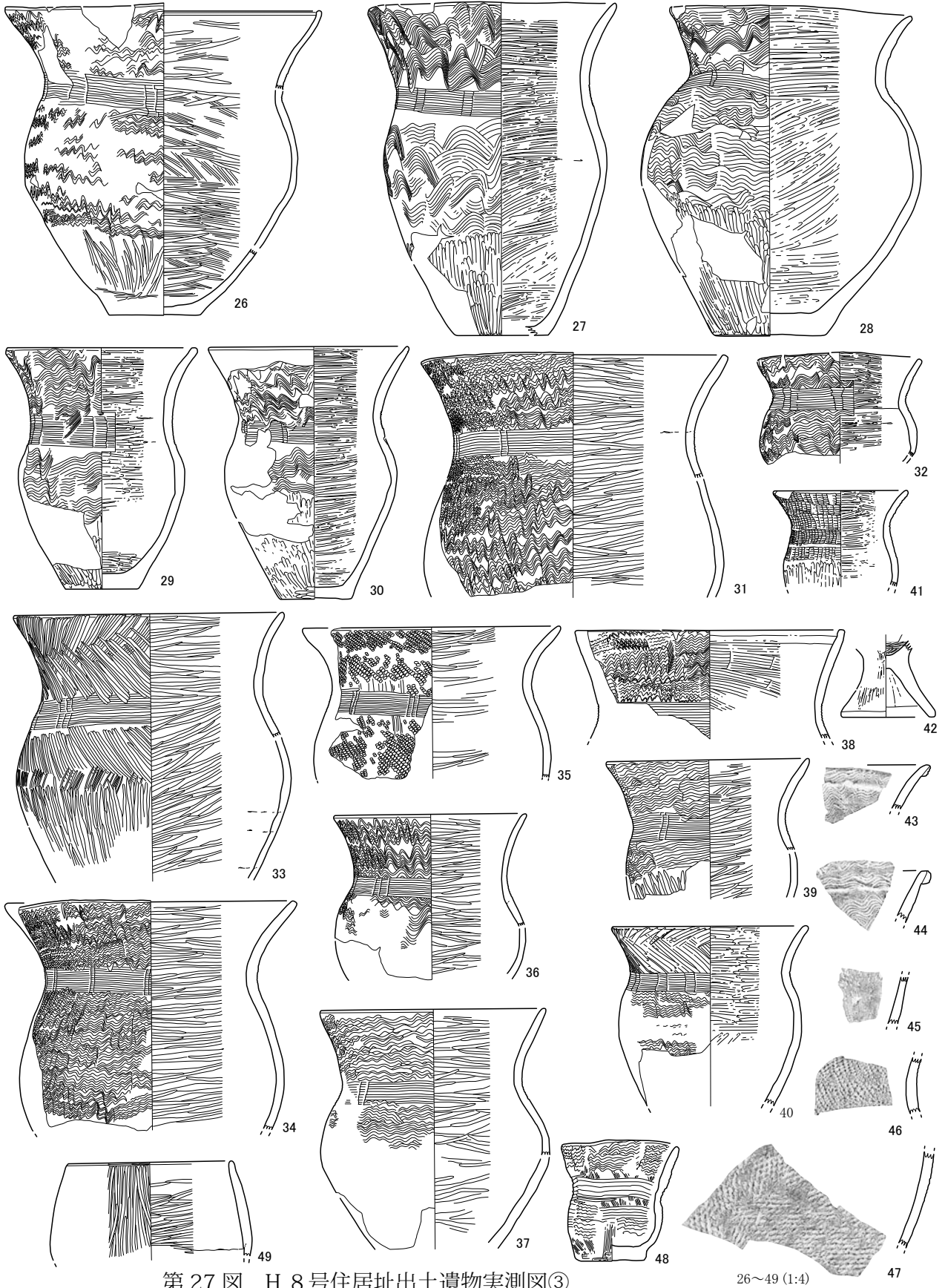
第 25 图 H 8 号住居址出土遺物実測図①

1~13 (1:4)



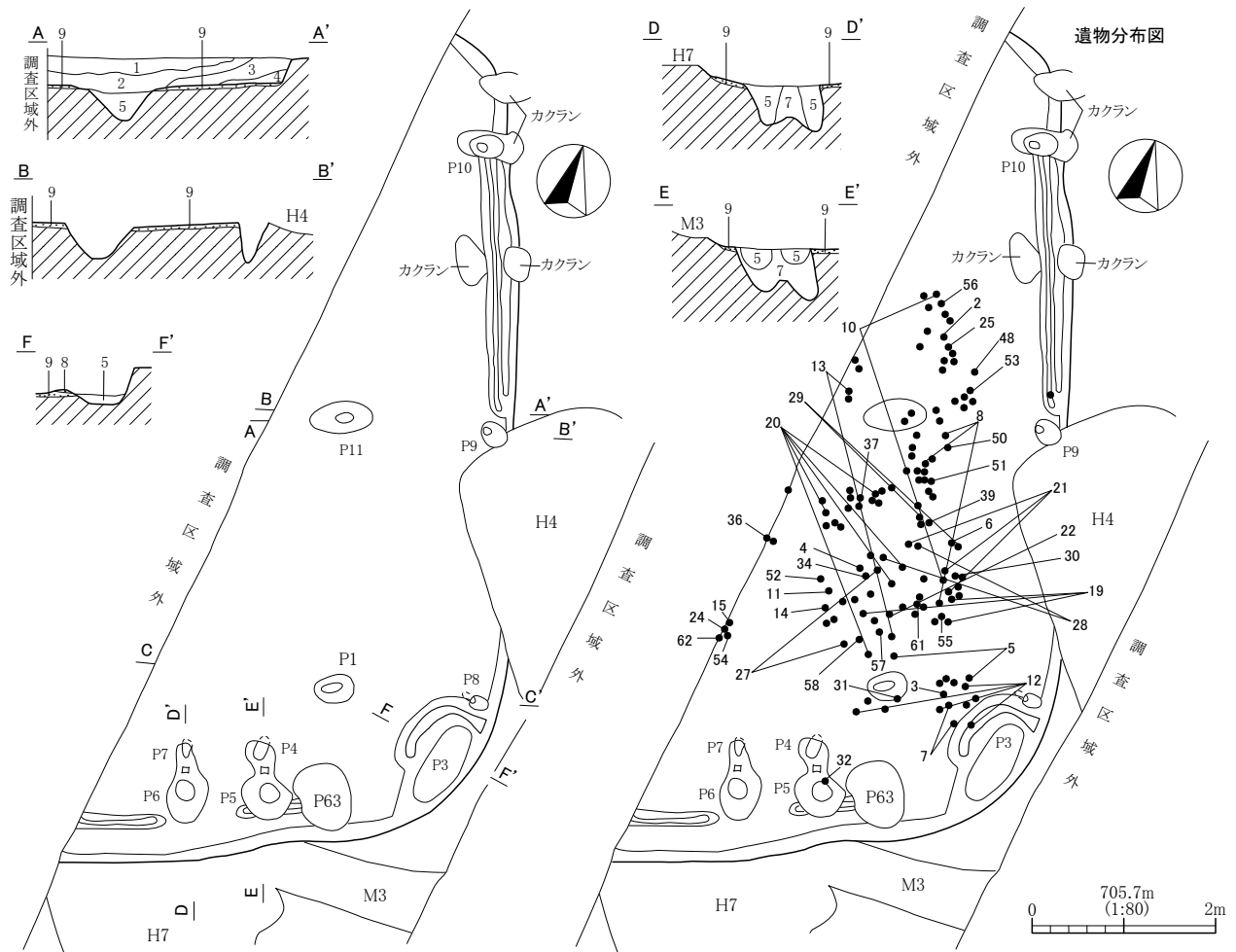
第 26 图 H 8 号住居址出土遗物实测图②

14~25 (1:4)

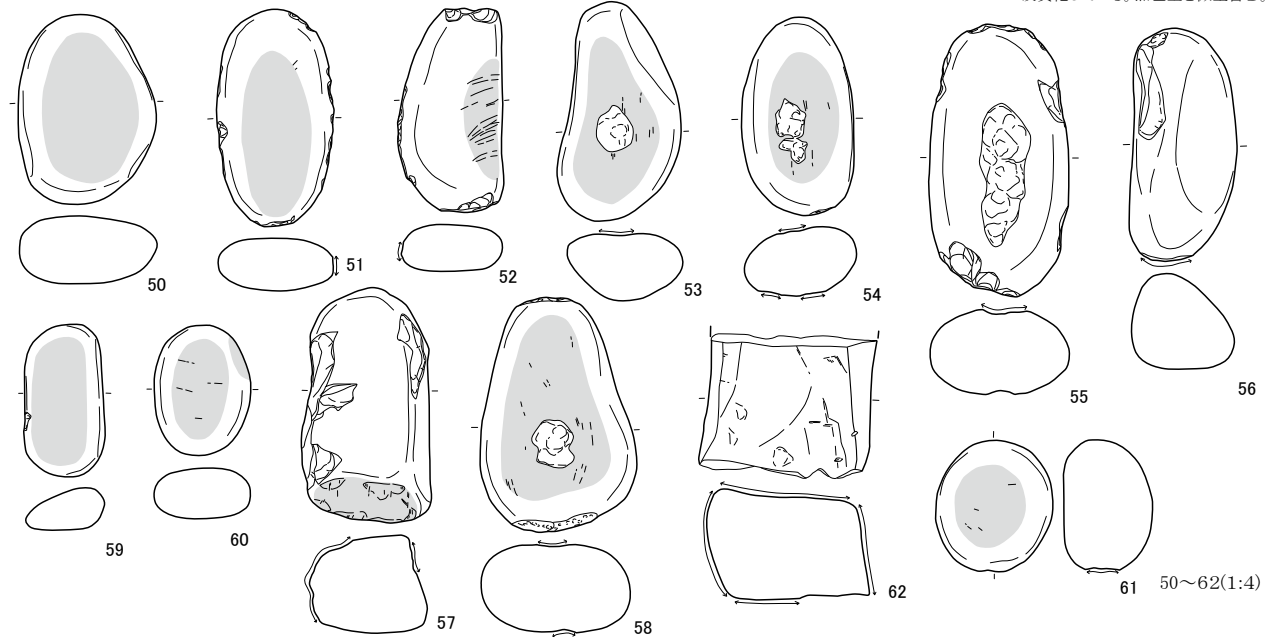


第 27 图 H 8 号住居址出土遗物实测图③

26~49 (1:4)



1. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。
 2. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。軽石を多く含む。
 3. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性あり。ローム粒子を多く含む。
 4. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。ローム粒子を含む。
 5. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。
 6. 黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性あり。ロームブロックを多く含む。
 7. 黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性ややあり。ローム粒子と黒色土の混合土。
 8. 明黄褐色土(10YR6/8) しまりあり。ローム主体。
 9. 黄橙色土(10YR7/8) しまりややあり。一部上面硬質化している。黒色土を微量含む。



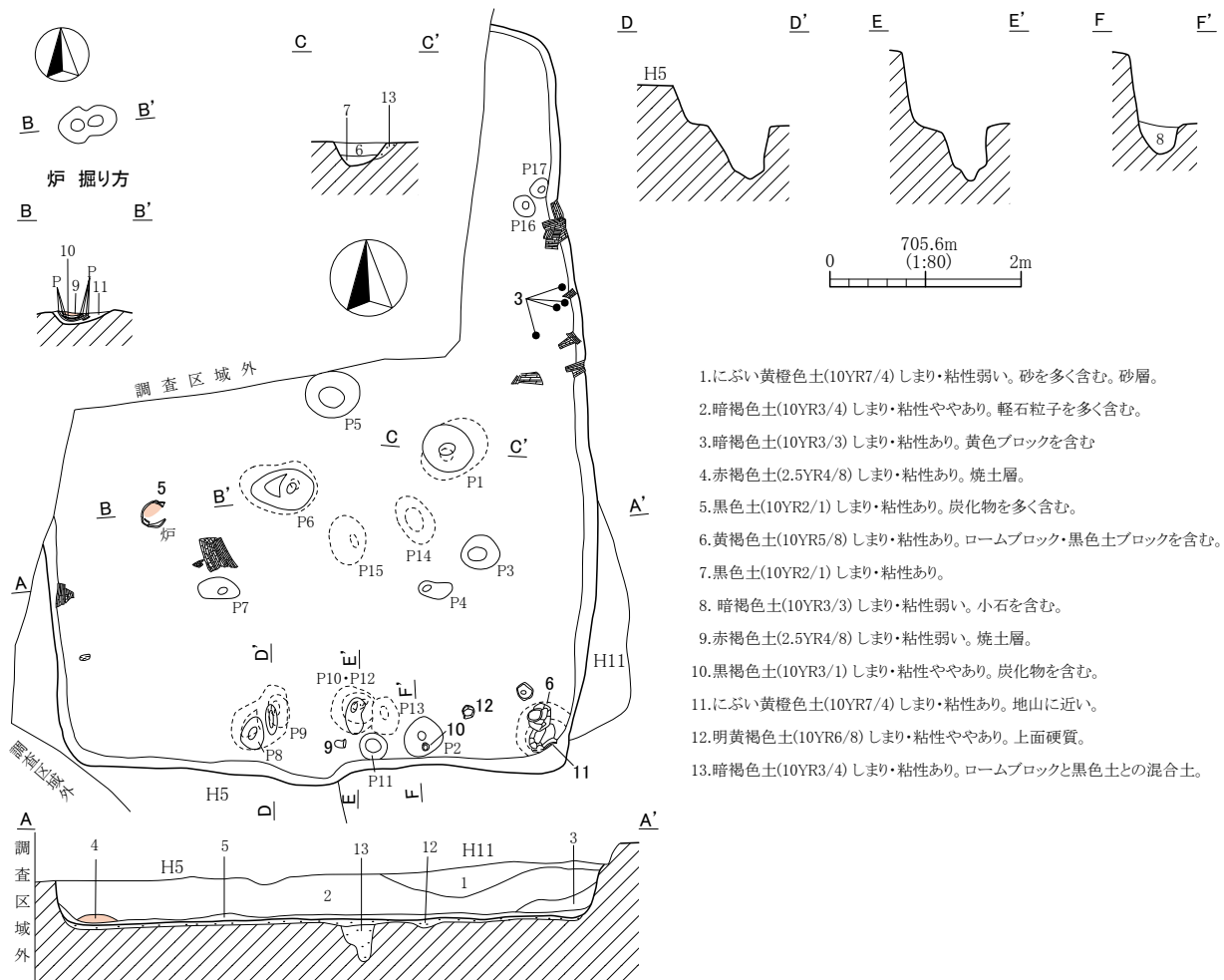
第28図 H8号住居址及び出土遺物実測図

(21) H 16 号住居址

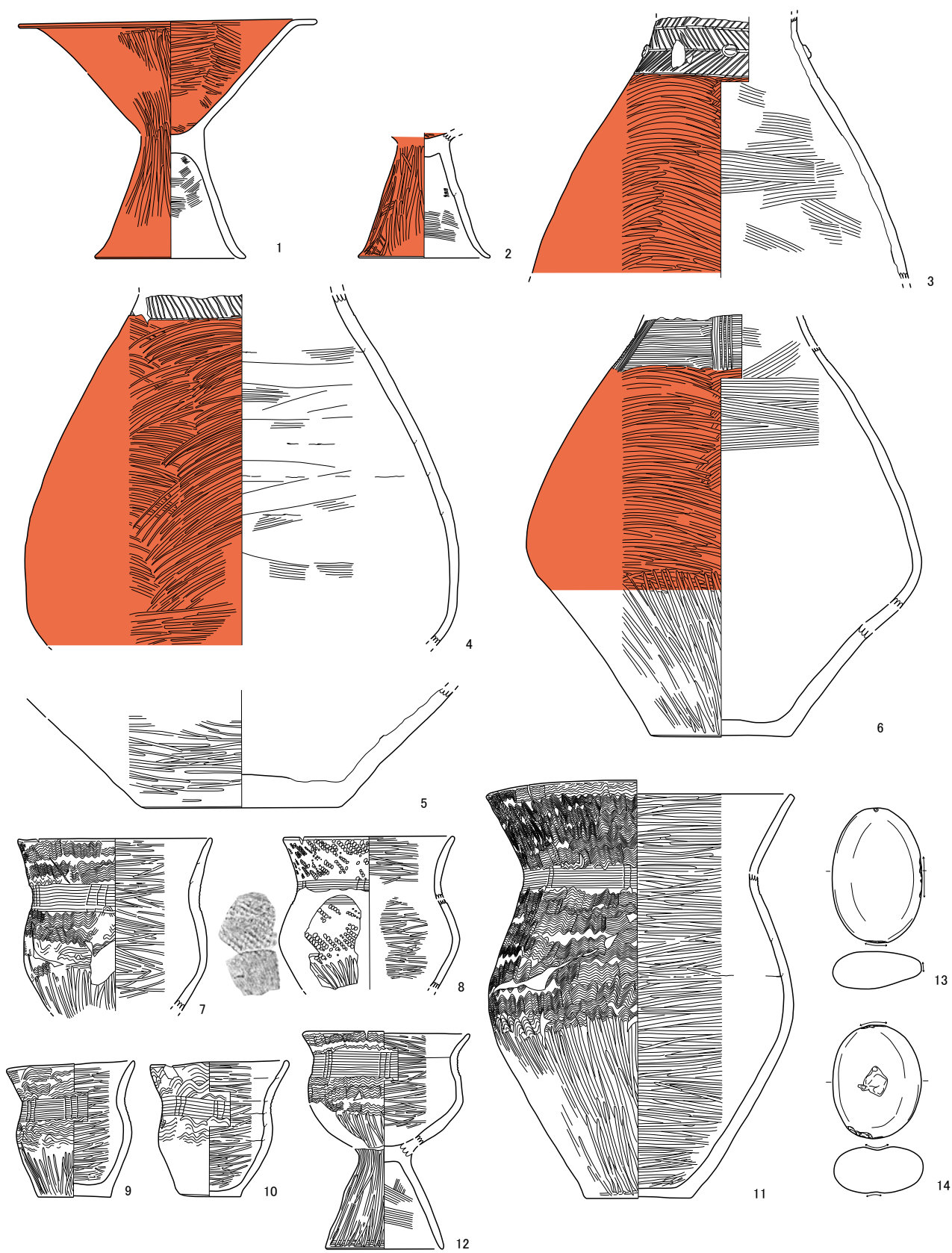
本址は調査区北側のオ-10・11・12、カ-10・11・12、キ-11・12Grで検出された。形態は長方形で、北西側の1/3は調査区域外となる。検出規模は南北長7.56m、東西長5.50mで、検出部分の床面積は24.28㎡である。主軸方位はNを示す。壁高さは南東コーナーで0.76mを測る。床は全体に硬質で、貼床は0.02～0.04mの厚みで貼られていた。また、床面上からは多量の炭化材が出土し、本址が焼失家屋の可能性を示していた。ピットは17ヶ所確認された。P8～P10、P12・P13は入口施設と考えられる。P1とP6及びP14とP15は入口施設と支柱穴のような位置関係に検出され、或いは本址の内側に重複する住居址がもう一軒存在した可能性がある。炉は西壁よりで検出された。いわゆる「土器埋設炉」であり、図示した5が据え置かれていた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特に南壁の入口付近からまとまって出土した。出土遺物は14点を図示した。1と2は高坏である。いずれも赤彩が施されている。3～6は壺である。頸部に櫛描横線文、篋描斜線文がそれぞれ施されている。7～11は甕である。9と10は小型でミニチュア土器として捉えた方がよいかもしれない。8は地文に縄文施文を行い、頸部に櫛描簾状文を施している。その他のものは地文に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。12は台付甕であり、地文に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。13と14は敲き石である。

本址はこれらの出土遺物から、弥生時代後期の箱清水期に比定されると考えられる。



第 29 図 H16 号住居址実測図



第 30 图 H16 号住居址出土遗物实测图

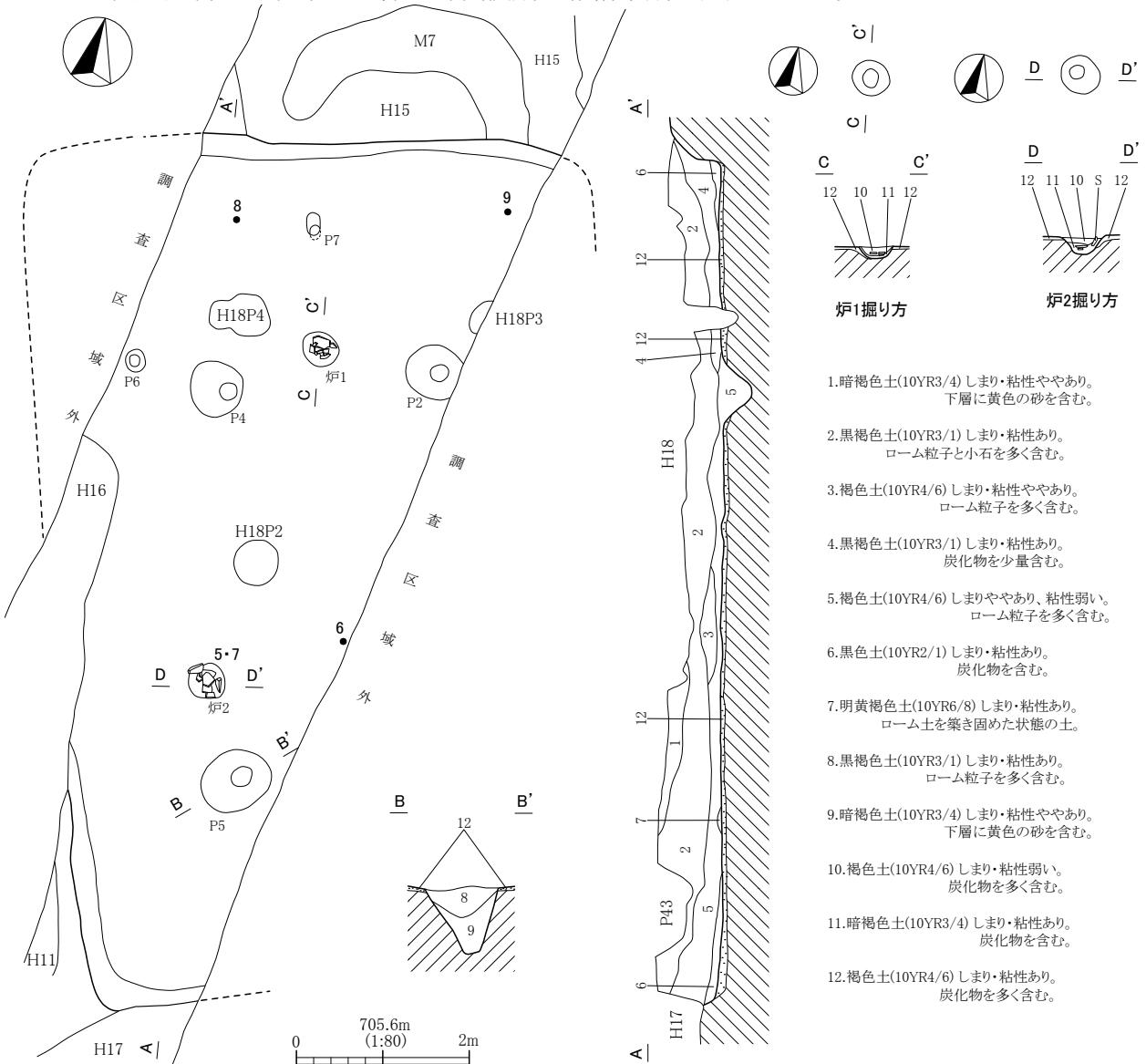
1~14 (1:4)

(22) H 20 号住居址

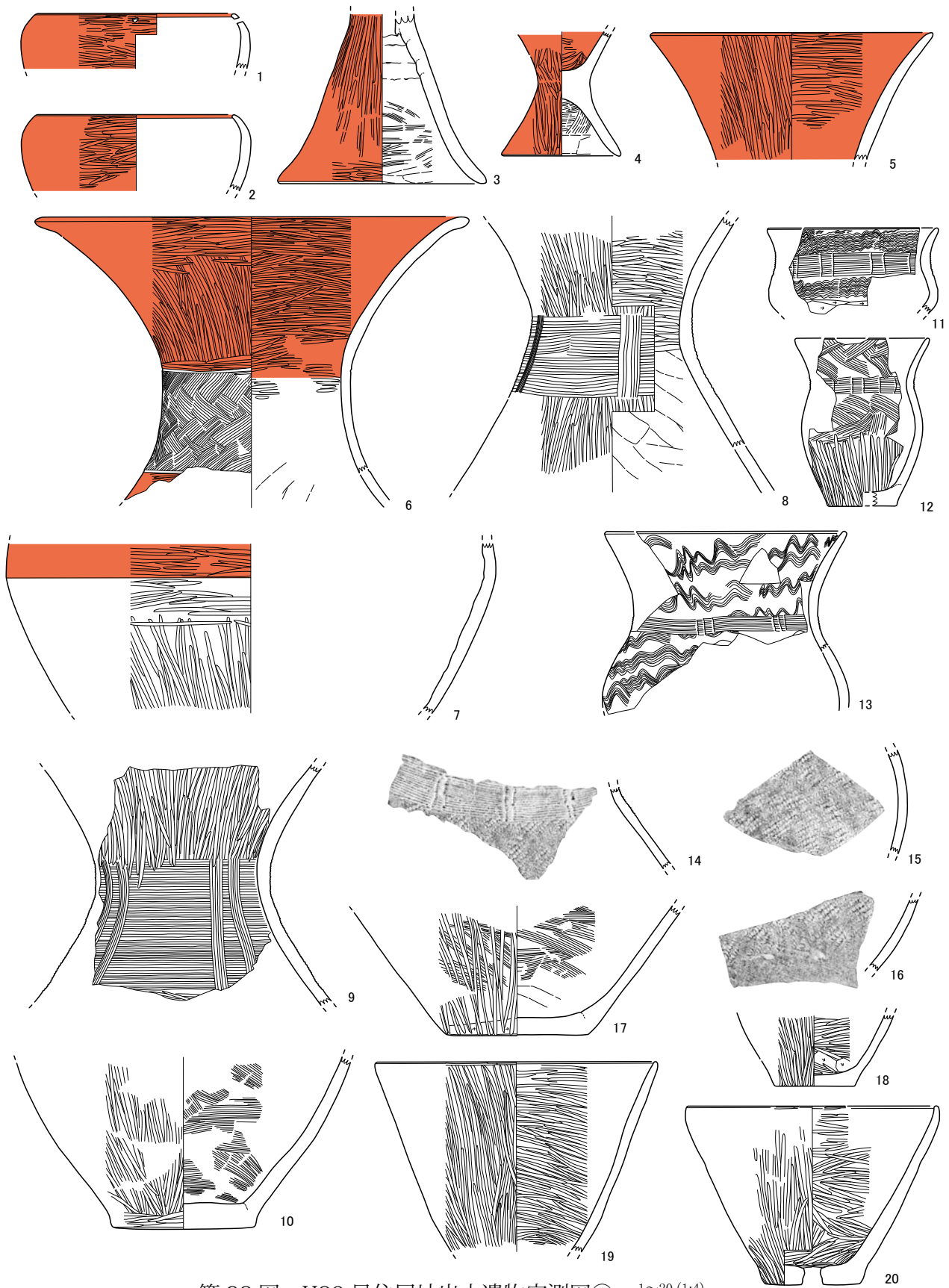
本址は調査区北側のエ-9・10・11、オ-9・10・11Gr で検出された。形態は隅丸長方形で、西側と東側が調査区域外となるため、住居中央部のみの検出となった。検出規模は南北長 8.16 m、東西長 4.16 m で、検出部分の床面積は 29.39㎡である。主軸方位は N-17° -W を示す。壁高さは北壁で 0.57 m を測る。床は全体に硬質で、一部に張替が確認された。貼床は 0.02 ~ 0.08m の厚みで貼られていた。ピットは 5ヶ所が確認された。P2・P4・P5 は検出位置より支柱穴と考えられ、P7 は棟持ち柱と考えられる。炉は 2ヶ所に検出された。いずれも「土器埋設炉」の形態である。規模は炉 1 が径 0.42m、深さ 0.12m、炉 2 が径 0.44m、深さ 0.18m を測る。顕著な焼土は確認されなかった。

出土遺物は 26 点を図示した。覆土や床面上より出土した。1 と 2 は鉢でいずれも赤彩が施されている。3 と 4 は高坏である。5 ~ 10 は壺であり、8 と 9 は無彩である。11 ~ 18 は甕である。11 は形態より台付甕の可能性がある。16 ~ 18 は地文に縄文を施文する。20 は単孔の甑であり、19 も形態より甑と考えられる。21 は敲き石、22・23 は磨り石である。24 は土製の勾玉である。25 と 26 は縄文後期の土器片である。

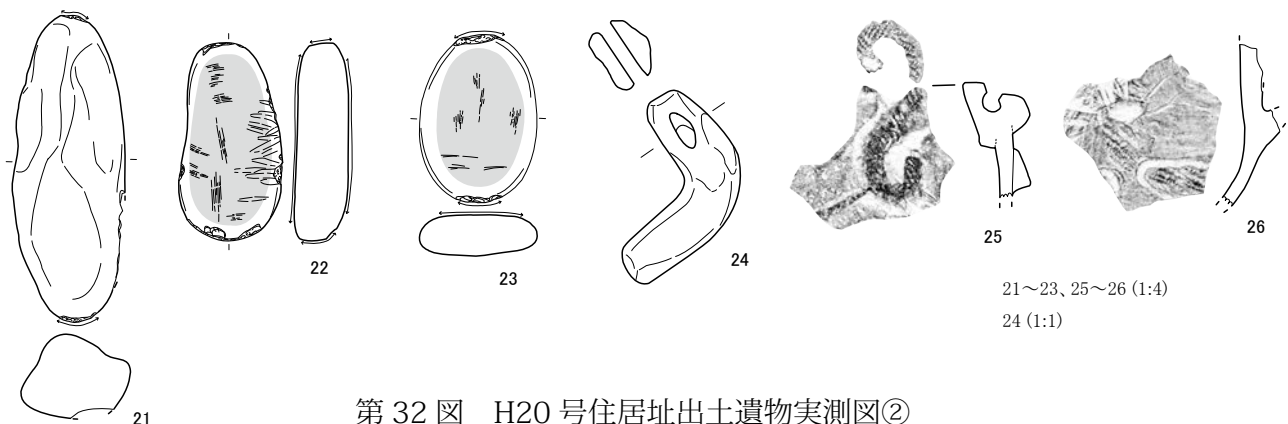
これらの出土遺物から、本址は弥生時代後期の箱清水期に比定される。



第 31 図 H20 号住居址実測図



第 32 图 H20 号住居址出土遺物実測図① 1~20 (1:4)



第 32 図 H20 号住居址出土遺物実測図②

2. 土 坑

今回の調査では 13 基の土坑を調査した。いずれも形態が整うものは無かったが、D2 号土坑は覆土の状況や、土坑底面から湧水があり井戸粹片と考えられる木片等が出土したことから、井戸址の可能性もある。また、所産時期も周辺部の調査成果と同じく中世と考えられる。また、D10 号土坑と D14 号土坑は形態的に似ており同一性格の遺構と考えられる。なお、表に記載した出土遺物はいずれも小片であり、図化することはできなかった。図化したものは D1 号土坑の金属製品、D11 の土師器坏のみであった。

第 1 表 土坑計測表

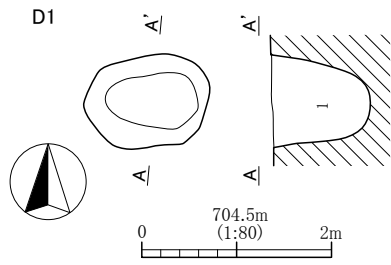
単位(m) < > 検出値

遺構名	形態	検出位置	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	備考
D1	楕円形	オ・カ-17	1.34	0.94	1.06	須恵器坏・甕 土師器坏	
D2	楕円形	オ・カ-17	<1.88>	1.78	1.49	弥生甕 木片	中世
D3	円形	オ・カ-22	1.24	1.08	0.15	須恵器坏・甕	
D4	不整形	オ-7	<0.82>	0.90	0.15	須恵器坏	
D5	円形	キ-21・22	1.20	1.10	0.57	弥生碗	柱痕
D6	円形	キ-22	0.96	0.90	0.37		
D7	不整形	ク-22	1.78	1.10	0.14		
D9	円形	ク・ケ-22	0.92	0.86	0.54	須恵器坏・甕 土師器甕 弥生壺	
D10	方形?	シ-22・23	2.10	<0.86>	0.29	須恵器甕 土師器坏・甕(武蔵型)	
D11	楕円形	シ-22	1.10	0.78	0.44	須恵器坏 土師器甕(ロクロ)	
D12	円形	ス-22	1.18	0.98	0.14	須恵器坏 土師器甕(ロクロ)	
D13	方形	ス・セ-21	1.32	1.26	0.13	須恵器坏 土師器坏・甕 弥生壺	
D14	方形	ケ-22	1.88	1.72	0.12		

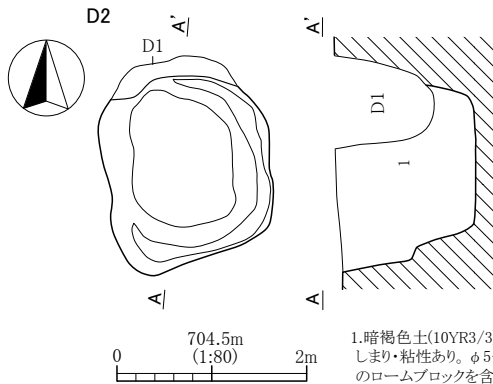
3. 溝状遺構

(1) M 1 号溝状遺構

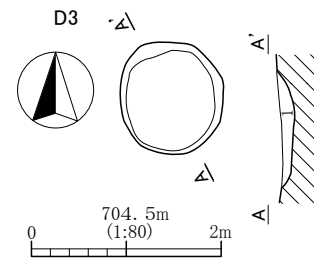
本址は調査区北端ウ - 3 G r で検出された。断面形状は U 字形で、検出長 4.15 m である。規模は幅 0.50 ~ 0.56 m、深さ 0.30 ~ 0.45 m である。溝は南北方向に延び、検出部の中央が一段窪んでいた。本址からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。



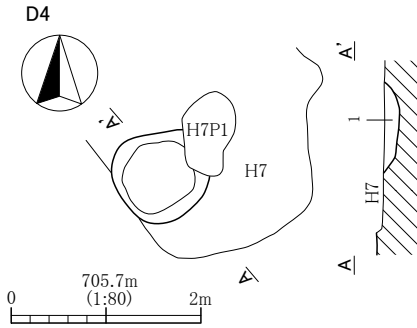
1.暗褐色土(10YR3/3)
しまり・粘性あり。
φ5~6mmのロームブロックを多く含む。



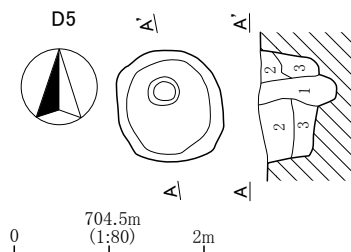
1.暗褐色土(10YR3/3)
しまり・粘性あり。φ5~6mm
のロームブロックを含む。



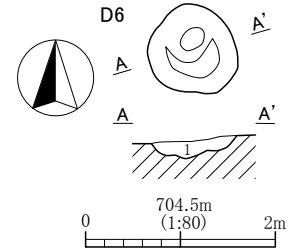
1.にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまり・粘性弱い。
砂を多く含む。



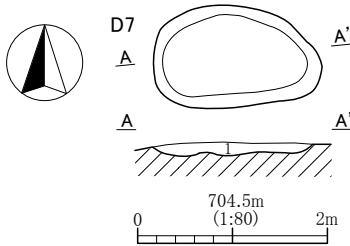
1.黒褐色土(10YR3/1)
しまりあり。粘性ややあり。
ローム粒子を含む。



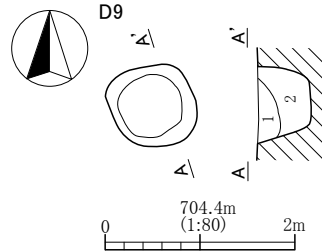
1.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い。
2.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性ややあり。
黒色土ブロックを含む。
3.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性弱い。黄色の砂。



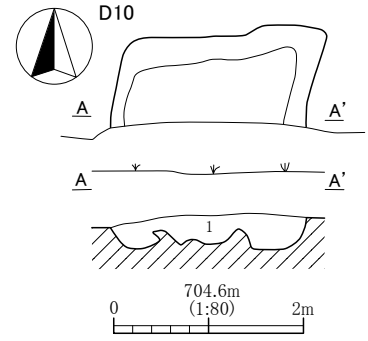
1.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。
小石を多く含む。



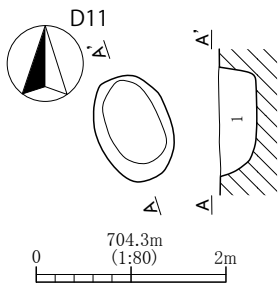
1.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い。小石を多く含む。



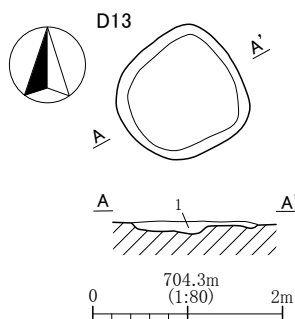
1.褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。砂を多く含む。
2.灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い。砂層。



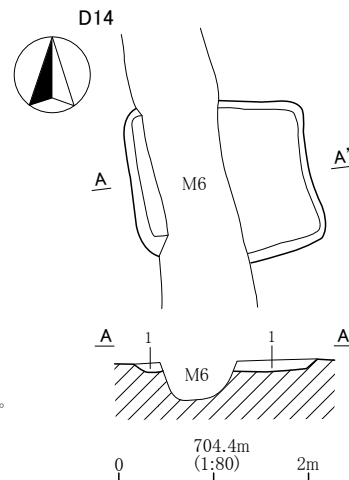
1.褐灰色土(10YR4/1)
しまり・粘性弱い。砂を多く含む。



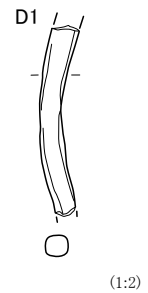
1.褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。
小石を多く含む。



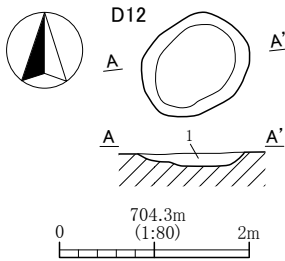
1.暗褐色土(10YR3/3)
しまり・粘性弱い。
黒色の粘土ブロックを含む。



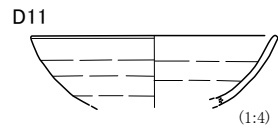
1.褐灰色土(10YR5/1) 小石を多く含む。



(1:2)



1.褐灰色土(10YR5/1)
しまり弱く、粘性ややあり。
灰色の砂が主体。



(1:4)

第33図 土坑及び出土遺物実測図

(2)M 2号溝状遺構

本址は調査区北、ウ-4、エ-4・5Grで検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は2.95m、幅0.54～0.88m、深さ0.22～0.48mである。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(3)M 3号溝状遺構

本址は調査区北、エ・オ-7Grで検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は2.44m、幅0.54～0.68m、深さ0.06～0.16mである。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は灰釉陶器皿片、須恵器甕片、内面黒色処理された土師器坏片が出土したがいずれも小片で図化できなかった。所産時期も不明である。

(4)M 4号溝状遺構

本址は調査区北、オ-8Grで検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。覆土は砂が多く混入していた。検出長は1.37m、幅0.80～0.84m、深さ0.08～0.09mである。南側はH15号住居址で切られる。本址からの出土遺物は弥生土器片が多数出土した。遺構の新旧関係より古代以前の所産時期が考えられる。

(5)M 5号溝状遺構

本址は調査区北、オ-11Grで検出された。溝断面形状はV字形であった。検出長は2.42m、幅0.32～0.54m、深さ0.10～0.34mである。西側は地形の傾斜により検出できなかった。本址からの出土遺物は無く、所産時期も不明である。

(6)M6号溝状遺構

本址は調査区南、ケ-21・22・23Grで検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は4.95m、幅0.84～1.02m、深さ0.36～0.39mである。調査区を横断するように、南北方向に延びると考えられる。本址からの出土遺物は灰釉陶器皿片、須恵器坏・甕片、内面黒色処理された土師器坏片等があった。本址の所産時期は不確実であるが古代と考えられる。

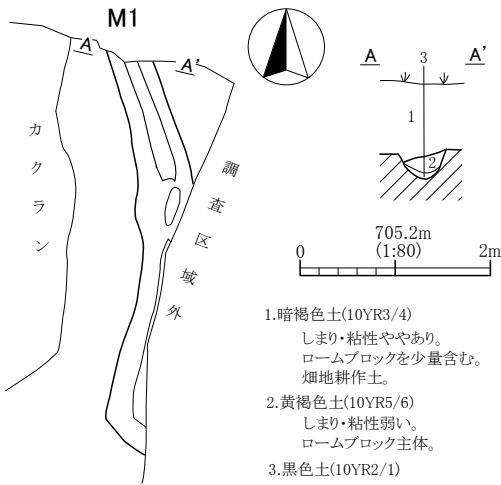
(7)M7号溝状遺構

本址は調査区南、エ-9、オ-8・9Grで検出された。溝断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。検出長は3.73m、幅0.50～0.74m、深さ0.09～0.15mである。形態は円形に屈曲しており、形状はいわゆる円形周溝墓的な様相を示す。本址からの出土遺物は弥生高坏片、弥生壺・甕片、鉢があった。本址の所産時期は不確実であるが、弥生後期箱清水期と考えられる。

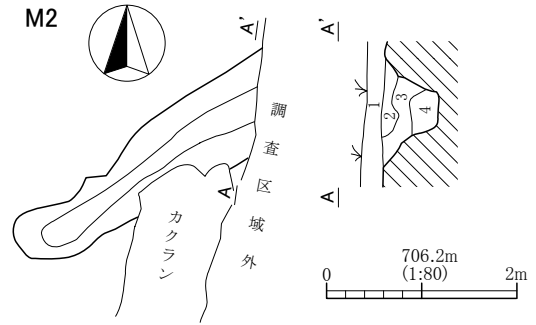
4. ピット

今回の発掘調査では63基の単独ピットを調査した。調査範囲が道路幅範囲と限定されているため、掘立柱建物址に認定できるピットは確認できなかったが、D 5号土坑—P 49—D 9号土坑の並びは北に広がる掘立柱建物址の可能性が指摘できる。また、P 22—P 23—P 24—P 30—P 31は柵列として捉えられるかもしれない。

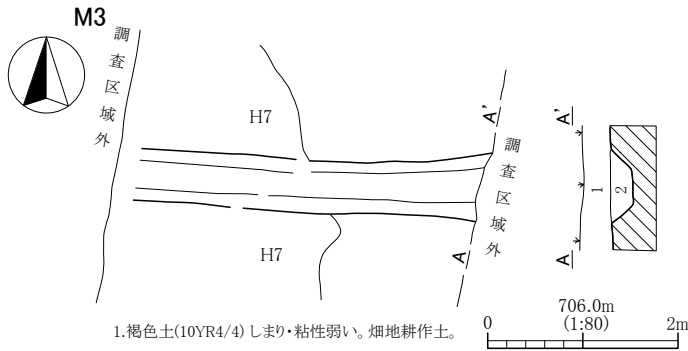
各ピットの出土遺物は計測表に記載したが、いずれも小片であり図化できるものは無かった。また、出土遺物よりピットの所産時期を確定できるものもなく、遺構の新旧関係より導き出された先後関係しか把握できなかった。



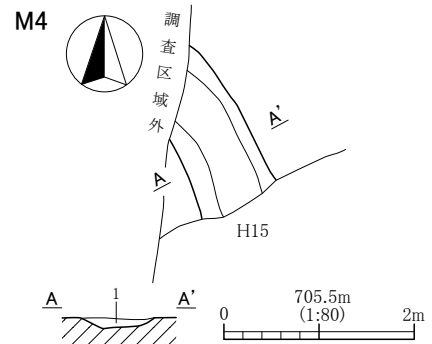
- 1.暗褐色土(10YR3/4)
しまり・粘性ややあり。
ロームブロックを少量含む。
畑地耕作土。
- 2.黄褐色土(10YR5/6)
しまり・粘性弱い。
ロームブロック主体。
- 3.黒色土(10YR2/1)
しまり・粘性ややあり。
軽石ブロックを含む。



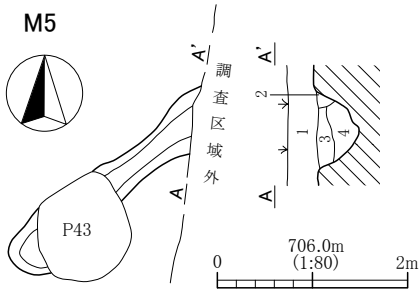
- 1.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。畑地耕作土。
- 2.黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性ややあり。ロームブロック多い。
- 3.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性あり。
- 4.暗褐色土(10YR3/4)しまり・粘性弱い。ローム粒子多い。



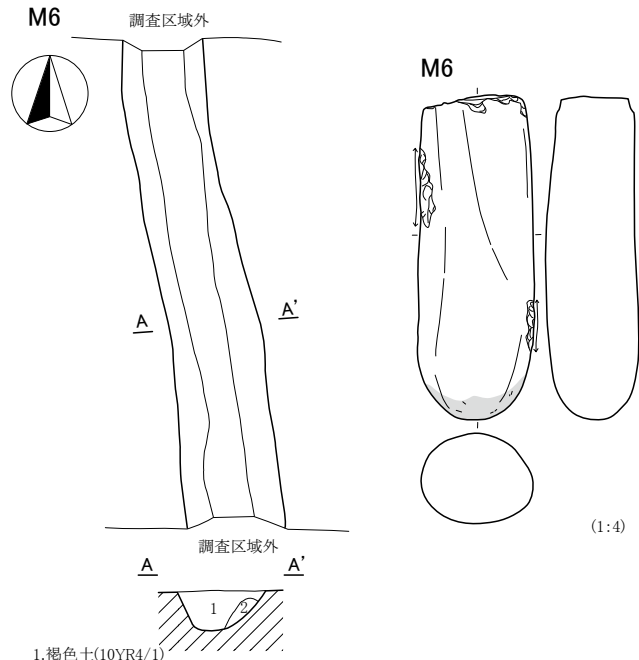
- 1.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。畑地耕作土。
- 2.暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱い。
ロームブロックを少量含む。



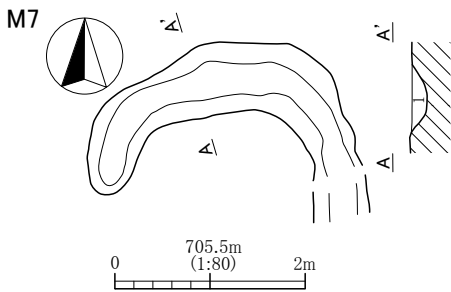
- 1.にぶい黄褐色土(10YR5/3)
しまり・粘性弱い。砂を主体的に含む



- 1.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性弱い。畑地耕作土。
- 2.黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性弱い。砂の層。
- 3.にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり・粘性弱い。小石を多く含む。
- 4.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性ややあり。小石を多く含む。

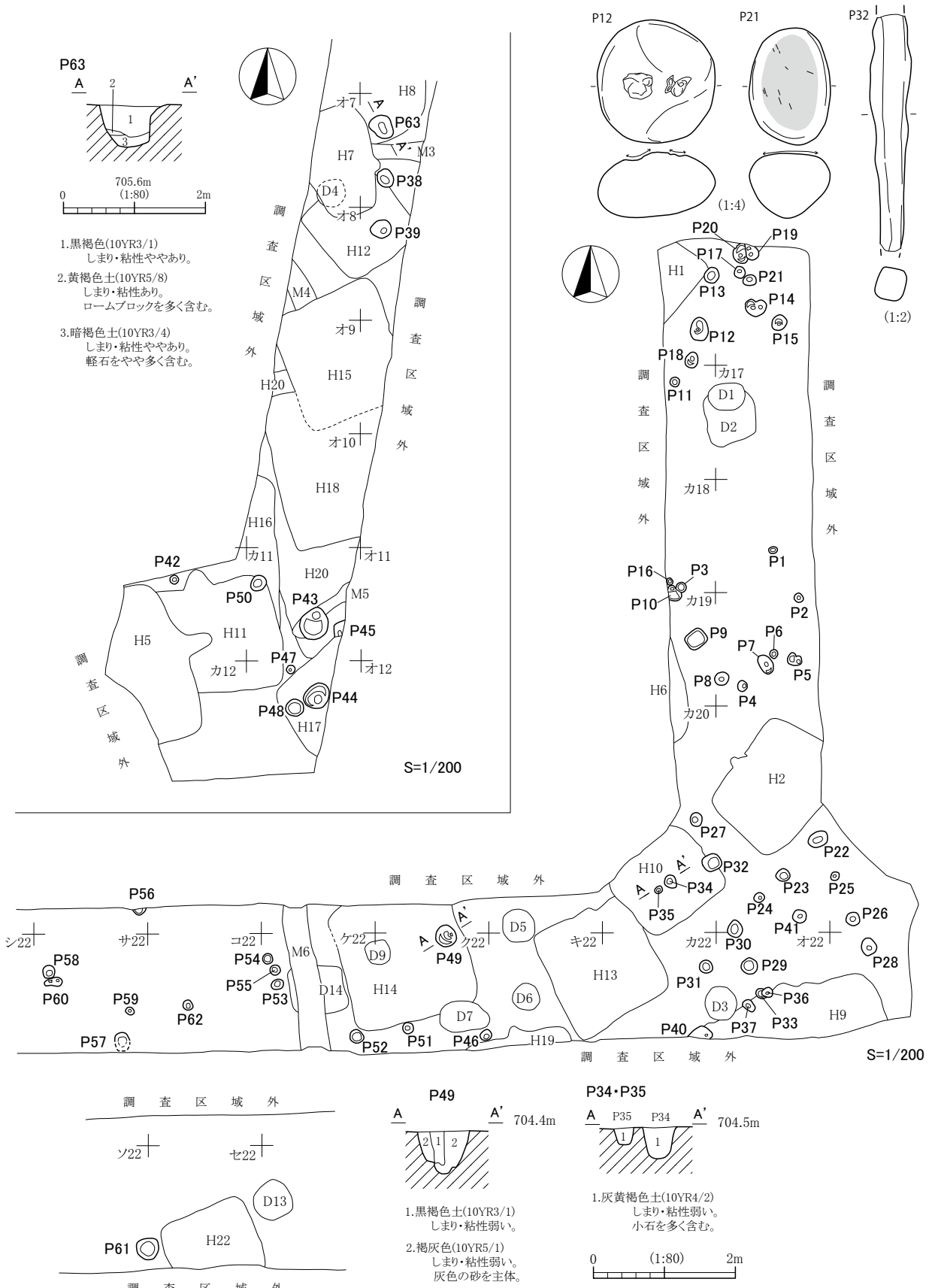


- 1.褐色土(10YR4/1)
しまり・粘性あり。灰色の粘土ブロックと炭化物を多く含む。
- 2.褐色土(10YR4/6)
しまり・粘性強い。小石を多く含む、黄色の砂のブロックを含む。



- 1.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。ロームブロックを多く含む。

第 34 図 溝状遺構及び出土遺物実測図

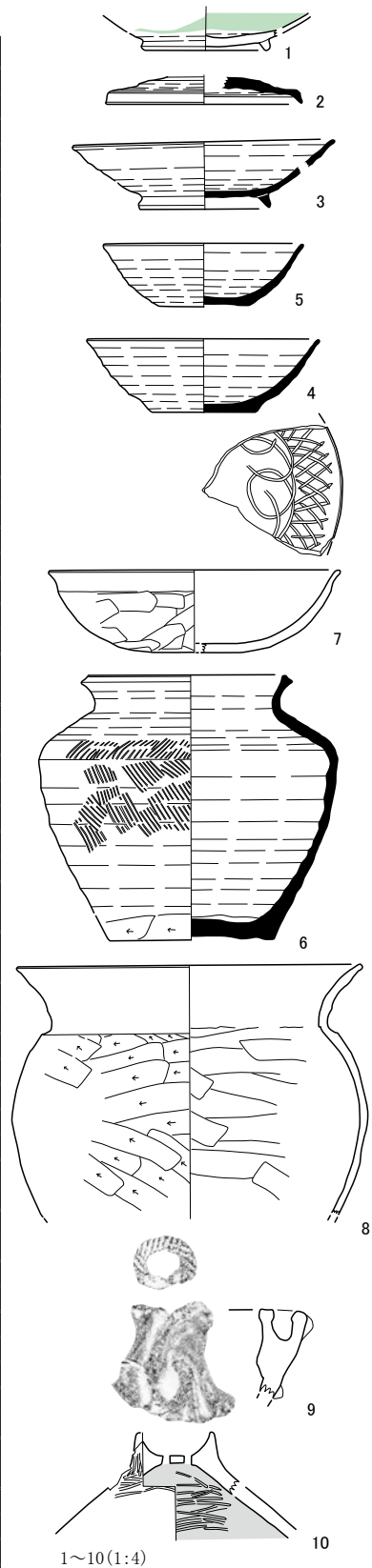


第 35 図 ピット及び出土遺物実測図

第2表 ピット計測表

単位 m () 推定 < > 残存

No.	検出位置	形態	長径	短径	深さ	出土遺物・備考
1	オー18	円形	0.28	0.25	0.06	
2	オー19	円形	0.35	0.33	0.16	弥生壺
3	カ一18・19	円形	0.38	0.34	0.13	
4	オー19	円形	0.40	0.35	0.21	須恵甕
5	オー19	不整形	0.52	0.32	0.10	
6	オー19	円形	0.31	0.29	0.11	
7	オー19	楕円形	0.75	0.44	0.21	須恵甕
8	オー19	円形	0.54	0.49	0.16	
9	カ一19	方形	0.74	0.64	0.50	須恵坏・甕 土師甕 弥生壺
10	カ一18・19	不整形	0.58	<0.33>	0.22	須恵壺 土師甕
11	カ一17	円形	0.36	0.32	0.09	
12	カ一16	楕円形	0.82	0.61	0.70	土師内黒坏
13	オ・カ一16	円形	0.58	0.50	0.18	土師内黒坏
14	オ一16	不整形	0.74	0.56	0.40	弥生甕
15	オ一16	円形	0.62	0.54	0.57	土師甕
16	カ一18	円形	0.24	0.19	0.14	
17	オ一16	円形	0.48	0.40	0.29	
18	カ一16・17	円形	0.54	0.45	0.62	
19	オ一15・16	楕円形	<0.54>	0.44	0.62	
20	オ一15・16	楕円形	0.69	0.44	0.55	
21	オ一16	円形	0.49	0.40	0.11	
22	オ一21	楕円形	0.75	0.52	0.56	須恵坏・甕 土師甕
23	オ一21	円形	0.50	0.46	0.28	須恵坏 土師坏
24	オ一21	円形	0.37	0.33	0.17	
25	エ一21	円形	0.30	0.28	0.24	
26	エ一21	円形	0.48	0.48	0.34	土師甕 弥生甕
27	カ一20・21	円形	0.51	0.45	0.18	土師内黒坏
28	エ一22	円形	0.57	0.54	0.57	須恵甕 土師甕 弥生甕
29	オ一22	円形	0.57	0.52	0.29	須恵坏・甕 弥生壺・甕
30	オ一21・22	円形	0.64	0.50	0.17	須恵蓋 土師甕
31	カ一22	円形	0.47	0.44	0.28	
32	オ・カ一21	方形	0.69	0.59	0.29	須恵坏 土師甕 弥生甕
33	オ一22	円形	0.41	0.37	0.13	土師内黒坏
34	カ一21	不整形	0.52	0.46	0.43	須恵坏 土師坏
35	カ一21	円形	0.29	0.25	0.27	須恵坏
36	オ一22	円形	0.44	0.36	0.49	土師坏
37	オ一22	円形	0.40	0.33	0.41	土師皿・甕
38	エ一7	円形	0.65	0.57	0.36	
39	エ一8	円形	0.75	0.66	0.54	須恵蓋
40	カ一22	—	0.76	<0.48>	0.73	灰釉瓶
41	オ一21	円形	0.48	0.46	0.33	土師内黒坏
42	カ一11	円形	0.34	0.34	0.32	
43	オ一11	楕円形	1.15	0.97	0.68	土師坏 弥生壺
44	オ一12	円形	0.99	0.80	0.92	土師甕 (武蔵)
45	オ一11	—	<0.53>	<0.30>	0.26	須恵甕
46	キ・ク一22	円形	0.39	0.38	0.29	弥生甕
47	オ一12	円形	0.33	0.32	0.37	
48	オ一12	円形	0.59	0.54	0.58	土師甕 (武蔵)
49	ク一21・22	円形	0.74	0.67	0.61	須恵高坏・坏 土師内黒坏・甕
50	オ一11	円形	0.56	0.52	0.15	
51	ク一22	円形	0.45	0.35	0.16	
52	ケ一22	円形	0.48	0.44	0.08	
53	ケ一22	円形	0.48	0.33	0.11	
54	ケ一22	円形	0.35	0.32	0.07	土師内黒坏
55	ケ一22	円形	0.37	0.35	0.13	土師甕 (武蔵)
56	サ一21	—	0.40	<0.21>	0.10	土師坏
57	コ・サ一22・23	楕円形	(0.66)	(0.53)	0.19	
58	サ一22	円形	0.50	0.42	0.18	須恵甕
59	サ一22	円形	0.31	0.26	0.17	
60	サ一22	不整形	0.64	0.26	0.46	須恵甕
61	セ・ソー22	円形	0.78	0.76	0.36	
62	コー22	円形	0.40	0.34	0.26	
63	エ一7	楕円形	0.75	0.53	0.65	



第36図 グリッド遺物実測図

H2	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	土師器	坏	(11.5)	-	<3.1>	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	回転実測	カマド
2	土師器	坏	(12.3)	(5.9)	<3.8>	見込部→幅の広いミガキ	ロクロナデ 底部回転糸切り(左)	回転実測	ケン
3	土師器	高坏(脚)	-	-	<7.3>	ヘラナデ 黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ	完全実測	P1
4	土師器	武蔵甕	20.3	-	7.7	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測	II区・ケン
5	土師器	武蔵甕	-	(3.7)	<11.3>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	I区・カマド
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
6	石器	砥石	15.1	7.2	6.0	771.13	被熱なし 砥面数4 右側と裏面に条痕		
7	石器	砥石	15.5	7.7	5.4	959.17	被熱あり(一部黒化) 端部と縁辺に敲打痕		IV区
8	金属製品	角釘?	<8.9>	<0.9>	<0.5>	<15.12>	先端欠損		IV区

H4	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須志器	坏	(12.5)	6.5	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り後回転ヘラケズリ	完全実測	
2	土師器	坏	(14.4)	(7.1)	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
3	土師器	坏	(15.7)	7.6	5.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ後ヘラケズリ	完全実測	
4	土師器	武蔵甕	(21.4)	-	<5.7>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	

H5	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	灰軸陶器	皿	(13.4)	(7.2)	2.5	ロクロナデ→施釉(つげがけ)	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り→高台貼付→施釉(つやがけ)	回転実測	II区
2	灰軸陶器	碗	(13.8)	(7.3)	4.1	ロクロナデ→施釉(つげがけ)	ロクロナデ→高台貼付→施釉(つやがけ)	回転実測	II区
3	灰軸陶器	碗	(12.0)	(6.4)	4.1	ロクロナデ→施釉(つげがけ)	ロクロナデ→高台貼付→施釉(つやがけ)	回転実測	ケン
4	灰軸陶器	碗	(16.2)	(9.4)	5.3	ロクロナデ→施釉(つげがけ)	ロクロナデ→高台貼付→施釉(つやがけ)	回転実測	I区 II区 ケン
5	灰軸陶器	皿	-	-	-	ロクロナデ→施釉(つげがけ)	ロクロナデ→底部回転糸切り→高台貼付(欠損)	破片実測	II区
6	須志器	坏	11.1	5.2	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測	I区 II区
7	須志器	坏	12.9	7.5	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部静止糸切り	完全実測	II区
8	須志器	坏	(14.0)	(6.0)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	回転実測	II区
9	土師器	坏	(11.9)	5.7	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測 内外面に煤付着	I区
10	土師器	坏	12.7	4.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測	I区 II区
11	土師器	坏	12.2	4.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)	完全実測	II区
12	土師器	坏	(11.4)	5.2	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)	完全実測 口縁内面に煤付着	I区
13	土師器	坏	(12.8)	(5.3)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	回転実測	I区
14	土師器	坏	12.3	6.1	3.8	ロクロナデ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測 内外面に煤付着	
15	土師器	坏	11.8	5.2	3.4	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測	II区
16	土師器	坏	(11.8)	4.6	4.3	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	I区 ケン
17	土師器	坏	(12.4)	(4.8)	3.6	ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	回転実測	I区 II区
18	土師器	碗	(13.0)	-	<3.7>	暗文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付(欠損)	回転実測	I区
19	土師器	坏	12.9	(5.5)	3.9	ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)	完全実測	II区
20	土師器	碗	(12.2)	(6.2)	5.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り後高台貼付→ミガキ	回転実測	ケン
21	土師器	碗	(14.4)	7.1	5.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	
22	土師器	坏	-	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	II区
23	土師器	坏	-	-	-	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ	破片実測	ケン
24	土師器	碗	(11.8)	(6.4)	4.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	回転実測	I区 ケン
25	土師器	碗	(14.3)	7.6	5.5	ロクロナデ→暗文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し→高台貼付	完全実測	I区 II区
26	土師器	碗	15.6	7.9	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	II区
27	土師器	碗	(16.4)	7.7	6.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し後高台貼付	完全実測 底部にヘラ記号(焼成後)	I区
28	土師器	坏	-	(6.0)	<1.4>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	I区
29	土師器	碗	(14.8)	-	<5.3>	ロクロナデ→暗文・ミガキ	ロクロナデ→底部切り離し後高台貼付(欠損)	回転実測	II区
30	土師器	甕	(24.6)	-	<3.8>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	胴部ハケメ→口縁ヨコナデ	回転実測	I区 II区
31	土師器	甕	-	(9.2)	<3.5>	ハケメ	ハケメ 底部に木葉痕あり	回転実測	II区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
32	金属製品	門金具	<9.8>	<4.5>	<0.4>	<18.73>	片端欠損		I区
33	金属製品	角釘	<10.5>	<0.7>	<0.7>	<21.65>	両端欠損		カマド

H7	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須志器	短頸壺	(13.2)	-	<4.3>	ロクロナデ	ロクロナデ 自然袖付着	回転実測	II区 ケン
2	土師器	碗	-	7.5	<2.7>	ロクロナデ ヘラミガキ 見込部 煤付着	ロクロナデ 底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	ケン
3	土師器	碗	-	(8.6)	<3.6>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 高台貼付	回転実測	II区 ケン
4	土師器	坏	(13.6)	(7.8)	3.4	ロクロナデ 暗文 ヘラミガキ	ロクロナデ 底部 回転糸切り	回転実測	I区 ケン
5	土師器	坏	12.8	5.9	3.8	ロクロナデ 暗文→黒色処理	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	完全実測 内～外面口縁煤付着	
6	土師器	坏	(12.4)	(5.0)	3.9	ロクロナデ 暗文 ヘラミガキ	ロクロナデ 底部 ヘラケズリ	回転実測	ケン

H9	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	-	(6.8)	<1.1>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ ヘラケズリー付高台	回転実測	I 区
2	須恵器	高坏	-	(12.2)	<3.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	I 区
3	須恵器	坏	(12.8)	-	<4.0>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II 区
4	須恵器	坏	(12.6)	(6.4)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り	回転実測	カマド
5	須恵器	坏	(13.4)	(5.0)	4.7	ロクロナデ 黒色処理?	ロクロナデ 底部 回転糸切り 黒色処理?	完全実測	カマド I 区
6	須恵器	坏	(13.6)	(9.2)	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転ヘラ切り	回転実測	I 区 I 区ホリ
7	須恵器	甕	-	(14.4)	<5.0>	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ 底部~底部周縁 ヘラケズリ	回転実測	カマド I 区ホリ
8	須恵器	甕	-	(14.0)	<7.8>	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ 底部~底部周縁 ヘラケズリ	回転実測	I 区 II 区
9	須恵器	甕	-	-	<10.4>	ロクロナデ 当具痕	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測	I 区 II 区
10	須恵器	甕	(38.4)	-	<15.6>	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測	II 区
11	須恵器	甕	(44.4)	-	<4.7>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	I 区 カマド
12	須恵器	甕	-	-	<16.1>	ロクロナデ 当具痕	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測	I・II 区 カマド
13	土師器	坏	(12.8)	(6.0)	4.5	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ 底部 回転糸切り	回転実測	I 区
14	土師器	坏	(13.4)	(6.4)	4.5	ロクロナデ ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部 回転糸切り	回転実測	カマド
15	土師器	坏	13.0	6.4	4.7	ロクロナデ ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	完全実測	
16	土師器	坏	(12.4)	-	<4.1>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II 区
17	土師器	坏	-	(6.8)	<3.5>	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ 底部 回転糸切り→ヘラケズリ	回転実測	I 区 ホリ
18	土師器	坏	14.2	6.2	4.2	ロクロナデ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	完全実測	
19	土師器	碗	(15.6)	7.8	5.7	ロクロナデ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部 回転糸切り 高台貼付	完全実測	I 区 ホリ I 区
20	土師器	碗	14.1	6.6	5.7	ロクロナデ ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部 回転糸切り 高台貼付	完全実測	I 区
21	土師器	坏	(14.8)	-	<3.8>	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラケズリ	回転実測	II 区
22	土師器	ロクロ甕	16.4	-	<14.3>	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ	完全実測	I 区 カマド
23	土師器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ カキ目 回転ヘラケズリ	破片実測	II 区
24	土師器	ロクロ甕	(13.4)	-	<8.6>	ロクロナデ	ロクロナデ 体部 カキ目	回転実測	II 区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
25	石器	砥石	10.2	4.6	4.0	216.84	被熱なし 砥面数4 稜上に条痕		
26	石器	磨・蔽石	17.5	13.9	2.8	913.66	被熱なし 側面にすり面 下部に条痕 正裏と縁辺に敲打痕		
27	石器	磨石	10.5	8.6	3.9	525.86	被熱なし すり面2		
28	金属製品	角釘	<3.9>	<0.5>	<0.5>	<2.35>	両端欠損		検出

H10	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	蓋	-	-	<2.2>	ロクロナデ	ロクロナデ つまみ貼付 天井部右回転ヘラケズリ	完全実測	III 区
2	須恵器	蓋	-	-	<2.5>	ロクロナデ	ロクロナデ つまみ貼付 天井部右回転ヘラケズリ	完全実測	I 区
3	土師器	高坏	(20.8)	-	<3.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	II 区
4	土師器	甕	-	-	<2.8>	ロクロナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ	完全実測	I 区
5	土師器	甕	-	-	<5.1>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	I・II・IV 区
6	土師器	甕	(22.4)	-	<9.1>	口縁 ヘラミガキ 体部 ヘラナデ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	回転実測	I 区

H11	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	-	6.7	<2.4>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉が垂れたもの 高台貼付	完全実測	III 区
2	須恵器	甕						断面実測	II 区 IV 区ホリ
3	須恵器				<10.1>				
4	土師器	坏				黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	II 区, IV 区 ホリ
5	土師器	坏				黒色処理 ヘラミガキ	ロクロナデ 墨書	破片実測	IV 区
6	土師器	坏	(14.0)	(6.0)	3.6	黒色処理 暗文	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測	I 区
7	土師器	坏	(13.0)	(5.6)	(3.9)	ヘラミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測	P2
8	土師器	坏	13.2	5.8	4.2	ナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り(右)	完全実測	
9	土師器	坏	12.0	5.6	3.3	ロクロナデ 見込み部→ヘラミガキ	ロクロナデ 底部回転糸切り(左)	完全実測	I 区
10	土師器	坏	12.6	6.1	4.1	ヘラミガキ	ロクロナデ 底部回転糸切り(右)	完全実測	I 区 ホリ
11	土師器	坏	(12.3)	5.6	3.2	ヘラミガキ 暗文 黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	完全実測	III 区
12	土師器	小型 ロクロ甕	(14.0)	-	<13.6>	口縁ヨコナデ ハケナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	回転実測	I 区, II 区, IV 区 カマド
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
13	石器	蔽石	11.0	10.1	2.7	479.36	被熱なし 縁辺に敲打痕		
14	石器	蔽石	12.0	7.5	5.8	718.94	被熱なし 両端・両側に敲打痕		カマド
15	金属製品	角釘	<3.6>	<0.5>	<0.3>	<4.19>	先端欠損		III 区
16	金属製品	角釘	<5.0>	<0.7>	<0.4>	<6.17>	先端欠損		IV 区ホリ方
17	金属製品	不明	<10.9>	<0.6>	<0.6>	<17.56>	両端欠損		

H12	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	坏	(13.0)	(6.0)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	回転実測	II 区 ホリ
2	須恵器	坏	14.3	7.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	II 1
3	須恵器	坏	(14.2)	-	<3.4>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	I 区
4	須恵器	坏	-	6.9	<1.8>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	II 区 IV 区ホリ方

5	土師器	坏	(14.8)	6.9	4.7	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部及び底部周辺右回転ヘラケズリ	完全実測	ケン
6	土師器	碗	-	7.3	<2.2>	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	IV区 ケン
7	土師器	甕	(21.2)	-	<9.8>	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラナデ	回転実測	ケン エ-8
8	土師器	甕	(20.0)	-	<11.4>	ハケ目	ロクロナデ	回転実測	IV区 ホリ H7 ケン
9	土師器	鉢	(28.6)	(15.0)	(18.4)	ヘラナデ ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 体部下端及び底部右回転 ヘラケズリ タタキ痕	回転実測	II区 D4

H13	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	蓋	14.8	-	4.6	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 火だすき痕 天井部 右回転ヘラケズリ	完全実測	I・II・IV区 I・II・IV区ホリ
2	須恵器	蓋	16.2	-	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部 右回転ヘラケズリ	完全実測	IV区
3	須恵器	坏	13.6	6.1	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底部左回転糸切り	完全実測	II区
4	須恵器	坏	(13.8)	6.4	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	II区 III区ホリ
5	須恵器	坏	(13.0)	(6.2)	(3.6)	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 火だすき痕 底部回転糸切り	回転実測	I区ホリ IV区ホリ
6	須恵器	坏	(13.4)	(7.6)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 火だすき痕 底部回転糸切り	回転実測	III区 IV区
7	須恵器	坏	13.1	7.2	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	IV区
8	須恵器	坏	(12.8)	(6.6)	4.5	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 火だすき痕 底部回転糸切り	回転実測	ケン I区
9	須恵器	甕	-	(18.0)	<12.2>	ヘラナデ	タタキ 底部外周回転ヘラケズリ	回転実測	II区
10	須恵器	突帯付 四耳壺	-	-	-	当具痕	ロクロナデ タタキ	断面実測	I区 IV区 拓本
11	須恵器	壺	-	(8.0)	<3.0>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	IV区
12	土師器	坏	13.5	(5.5)	(4.2)	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部糸切り 底部周辺ヘラケズリ	完全実測	II区
13	土師器	坏	14.2	7.1	3.6	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	完全実測	カマド
14	土師器	坏	(13.6)	(7.4)	4.4	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測	III区ホリ IV区
15	土師器	坏	(15.6)	(6.2)	4.9	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	II区
16	土師器	坏	(13.8)	(7.0)	4.5	ロクロナデ 煤付着	ロクロナデ 煤付着 底部回転糸切り	回転実測	ケン
17	土師器	甕	(18.4)	-	<11.9>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	III区 IV区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
18	金属製品	刀子	<18.0>	<2.0>	<1.2>	<33.90>	両端欠損 木質残る 目釘2ヶ所?		I区ホリ

H14	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	有台坏	14.6	8.9	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り 高台貼付	完全実測	I区
2	須恵器	杓状坏	14.1	7.4	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	完全実測	III区ホリ
3	須恵器	坏	(12.8)	(6.4)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り	回転実測	I区 IV区
4	須恵器	坏	(14.4)	(7.0)	<4.4>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	回転実測	IV区
5	土師器	坏	(15.8)	(8.0)	5.8	ロクロナデ ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部 ヘラケズリ	回転実測	II区
6	土師器	坏	(10.2)	(4.2)	3.8	ロクロナデ ナデ 黒色処理	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	回転実測 内外 煤付着	IV区
7	土師器	碗	-	8.1	<2.8>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り 高台貼付	完全実測	III区
8	土師器	碗	-	8.0	<2.8>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り 高台貼付	完全実測	IV区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
9	石器	紡錘車	最大径 4.9	最小径 3.5	1.2	49.65	孔径 0.9~1.0 被熱なし 正面と側面に刻書		

H15	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	灰陶陶器	碗	-	6.5	<2.9>	ロクロナデ→施釉(つけかけ)	底部切り離し→高台貼付→施釉(つけかけ)	完全実測	ケン
2	須恵器	蓋	7.1	つまみ 2.1	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部→つまみ貼付	完全実測	
3	須恵器	坏	(13.0)	(5.6)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)	回転実測	II区
4	須恵器	坏	(13.8)	5.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り(左)	完全実測	III区 ケン
5	須恵器	坏	(13.4)	(6.0)	4.2	ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	回転実測	III区 IV区
6	土師器	坏	(13.7)	5.6	4.3	暗文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測	ケン
7	土師器	坏	13.5	5.8	4.1	暗文・ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り(右)	完全実測	
8	土師器	坏	(13.0)	(6.0)	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り後回転ヘラケズリ	回転実測	II区
9	土師器	坏	(15.6)	-	<4.3>	ミガキ	ロクロナデ	回転実測	IV区
10	土師器	ロクロ甕	(23.0)	-	<8.4>	カキメ	カキメ	回転実測	ケン
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
11	石器	敲石	14.2	6.7	5.6	811.76	被熱なし 両端に敲打痕		
12	石器	敲石	13.0	3.5	2.2	163.56	被熱なし 端部に敲打痕		

H17	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	坏	(13.6)	(9.0)	<3.7>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	
2	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナデ ハケナデ	ロクロナデ 平行タタキ	破片実測	
3	土師器	甕	-	-	<4.3>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
4	石器	砥石	<9.5>	<5.3>	<4.0>	<223.70>	被熱なし 上部欠損 砥面数5 端部の条痕顕著		

H18	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	土師器	坏?	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	破片実測	ケン		
2	土師器	坏	(11.3)	5.1	3.3	ロクロナデ 見込部 回転ヘラナデ	ロクロナデ 底部 右回転糸切り	完全実測	Ⅲ区		
3	土師器	坏	(11.5)	5.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切り	完全実測	Ⅲ区		
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考				出土位置
4	石器	砥石	8.9	6.0	3.0	215.29	被熱なし 砥面数5 正面と右側に条痕 左側に削り状の使用痕				P2
5	石器	磨・敲石	10.8	8.2	3.5	538.88	被熱なし すり面2 正裏に敲打痕				

H19	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	須恵器	坏	(14.0)	(8.4)	<3.9>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部～底部周縁 ヘラケズリ	回転実測			
2	須恵器	有台坏	(13.6)	(9.8)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転ヘラケズリ 高台貼付	回転実測			
3	須恵器	甕	-	(10.4)	<5.7>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部～底部周縁 ヘラケズリ	回転実測			
4	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナデ 当具痕 ハケナデ	ロクロナデ 平行タタキ	破片実測	カマド		
5	土師器	甕	(13.2)	-	<7.3>	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	回転実測			
6	土師器	甕	(12.4)	-	<8.0>	ヘラナデ	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ	回転実測			

H21	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	須恵器	蓋	-	-	<1.4>	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部右回転 ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ区		
2	須恵器	坏	13.4	8.1	3.9	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 火だすき痕 底部回転ヘラ切り 体部下端回転ヘラケズリ	完全実測	ケン		
3	須恵器	甕	-	(12.8)	<1.8>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	ケン		
4	土師器	坏	(12.2)	(4.8)	3.7	ロクロナデ 煤付着	ロクロナデ 煤付着 底部右回転糸切り	回転実測	Ⅲ区ホリ		
5	土師器	坏	12.8	5.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	Ⅲ区 Ⅳ区		
6	土師器	坏	-	(5.2)	<2.3>	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り 墨書	回転実測	Ⅲ区		
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考				出土位置
7	石器	磨石	13.5	9.1	5.4	975.05	被熱なし すり面2				Ⅲ区

H22	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	須恵器	蓋	16.0	-	4.5	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 天井部回転 ヘラケズリ	完全実測			
2	須恵器	突帯付 四耳壺	-	-	-	当具痕	タタキ	断面実測			
3	土師器	甕	(18.6)	-	<10.4>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測			

H3	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	弥生	壺	-	-	<28.4>	ハケナデ	ヘラガキによる格子目文 ヘラミガキ 赤彩	回転実測			
2	弥生	壺	-	-	<9.4>	ハケナデ	櫛描による羽状文 赤彩 ヘラミガキ	回転実測	ケン		
3	弥生	壺	-	-	<44.6>	ヘラミガキ(頸部) ハケ目の残るナデ	頸部→ヘラ描斜走文 ヘラミガキ	完全実測			
4	弥生	台付甕	-	-	<5.1>	ヘラミガキ(脚、内 ヘラナデ)	ヘラケズリ ヘラミガキ	完全実測	ケン		
5	弥生	甕	(14.0)	-	<7.4>	ハケ目	櫛描波状文 櫛描簾状文(9本4連止・2段)	回転実測			
6	弥生	甕	(15.6)	-	<10.1>	ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(10本2連止)	回転実測	ケン		
7	弥生	甕	(21.2)	-	<6.7>	ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(12本2連止)	回転実測	ケン		
8	弥生	甕	-	4.2	<6.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ 焼成前に穴をあけた	完全実測	ケン		

H8	種別	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面		外 面		備 考	出土位置
1	弥生	鉢	-	(5.6)	<5.6>	ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 底部 ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区		
2	弥生	鉢	(11.6)	-	<5.6>	ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩	回転実測			
3	弥生	鉢	-	6.7	<4.2>	ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 底部 ヘラミガキ	完全実測			
4	弥生	高坏	-	-	-	ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 口縁部 櫛描斜走文	破片実測			
5	弥生	高坏	(23.5)	-	<10.7>	ヘラミガキ 赤彩 脚部 ヘラナデ	ヘラミガキ 赤彩	完全実測	Ⅱ区		
6	弥生	高坏	-	(17.2)	<12.9>	坏部 ヘラミガキ 赤彩 脚部 ハケナデ ヘラナデ	ヘラミガキ 赤彩	完全実測			
7	弥生	高坏	-	(14.2)	<13.3>	ハケナデ	ヘラミガキ 赤彩	回転実測	Ⅰ区・Ⅱ区・ケン		
8	弥生	壺	(29.7)	-	(15.7)	ヘラミガキ 赤彩	ヘラ描斜走文 ヘラミガキ→赤彩	完全実測	Ⅱ区		
9	弥生	壺	(32.8)	-	<13.4>	ヘラミガキ→赤彩	頸部 ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 口縁部 ヘラミガキ→赤彩	回転実測	Ⅱ区・ケン H4ホリ		
10	弥生	壺	29.0	-	<13.9>	ヘラミガキ 口縁→頸部 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 頸部 櫛描横線文(11本) 櫛描垂下文(2本2連) 4ヶ所か	完全実測	Ⅰ区・Ⅱ区		
11	弥生	壺	(24.3)	-	<12.1>	ハケナデ 口縁→頸部 ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 頸部 櫛描横線文(単位不明) 櫛描垂下文(6本2連?)	完全実測	Ⅱ区 ケン		
12	弥生	壺	-	-	<21.4>	ハケメ	頸部 櫛描横線文(本数不明) ヘラ描沈線 櫛描垂下文(3本) 体部 ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区 M4		

13	弥生	壺	-	-	<29.0>	口縁 ヘラミガキ→赤彩 体部 ハケメ	頸部 ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 口縁部 体部 ヘラミガキ→赤彩	完全実測	ケン
14	弥生	壺	-	-	<10.5>	ハケナデ 口縁～頸部 ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 頸部 ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 円形貼付文	回転実測	Ⅱ区
15	弥生	壺	-	-	<11.0>	ハケナデ 口縁～頸部 ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 頸部 ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 ヘラ描鋸歯文の内部に刺突文	回転実測	Ⅱ区
16	弥生	壺	-	-	-	ハケナデ	ヘラミガキ 赤彩 頸部 櫛描横線文 ヘラ描鋸歯文の内部に刺突文	破片実測	Ⅱ区
17	弥生	壺	-	-	-	ハケナデ	ヘラ描沈線の内部に刺突文	破片実測	ケン
18	弥生	壺	-	-	-	ハケナデ	ヘラミガキ 赤彩 頸部 ヘラ描鋸歯文の内部に刺突文	破片実測	Ⅱ区
19	弥生	壺	-	-	<34.9>	摩耗	櫛描横線文(8本?) ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
20	弥生	壺	-	9.9	32.7	ハケメ 上部ナデ	ヘラミガキ→赤彩	完全実測	Ⅱ区 ケン
21	弥生	壺	-	(10.8)	<25.7>	ハケメ	ヘラミガキ→赤彩	回転実測	Ⅰ区.Ⅱ区
22	弥生	壺	-	(11.8)	<18.3>	ハケメ	ヘラミガキ→赤彩	回転実測	Ⅱ区.ケン
23	弥生	壺	-	10.3	<7.7>	摩耗	ヘラミガキ→赤彩	完全実測	ケン
24	弥生	壺	-	10.0	<6.5>	ナデ	ヘラミガキ→赤彩 底部 底部外周ヘラナデ	完全実測	
25	弥生	壺の 二次利用	(16.2)	-	<7.5>	ハケメの残るナデ	ミガキ 口唇部面取り	回転実測 焼成前の 穿孔あり	
26	弥生	甕	22.5	6.5	22.3	ハケ目→ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(12本・2連止め) ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
27	弥生	甕	17.7	(6.6)	23.7	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(11本・2連止め) 櫛描波状文	完全実測	
28	弥生	甕	17.3	7.9	23.5	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(7本・2連止め) 櫛描波状文(5～7本)	完全実測	Ⅱ区
29	弥生	甕	(13.6)	(5.2)	<17.2>	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(15本・2連止め) 櫛描波状文	回転実測	Ⅱ区
30	弥生	甕	(14.3)	5.2	18.0	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(10本・2連止め) 櫛描波状文	完全実測	Ⅱ区
31	弥生	甕	21.8	-	<17.5>	ヘラミガキ	櫛描簾状文(10本・2連止め) 櫛描波状文	完全実測	Ⅱ区
32	弥生	甕	11.8	-	<7.4>	ミガキ	櫛描簾状文(10本・2連止め) 櫛描波状文(6～7本)	完全実測	Ⅱ区
33	弥生	甕	19.3	-	<19.1>	ヘラミガキ	櫛描簾状文 櫛描斜走文 ヘラミガキ	完全実測	Ⅱ区
34	弥生	甕	(20.8)	-	<16.3>	ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(12本・2連止め)	回転実測	
35	弥生	甕	(18.4)	-	<10.8>	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目 縄文RLL 櫛描簾状文(12本3連止め)	回転実測	Ⅱ区 H15.Ⅱ区
36	弥生	甕	13.7	-	<11.8>	ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(9本・3連止め)	完全実測	Ⅱ区
37	弥生	甕	16.1	-	<17.1>	ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(9本・2連止め)	完全実測	Ⅱ区
38	弥生	甕	(19.2)	-	<8.1>	ハケ目の残るナデ→口縁上部コナデ	櫛描波状文 櫛描横走文(9本)	回転実測	Ⅱ区 ケン
39	弥生	甕	14.5	-	<9.9>	ハケ目→ヘラミガキ	櫛描波状文 櫛描簾状文(12本・2連止め)	完全実測	
40	弥生	甕	(14.0)	-	<12.8>	ミガキ	櫛描簾状文(9本・2連止め) 櫛描斜走文 櫛描波状文	回転実測 外面剥離	Ⅱ区
41	弥生	小型甕	(9.6)	-	<6.8>	ミガキ	ミガキ 多簾状文(8本)	回転実測	Ⅱ区
42	弥生	台付甕	-	(6.7)	<5.4>	ミガキ→黒色処理	ミガキ	完全実測 外面摩耗	Ⅱ区
43	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	櫛描波状文	破片実測(拓本)	Ⅱ区
44	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	櫛描波状文	破片実測(拓本)	Ⅱ区
45	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	縄文→ミガキ	破片実測(拓本)	Ⅱ区
46	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	縄文(RL)	破片実測(拓本)	Ⅱ区
47	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	縄文(LR)	破片実測(拓本)	Ⅱ区
48	弥生	ミニチュア 土器 (甕)	8.4	4.9	8.6	口縁コナデ 胴から底部ナデ	ハケメの残るナデ 櫛描横走文(6本) 櫛描波状文	完全実測	
49	弥生	無頸壺	(11.6)	-	<6.8>	ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
50	石器	磨石	10.1	7.3	4.0	414.86	被熱なし すり面1		
51	石器	磨・敲石	11.5	6.2	2.9	348.51	被熱なし すり面2 縁辺に敲打痕		
52	石器	磨・敲石	10.8	5.7	2.5	255.27	被熱なし すり面2 両端部と側面に敲打痕		
53	石器	磨・敲石	11.7	6.6	3.6	375.63	被熱なし すり面1 正面に敲打痕		
54	石器	磨・敲石	10.5	6.0	3.5	352.36	被熱なし すり面1 正裏に敲打痕		
55	石器	敲石	14.5	7.4	4.5	679.57	被熱なし 正裏と縁面に敲打痕		
56	石器	敲石	12.4	5.7	5.0	511.01	被熱なし 端部と側面に敲打痕		
57	石器	磨・敲石	12.5	6.9	6.0	757.01	被熱なし すり面1(顕著な部分あり) 側面に敲打痕		
58	石器	磨・敲石	12.5	8.4	5.0	773.19	被熱なし すり面3 上下端部と正裏に敲打痕		
59	石器	磨・敲石	8.1	4.4	2.3	124.44	被熱なし すり面2 側面に敲打痕		Ⅱ区
60	石器	磨石	6.9	5.2	2.8	151.27	被熱なし すり面3		Ⅱ区
61	石器	磨・敲石	7.0	6.2	4.7	276.27	被熱なし すり面1 端部に敲打痕		
62	石器	砥石	<7.6>	<9.4>	<5.7>	<645.52>	被熱なし 上部～裏面欠損 砥面数4		

H16	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	高坏	21.2	10.7	16.9	坏部 ヘラミガキ→赤彩 脚部 ハケメ	ヘラミガキ→赤彩	完全実測	IV区
2	弥生	高坏	-	9.4	<8.9>	坏部 ヘラミガキ→赤彩 脚部 ハケメ	ヘラミガキ→赤彩	完全実測	I区
3	弥生	壺	-	-	<18.6>	ハケメ 剥離	ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 円形貼付文(4ヶ所) ヘラミガキ→赤彩	完全実測	I区
4	弥生	壺	-	-	(25.0)	ハケナデ	頸部 ヘラ描沈線 ヘラ描斜走文 ヘラミガキ→赤彩	回転実測	炉
5	弥生	壺	-	14.2	<8.4>	剥離	ヘラミガキ	完全実測	炉
6	弥生	壺	-	10.0	30.0	上部 ハケメ 下部 ナデ 下半部に2ヶ所の補修用の粘土貼付	櫛描横線文 櫛描垂下文(7本) ヘラミガキ→赤彩	完全実測	
7	弥生	甕	(12.8)	-	<12.3>	ヘラミガキ	口縁・胴部 櫛描波状文 頸部 櫛描簾状文(8本3連止) 下部 ヘラミガキ	回転実測	IV区
8	弥生	甕	(12.2)	-	(10.9)	ヘラミガキ	口縁・胴部 縄文(RL) 頸部 櫛描簾状文(10本?2連止) ヘラミガキ	回転実測	IV区
9	弥生	小型甕	9.1	5.1	9.5	ヘラミガキ 赤彩顔料付着	口縁・胴部 櫛描波状文 頸部 櫛描簾状文(10本3連止) 下部 ヘラミガキ	完全実測	
10	弥生	小型甕	9.9	4.3	9.6	ヘラミガキ	口縁・胴部 櫛描波状文 頸部 櫛描簾状文(6本3連止) 下部 摩耗	完全実測	
11	弥生	甕	(21.9)	7.4	29.7	ヘラミガキ	頸部 櫛描簾状文(9本2連止) 口縁 胴部 櫛描波状文 下部 ヘラミガキ	完全実測	
12	弥生	台付甕	11.9	8.2	15.5	ヘラミガキ すす付着 脚部 ハケメ	頸部 櫛描簾状文(10本3連止) 口縁 胴部 櫛描波状文 下部 脚部 ヘラミガキ	完全実測	IV区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
13	石器	敲石	9.6	6.4	2.7	247.96	被熱なし 縁辺に敲打痕		IV区
14	石器	敲石	8.0	6.3	3.4	235.64	被熱なし 正裏と両端部に敲打痕		II区

H20	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	鉢	(14.0)	-	<3.9>	ナデ	ヘラミガキ 口唇→赤彩	回転実測 1. 2同一個体	I区
2	弥生	鉢	(14.0)	-	<5.4>	ナデ	ヘラミガキ 口唇→赤彩	回転実測 1. 2同一個体 穿孔焼成後 外面から	I区
3	弥生	高坏	-	(14.8)	<12.0>	ハケナデ ナデ	ヘラミガキ 赤彩	回転実測	I区
4	弥生	高坏	-	8.4	<8.8>	坏部 ヘラミガキ 赤彩 脚部 ハケ目 ナデ	ヘラミガキ 赤彩	完全実測	II区
5	弥生	壺	(20.0)	-	<9.0>	ヘラミガキ 赤彩	ヘラミガキ 赤彩	回転実測	炉2
6	弥生	壺	(30.7)	-	<20.6>	ヘラミガキ ヘラナデ 口縁→頸部 赤彩	ヘラミガキ 赤彩 頸部 ヘラ描沈線 櫛描斜走文(羽状)	完全実測	
7	弥生	壺	-	-	<12.0>	剥落	ヘラミガキ 赤彩	回転実測	炉2
8	弥生	壺	-	-	<19.6>	ヘラミガキ ヘラナデ	ヘラミガキ 頸部 櫛描横線文(6本4段) 櫛描垂下文(6本5ヶ所)	完全実測	
9	弥生	壺	-	-	<17.0>	ヘラミガキ ハケナデ	ヘラミガキ 頸部 櫛描横線文(7本) 櫛描垂下文(5本)	回転実測	
10	弥生	壺	-	(10.0)	<12.2>	ハケ目	ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ	回転実測	I区
11	弥生	甕	(12.2)	-	<6.1>	ヘラミガキ	櫛描波状文 ヘラケズリ 頸部 櫛描簾状文(11本2連止)	回転実測	I区
12	弥生	甕	(9.6)	(5.0)	11.9	ヘラミガキ	櫛描斜走文(羽状) ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ 頸部 櫛描簾状文(8本1連止)	回転実測	I区
13	弥生	甕	(17.2)	-	<12.7>	ハケ目	櫛描波状文 頸部 櫛描簾状文(8本3連止)	回転実測	II区 M4
14	弥生	甕	-	-	-	ハケナデ ヘラミガキ	頸部 櫛描簾状文 縄文LR	破損実測	I区 II区
15	弥生	甕	-	-	-	ハケナデ ヘラミガキ	縄文LR	破損実測	II区
16	弥生	甕	-	-	-	ハケナデ ヘラミガキ	縄文LR	破損実測	I区
17	弥生	甕	-	(10.0)	<9.2>	ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ→ヘラミガキ	回転実測	I区
18	弥生	甕	-	5.7	<5.0>	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ	完全実測	I区
19	弥生	瓶	(20.0)	-	<13.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	I区
20	弥生	瓶	(17.8)	(6.6)	12.7	ヘラミガキ 端部 ナデ	ヘラミガキ	回転実測 孔径 (1.4)	I区
24	土製品	勾玉	2.6	0.7	1.0	(焼成前穿孔)		孔径 0.5×0.2	I区
25	縄文	鉢	-	-	-	ナデ	縄文LR	破損実測	I区
26	縄文	鉢	-	-	-	ナデ	ヘラ描沈線 縄文LR	破損実測	I区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
21	石器	敲石	16.3	<6.0>	<4.6>	<510.23>	被熱なし 一部欠損 両端部に敲打痕		I区
22	石器	磨・敲石	10.5	5.5	2.9	<270.04>	被熱なし すり面2 両端と側面に敲打痕		I区
23	石器	磨・敲石	9.0	6.3	2.4	<188.80>	被熱なし すり面1 両端に敲打痕		II区

	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
D11	土師器	坏	(13.0)	-	<3.7>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
D1	金属製品	不明	<5.0>	<0.6>	<0.5>	< >	両端欠損		
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
M6	石器	磨・敲石	17.0	6.2	4.8	被熱なし すり面1 上部と側面に敲打痕			
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
P12	石器	敲石	8.7	8.3	4.7	被熱なし 正面に敲打痕			
P21	石器	磨石	8.3	5.7	4.5	被熱なし すり面1			
P32	金属製品	角釘	<8.4>	<1.0>	<1.1>	< >	両端欠損		

Gr	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>丸底●	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	灰釉陶器	碗	-	6.8	<2.1>	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付 施釉	完全実測	H20 ケン
2	須恵器	蓋	(9.8)	-	<1.6>	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部 回転ヘラケズリ	回転実測	エ-8
3	須恵器	有台坏	(14.6)	7.2	3.7	ロクロナデ すす付着	ロクロナデ 切り離し後 手持ちヘラケズリ→高台貼付	完全実測	エ-8
4	須恵器	坏	(13.0)	(5.8)	4.1	ナデ すす付着	ロクロナデ→右回転糸切り	回転実測	カ-11
5	須恵器	坏	(11.2)	(5.0)	3.5	ナデ	ロクロナデ→右回転糸切り	回転実測	
6	須恵器	短頸壺	(10.8)	9.1	14.8	ロクロナデ	ロクロナデ 肩 体部 平行タタキ 底部 外周 手持ちヘラケズリ 外面 底部に自然軸付着	完全実測	セ-22
7	土師器	坏	(16.2)	(15.2)	4.6	暗文	ヘラケズリ	回転実測	
8	土師器	甕	(19.2)	-	<14.0>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	セ-22
9	縄文		-	-	-		縄文(LR)	破損実測	H8 I区
10	弥生	蓋	(4.4)	-	<6.0>	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ	完全実測 焼成前 穿孔4ヶ所	オ-7

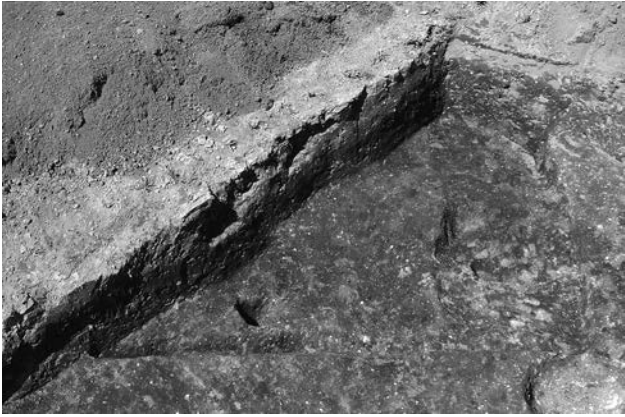
第三章 調査の成果

今回は一昨年に引き続き大豆田地籍を調査した。その結果、前回の調査では解らなかつた周辺部の遺跡立地の相違が明らかとなってきた。本章ではそれらの点を中心にまとめ調査の成果としたい。

今回の発掘調査では、ほぼ同一面積を調査した東側に接する大豆田遺跡Vと大きく様相を異にした。まず第一点として遺構の検出状況が大きく変化している点である。V地区では竪穴住居跡5軒の調査に止まったが、今回の調査では22軒が検出された。特に北側の調査区では12軒の住居が複雑に重なり合い、弥生時代後期から平安時代に及ぶ長い期間集落として利用されていた様子が窺えた。このことは北に接して調査されたVII地点でも同一状況であった。これとは対照的に東側に連続する大豆田遺跡Vや道常遺跡II・III、同じく道常遺跡IVのエリアは古代の住居が非常に少なく、継続的な古代の集落形成は確認できなかった。これらのエリアからは中世所産の遺構が多く発見され、時代的には13～14世紀代の生活活動エリアと考えられる。

近接する遺跡でこのように歴史的な環境が大きく変わるの、地形の形状が係わっていると考えられる。東側のエリアはいずれの遺跡も調査中から湧水が激しかった。遺構確認面は通常の浅間火山灰層いわゆるP1層であったが、覆土を掘り込むと数センチで湧水が確認された。西側エリアは地形的に田切に落ち込む側であるが、厚い砂層の堆積もあり湧水は今回調査のD2号土坑の底面で確認されたに過ぎない。この事から標高的には高い東側エリアは、扇状地形末端の結果か湧水面が高く住居を構築しての集落形成に不向きであったと考えられる。このような理由が遺跡立地を左右したのではないだろうか。今後、周辺部開発にあたってはこの成果が遺跡保護に十分に生かせることになるであろう。ただ、なぜ湧水エリアに中世の生活域が移るのかは現状で不明であり、立地する遺構の種類や出土遺物の特徴から今後考えていかなければならない課題である。

もう一つの大きな調査成果である多文字を記した「刻書石製紡錘車」については紙面の関係で触れることができなかつた。改めて別校としたい。以上雑駁であるが今回の調査成果としたい。



H 1 号住居址



H 4 号住居址



H 2 号住居址



H 2 号住居址カマド



H 3 号住居址



H 3 号住居址炉



H 5 号住居址



H 6 号住居址

図版 2



H 7号住居址



H10号住居址



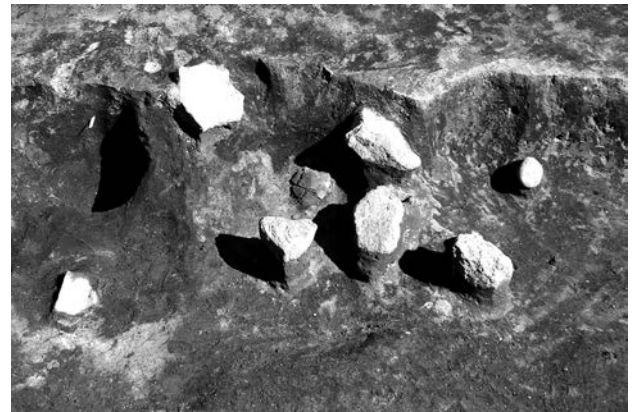
H 8号住居址



H 8号住居址遺物出土状況



H 9号住居址



H 9号住居址カマド



H12号住居址



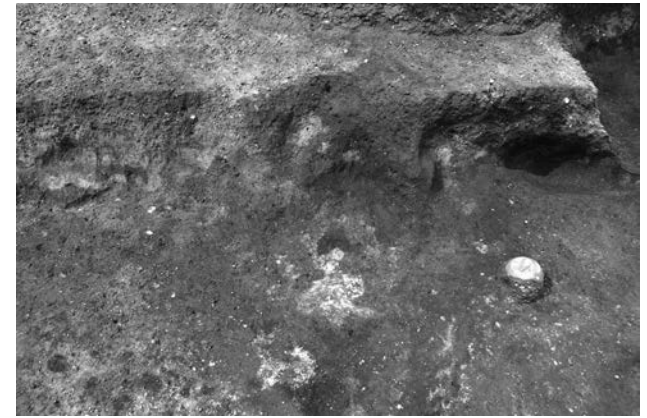
H 11 号住居址



H 11 号住居址掘方



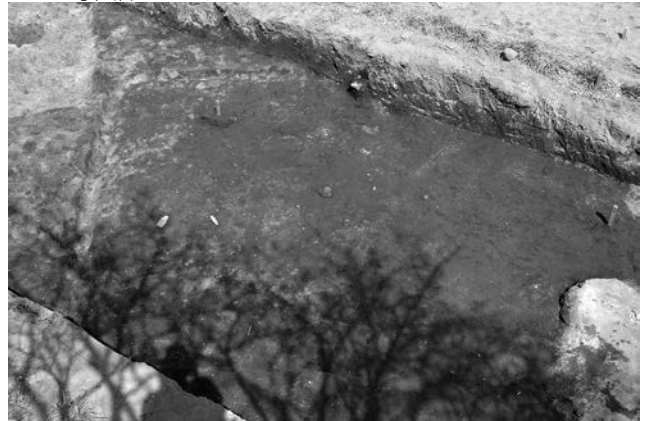
H 13 号住居址



H 13 号住居址カマド



H 14 号住居址



H 15 号住居址



H 16 号住居址



H16 号住居址遺物出土状況

図版 4



H 17 号住居址



H 18 号住居址



H 19 号住居址



H 20 号住居址掘方



H 20 号住居址



H 20 号住居址炉



H 21 号住居址



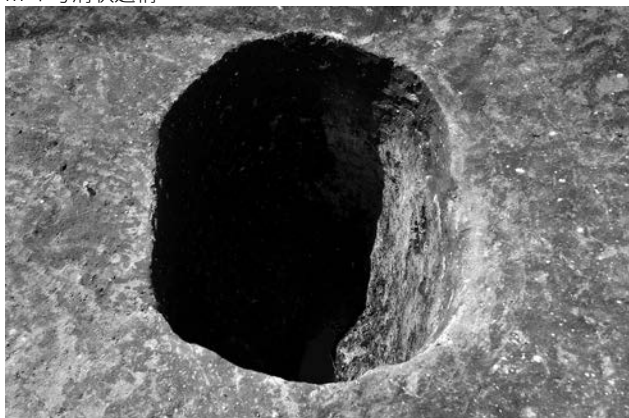
H22 号住居址



M 1号溝状遺構



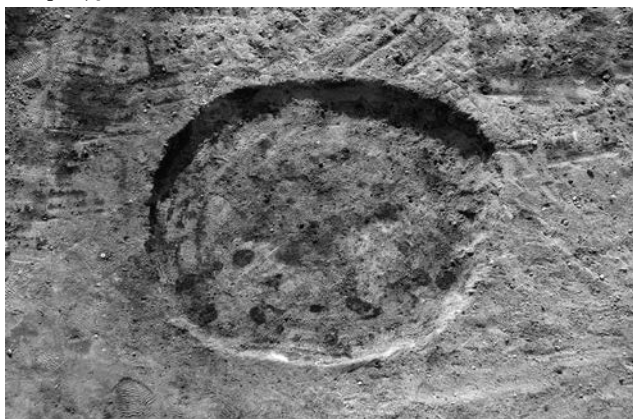
M 6号溝状遺構



D1号土坑



D 2号土坑



D 3号土坑



D 4号土坑

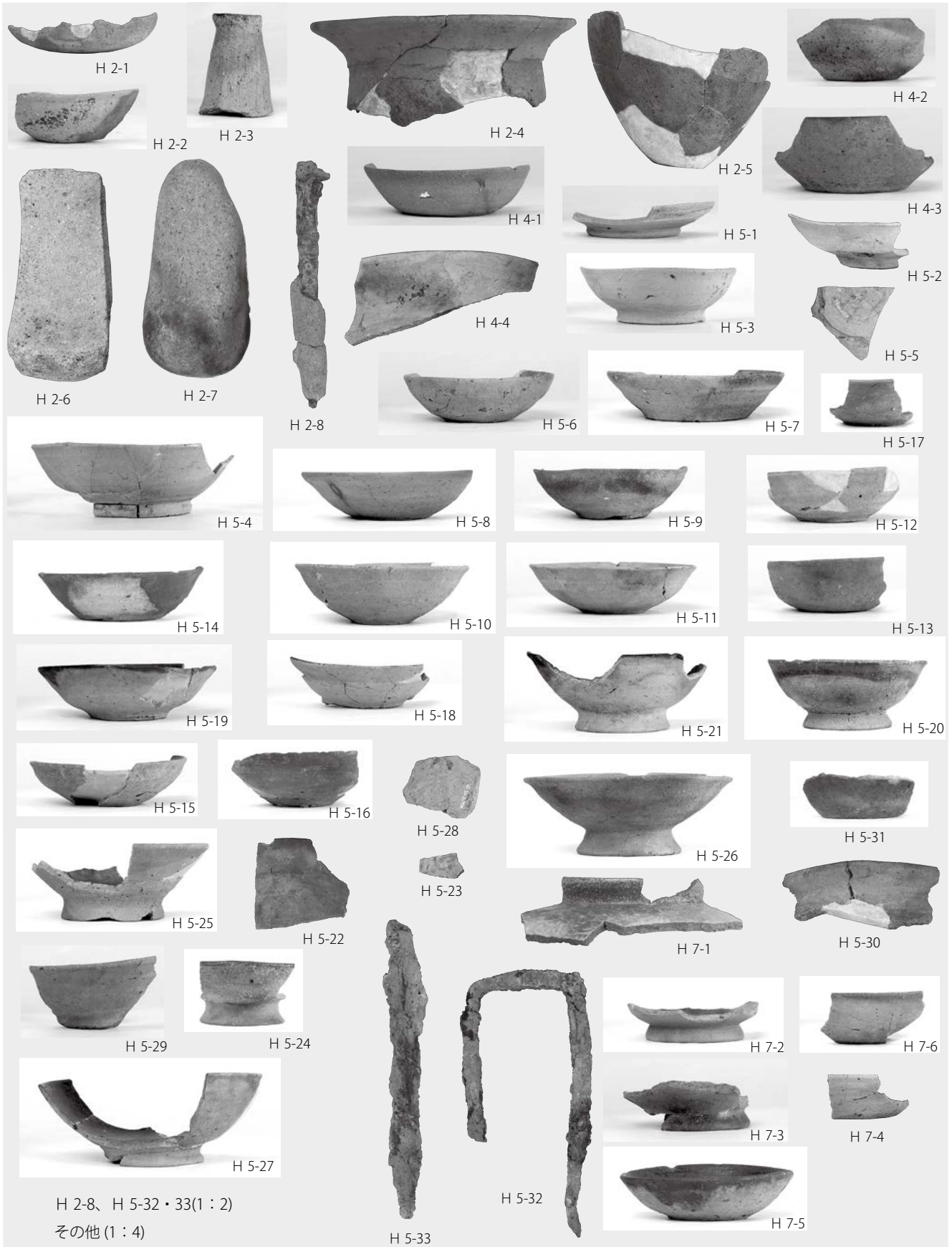


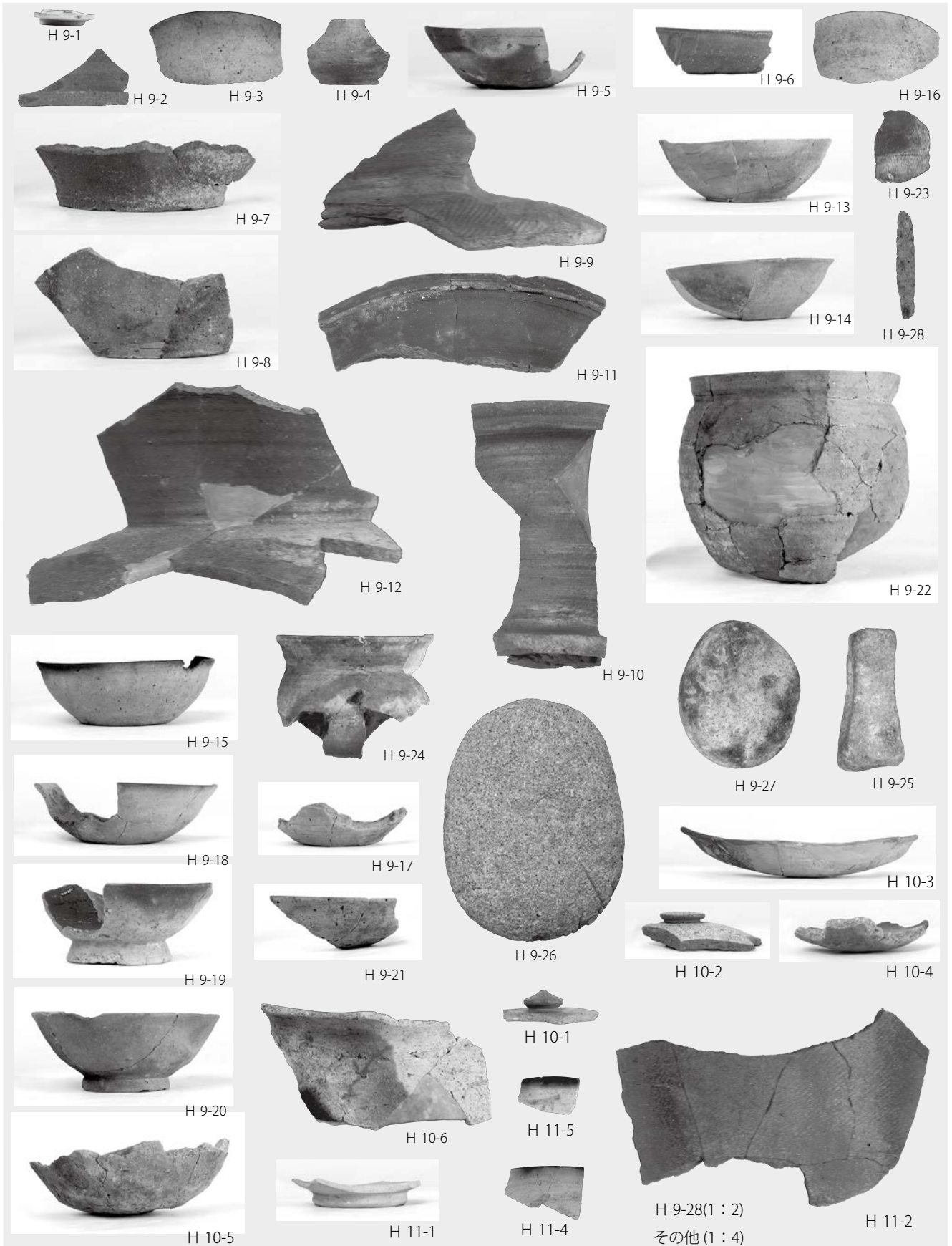
D 5号土坑



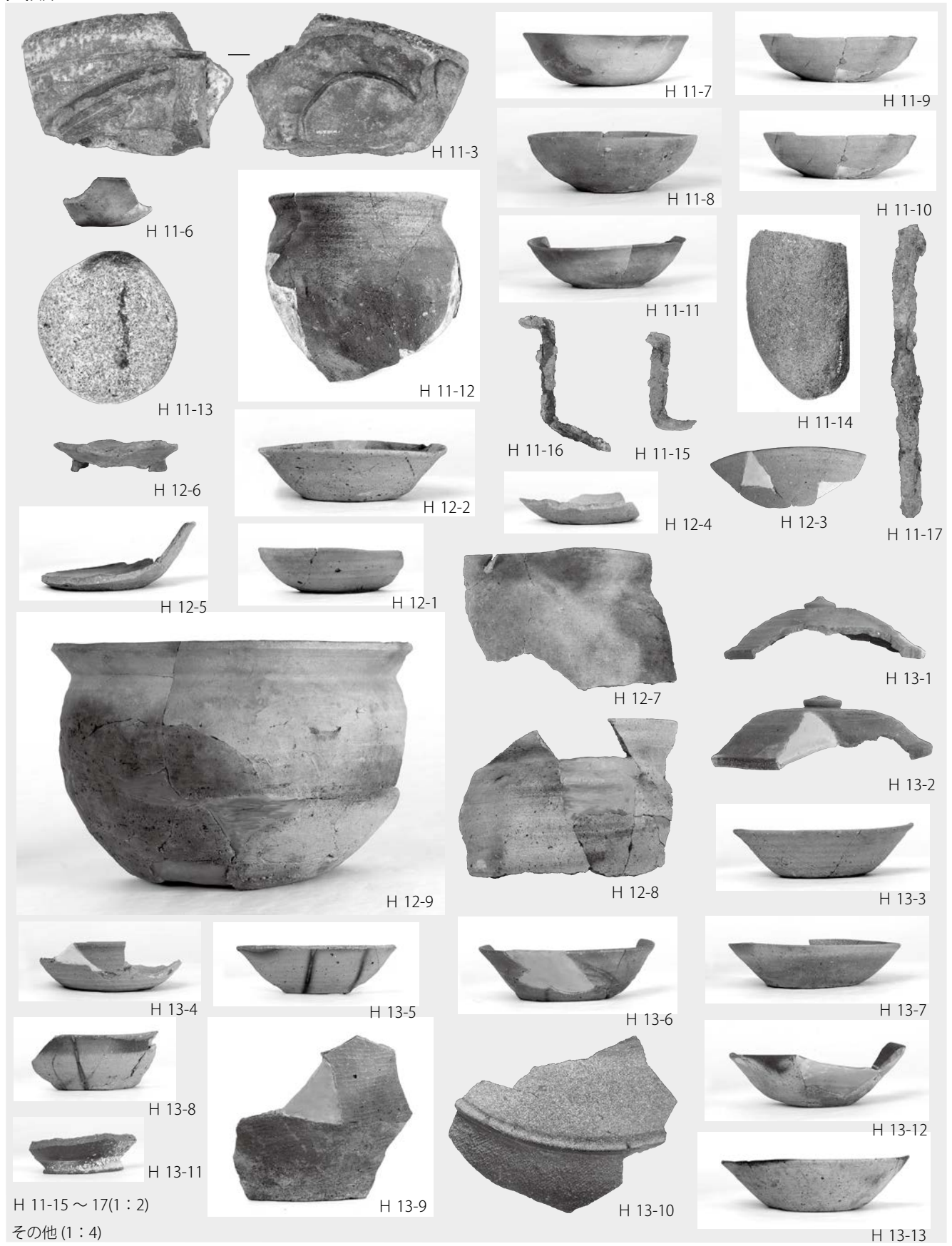
D 6号土坑

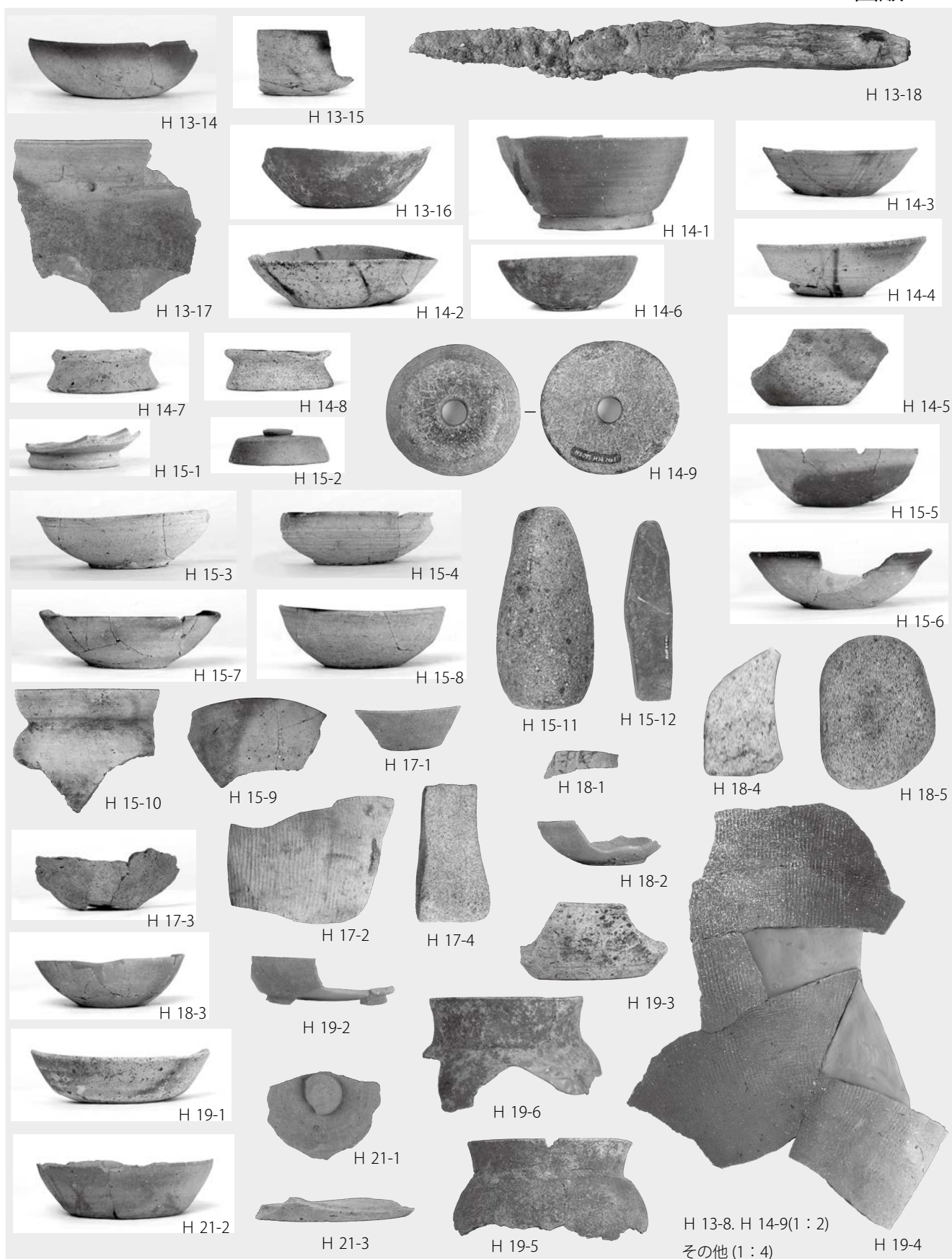
図版 6



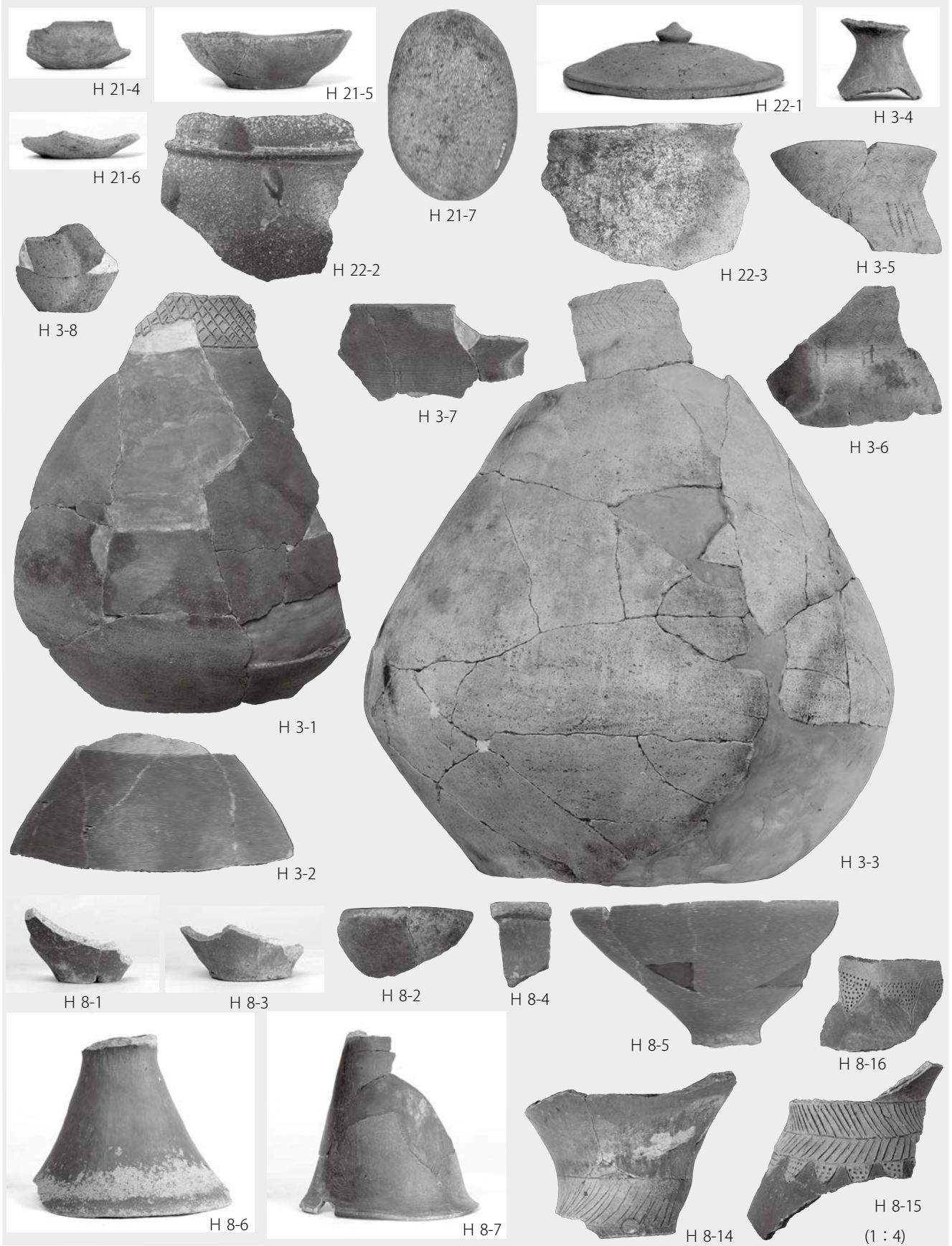


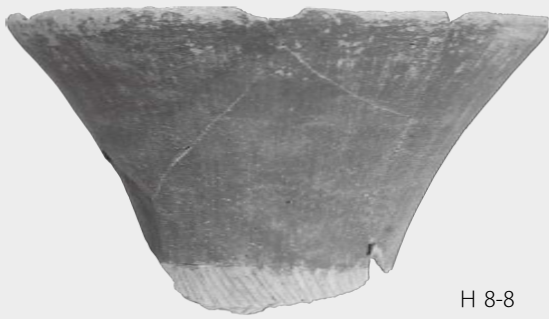
図版 8





图版 10





H 8-8



H 8-9



H 8-10



H 8-12



H 8-11



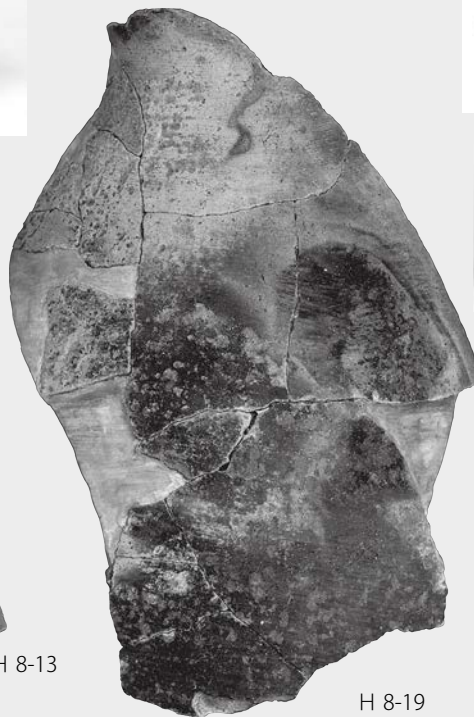
H 8-23



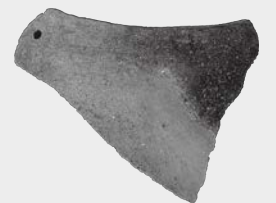
H 8-24



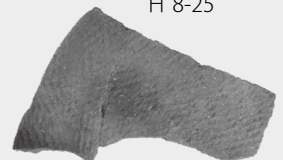
H 8-13



H 8-19



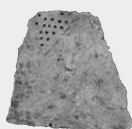
H 8-25



H 8-47



H 8-17



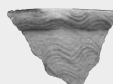
H 8-18



H 8-42



H 8-43



H 8-44



H 8-45



H 8-46

(1 : 4)



H 8-20



H 8-21



H 8-22



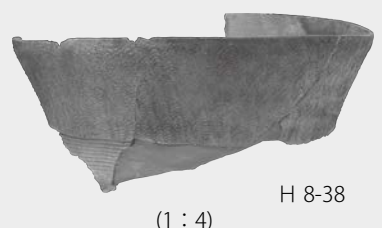
H 8-26



H 8-27



H 8-28



H 8-38

(1 : 4)



H 8-56



H 8-60



H 8-55



H 8-61



H 8-51



H 8-52



H 8-59



H 8-29



H 8-30



H 8-31



H 8-48



H 8-49



H 8-33



H 8-34



H 8-35



H 8-36



H 8-37



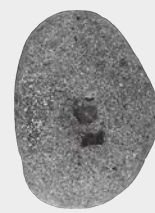
H 8-39



H 8-40



H 8-53



H 8-50



H 8-41



H 8-32



H 8-54



H 8-57



H 8-58



H 8-62



H 16-2



H 16-1

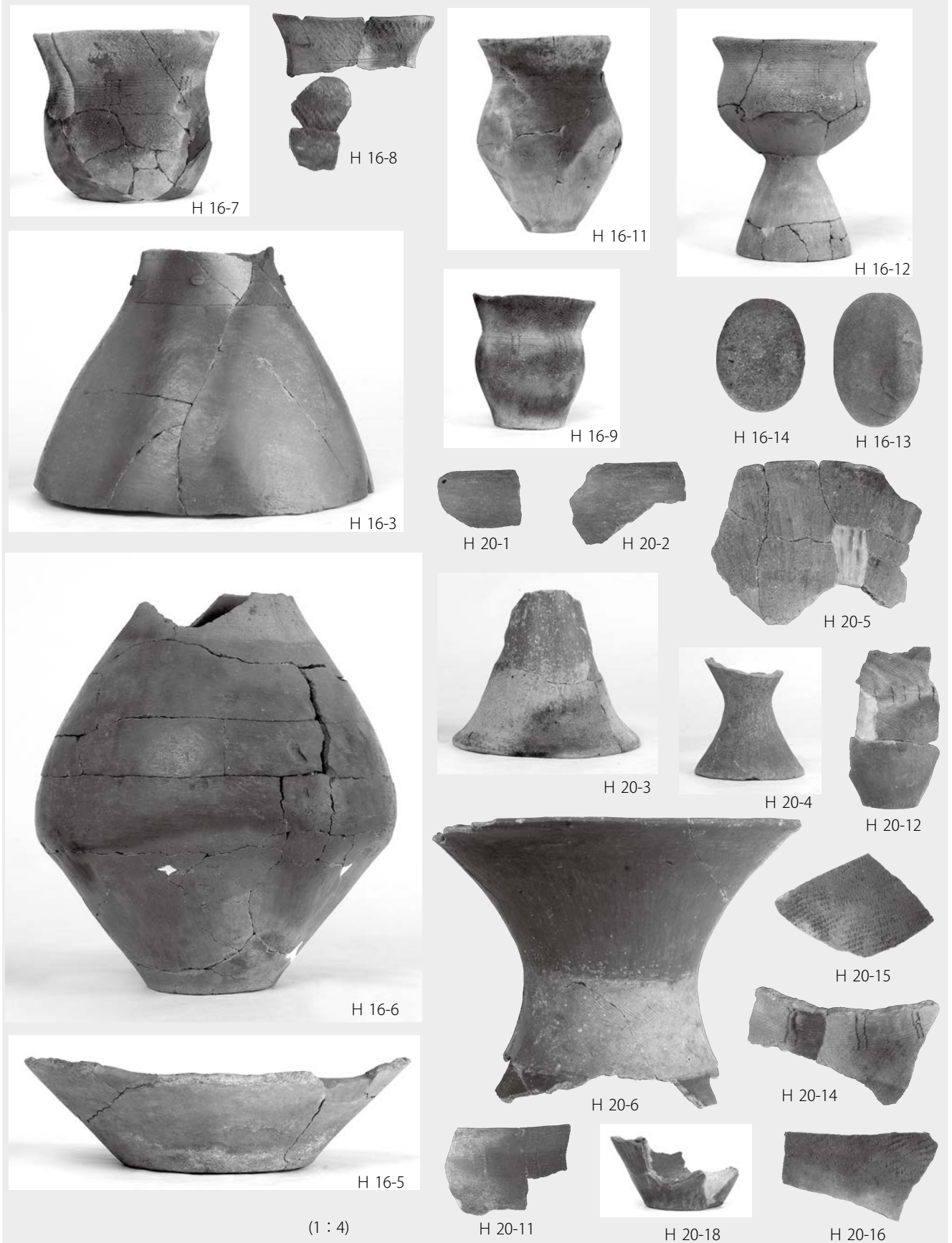


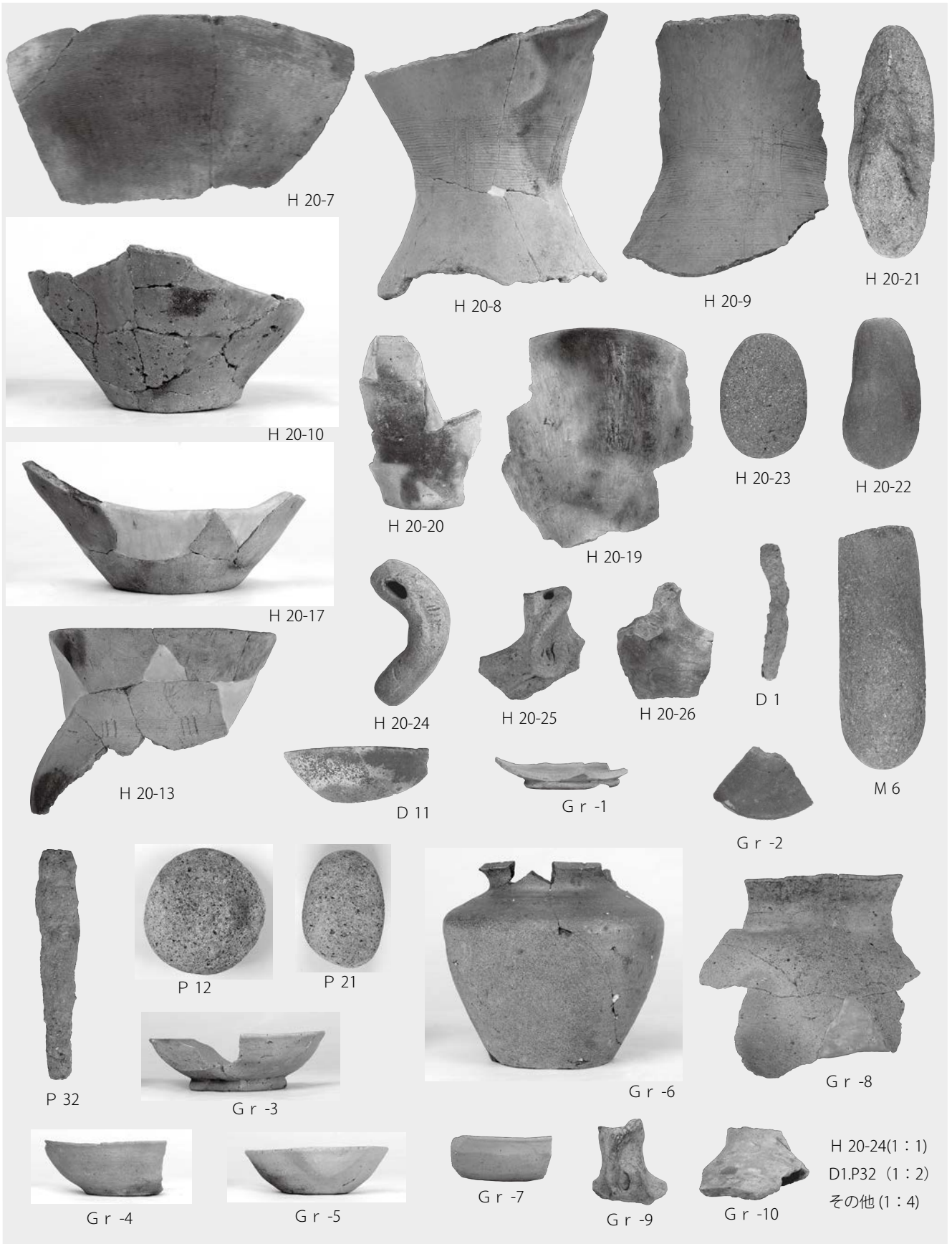
H 16-4



H 16-10

(1 : 4)





報告書抄録

ふりがな	すぼうばたいせきぐん だいずたいせきろく							
書名	周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第274集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すぼうばたいせきぐん だいずたいせき ろく 周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI	さくしながとろ 佐久市長土呂 1725 他	20217	7	36° 16.55	138° 27.29	20190404 ～ 20190510	600	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
周防畑遺跡群 大豆田遺跡VI	集落址	弥生 奈良 平安	住居址 土坑 溝状遺構	22軒 13基 7本	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 鉄製品			
要約	沖積地に舌状に飛び出す台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に弥生時代から奈良・平安時代と考えられる住居跡が検出された。調査された遺跡周辺部は部分的に流水によると考えられる砂層が堆積し、弥生後期の遺構はこの砂層下より検出された。長野県内では希少な「刻書紡錘車」が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第274集

周防畑跡群 大豆田遺跡VI

2021年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所

キクハラインク有限会社